

熊野神社 秋季例大祭

毎年十月第三土曜日・日曜日

熊野神社

京都市右京区京北上弓削町宮ノ本

① 祭礼と由緒

地域の概要

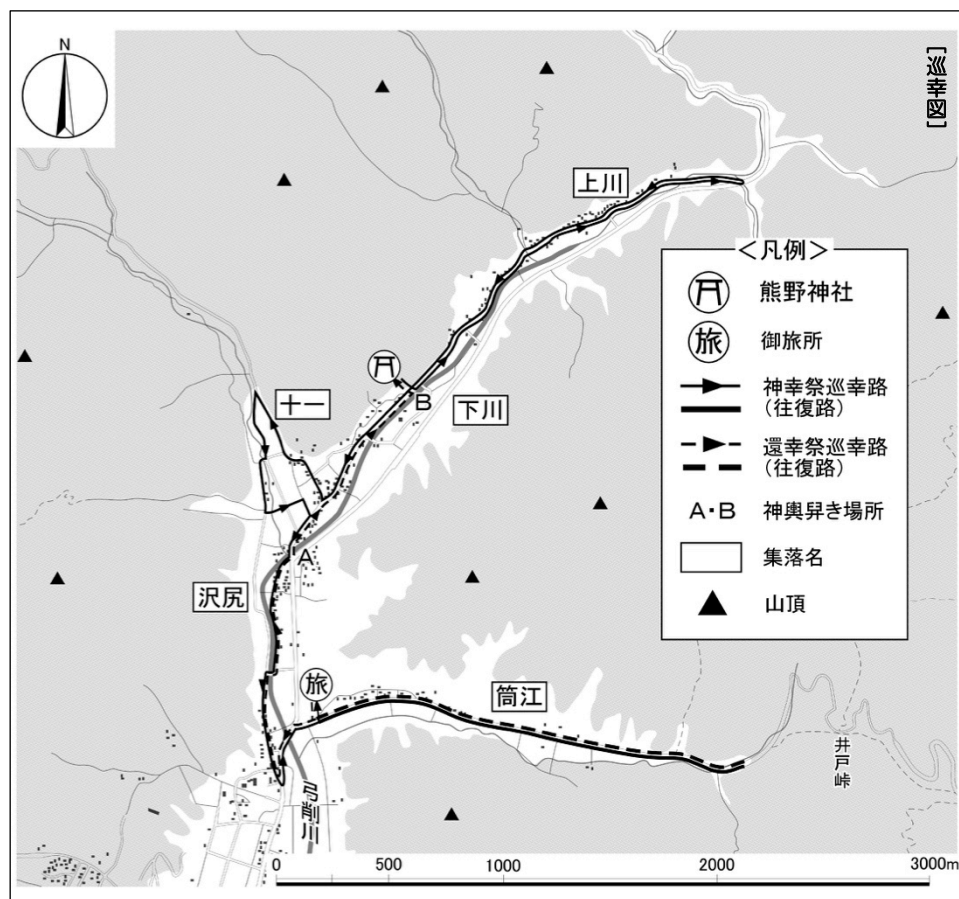
熊野神社の氏子圏は、現在の京都市右京区上弓削町（旧北桑田郡京北町大字上弓削上川・下川・十一・沢尻・筒江にあたる。上弓削町は、中世には和妙抄郷弓削郷に由来する弓削荘に含まれ、近世以降、上中・下中・沢・矢谷・清田・井崎・塩田・明石・田貫・室谷の村々と弓削郷十一か村を形成した。このうち上弓削村は、慶長七年（一六〇二）に幕府領、のち寛延二年（一七四九）頃に旗本武田氏領となった。元禄十三年（一七〇〇）丹波国郷帳には「河上村」・「沢尻村」・「十一村」・「筒江村」四か村に分かれて村高が記されており、武田氏領となつて以降も、大庄屋と呼ばれる武田氏の代官二名（寸田・佐伯氏）の下に四か村各々に庄屋・年寄・百姓総代が置かれた。

この地域は山間地であり、材木・薪炭生産を主な生業としてきた。特に上弓削村北部、現在の京都市右京区京北と南丹市美山町の境界付近には、「八丁山」と呼ばれる広大な山林が広がり、熊野神社の祭礼費用も八丁山からの収益で賄われていたという。

祭礼次第

十月の第三土曜日に神幸祭を、翌日曜日に還幸祭を行う。例大祭の準備にあたる頭役は「当番」と呼ばれ、下川↓上川↓筒江↓沢尻↓十一の順に一年交代、地区単位で務める。

神幸祭では午後三時三十分、代表総代以下、氏子総代（地区ごと）、上弓削区委員



長、各町内会長、各地区宮係等が出席し神事が執り行われる。神事によって神輿・中神輿・子供神輿に御霊移しが行われた後、渡御の巡幸行列が発する。巡幸には中神輿（かつての子供神輿・子供神輿が参加する。大神輿は平成二十二年（二〇一〇）から拝殿に安置されたままとなり、巡幸の行列には加わらない。午後六時三十分頃、行列が御旅所に到着後、神事を行ったのち宮司・氏子総代・町内会長等



鉾車



剣鉾と巡幸行列 (神村和輝, 平成 23.10.16)

神輿は車から降ろされ、徒歩の昇き手によって昇かれて熊野神社に還る。
行列次第は以下の通りである。

旗・大太鼓―剣鉾―大櫛―杉樹―子供神輿―中神輿―宮司―稚児 (小学生の女児、還幸祭のみ)―氏子総代―町内会長。

が御旅所にて直会を開く。熊野神社においても当番集落の氏子が交代で朝まで社務所に詰めている。
翌日の還幸祭は、午後一時三十分、御旅所神事の後、還御の巡幸行列が出発する。還御の行列は、各氏子地区で酒・お茶・菓子等の接待を受けながら午後六時前後に神社に着輿、神輿を境内で激しく振ったのち拝殿横へ安置し、還幸祭の神事を行い例大祭は終了する。神事の後すぐに神輿と鉾は境内内の神輿蔵に収納され、社務所では宮司・氏子総代・町内会長等の直会が行われる。

行列次第

渡御 (神幸祭) の行列は全て車によって氏子地区を回り御旅所に到着する。

一方、還御 (還幸祭) の行列は御旅所から筒江地区の境 (実際は井戸峠の入り口付近) まで車で往復した後、

由緒と歴史

熊野神社は、天福元年 (一二三三) 紀伊国熊野本宮より勧請されたと伝わり、寛正元年 (一四六〇) に本殿が焼失し、貞享四年 (二六八七) 再建、安政七年 (一八六〇) 拝殿が再建された。上弓削村はもと上中村に鎮座する弓削八幡神社の氏子であったが、文化・文政期 (一八〇四―一八四三) に八幡神社の神領竜子山林をめぐる争論し、八幡神社を離れ、熊野神社の氏子となった。その際に神輿一基が八幡神社より熊野神社に遷されたという『日本歴史地名大系 京都府の地名』。

例大祭は、かつては十月十四日・十五日に固定されていたが、サラリーマンの家が増え平日の祭礼参加に支障をきたすことから、現在は十月の第三土曜日と翌日曜日に変更されている。また、かつて鉾は差されて巡行していたが、電線が鉾差しの邪魔になるなどの理由で昭和四十年代初めには現在の形態となった。

② 剣鉾と組織

鉾 (名称は特になし)

概要

現在は軽トラックの荷台に載せられて巡行している。鉾は一基、鋳も鋳受も菊の意匠で、菊紋を鋳金具であしらった錦の旗 (吹敷) を付ける。棹は途中で切断されて半分程度の長さになり、剣には破損による補修痕が残る。なお、鉾は神輿とともに境内内の神輿蔵で保管しているが、蔵内には切断された棹の下半部が残る。また蔵内にかつて使われていた水色の旗と差革 (五志) 等が収められた木箱が残り、箱の蓋表には「鉾箱」、蓋裏には「奉納/明治参拾貳年/新調/寄附/沢尻組中」の銘がある。したがって、現在の剣鉾は明治三十二年 (一八九九)、沢尻地区の寄付によって作製されたと考えられる。

鉾差し

かつての鉾差しは、腰を使い鈴を棹に当てることで、鈴を鳴らしながら巡幸行列の先頭を進んだ。現在、鉾車に乗る担当者が鈴につけた紐を引き鈴を鳴らしな

がら進むのは、かつての名残であろう。鉾差しの後ろには旗を持つ男性が一名付いた。さらに電線が通るようになると、剣鉾を前に倒して電線を避けるため、先引きの綱を持つ男性がもう一名付いた。鉾差しは各氏子地区ごとに一名程度出され合計五名程度、自分の居住する地区内を差した。鉾差しは誰でもなれたわけではなく、地区の中でも特に屈強な男性が務めた。その多くは、炭焼きや山林労働者であったという。炭焼きは約九十キロもの炭俵を担いで山道を移動するなど、非常に体力があつたためである。

トウヤ飾り

鉾は神輿とともに神社で保管しており、例大祭当日に神輿蔵から出し、祭礼終了後すぐに神輿蔵に収納されるため、特にトウヤ飾りは行わない。

（神村 和輝）

八幡宮社 秋の大祭

毎年十月第三土・日曜日

八幡宮社

京都市右京区京北上中町宮ノ谷

① 祭礼と由緒

地域の概要

八幡宮社は、大堰川の支流である弓削川流域に位置し、その氏子区域はかつての丹波国桑田郡弓削庄、現在では右京区京北の上中・下中・下弓削の三集落である。ただし、祭礼にあたっては下弓削を西町（矢倉）と東町（清里）とに分けて、これら四つの地区が、祭礼年番を持ち回りで務める。

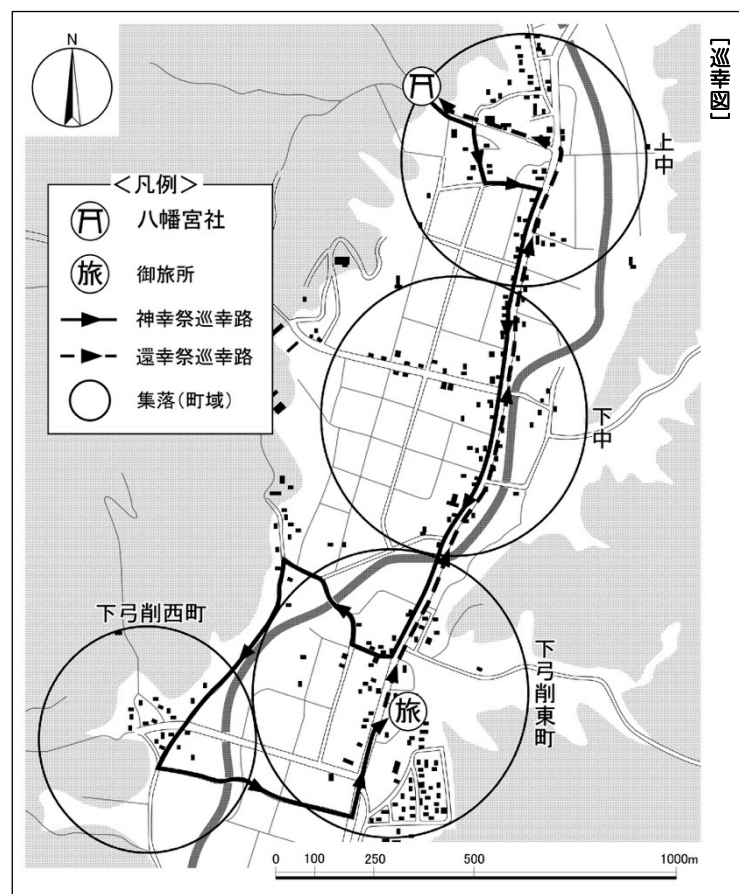
平成二十二年（二〇一〇）の年番は上中、二十三年（二〇一一）は下中であり、その後西町、東町の順となる。各地区では五人ずつ役員が選ばれ、さらにその中から一名責任総代が出る。そして当年の年番地区の責任総代が、年番総代として祭礼を執り仕切る。

祭礼の次第

例年十月第三土曜日の午後、本社での神事の後に神輿二基・剣鉾一基などの祭具を軽トラックに乗せ、御旅所へ向けて神幸祭が行われる。御旅所到着後、神輿などは拝殿に据えられ、翌日まで二名の氏子が交代で番をする。御旅所の所在地は右京区下弓削町勝山である。

翌第三日曜日の午後、御旅所での神事の後に還幸祭が行われる。巡幸列は、剣鉾の鉾差しを先頭に、昇かれた神輿二基などが御旅所から本社へ向かう。本社到着後、神事を経て祭礼は終了する。

なお、秋の大祭はもとも十月十四・十五日に執り行われていた。



行列次第（還幸祭）

剣鉾—三種神器—榊—唐櫃—男神輿—太鼓山—女神輿—宮司と稚児（稚児は木馬に跨る）が乗った軽トラック—女兒稚児—役員。ただし、この順番は厳密には守られてはいない。

由緒と歴史

社伝によれば、八幡宮社は孝謙天皇の時代（七四九—七五八）、勅命により宇佐八幡宮を勧請され、現在地には貞観元年（八五九）に奉祀されたとする。祭神は応神天皇、神功皇后、湍津姫命である。中世の弓削庄、近世の弓削郷全体の産土神であったが、化政年間（一八〇四—一八三〇）に上弓削と下弓削の間で争論が生じ、その結果上弓削は離れて、上中・下中・下弓削三集落の産土神となった。

② 剣鉾と組織

概要

剣鉾は一基のみ。特に名前はないが、扇に日輪を配した一対の金鰭がつく。

一方、剣鉾につける赤色の「錦」（幡ともいう）は、平成二十年（二〇〇八）に地元の家志家によって新調・寄贈されたものであり、鮮やかで美しい。

剣に以下のような銘があり、明治二十五年（一八九二）に新調されたことがわかる。表には「第壹鉾 寄附者 比賀 矢谷 草木 大町 株中」、裏には「明治廿五年 十月十五日 細工人 堀井新兵衛」とある。鰭受（額）の表裏には「八幡宮」という銘がある。明治二十五年以前に別の剣鉾があったかどうかなどは不明である。

剣鉾一式は普段は社務所に保管され、第三土曜日の午前中に組み立てられる。剣と棹を除いて、蓋表に「劔鉾附属品」と書かれた木箱の中に収められている。蓋裏には「明治貳拾五年十月吉日 寄附者 比賀、大町、矢谷、草木 株中」と書かれていた。また、剣は布に包まれて保管される。棹はそのまま屋内に置かれる。

なお、剣鉾は祭礼行列の一祭具という扱いであって、トウヤ飾りのように特別に祀られたり、飾られたりするようなことはない。

鉾差し

剣鉾の鉾差しは、還幸祭の途上において行われる。差し手は二名。その年の年番地区から差し手を選ばれる。格好は神輿舁手と同じ法被だが、腹に布を巻いてそれに鉾を載せて差す。

差し手の選任は各年番地区に任されており、統一した基準などはないようである。平成二十二年（二〇一〇）の差し手はそれまで全く差したことがなく、練習なしのぶっつけ本番で臨んでいた。対して二十三年（二〇一一）では、これまで三回差したことがあるというベテランが起用され、安定した鉾差しを見せていた。差し方は、前で一人が剣鉾を差して歩き、後ろで一人が幡を持って続く。後ろ

の一人は、剣鉾が前に倒れないように綱を引っ張ることもある。ただ、電線をくぐる際には、別にもう一人が手伝う場面も見られた。ぶっつけ本番の場合もあるように、決まった差し手の技術があるわけではない。適当に差しては倒して運び、しばらくしてまた差す。特に差す場所は決まっていなかったが、見物客が多いような場所では差していた。

③ 資料と記録

古文書史料など、特記すべきものはない。

（本多健二）



平成 23 年の剣鉾差し（本多健一，平成 23.10.16）

岡崎神社 氏子大祭

毎年十月第三日曜日

岡崎神社

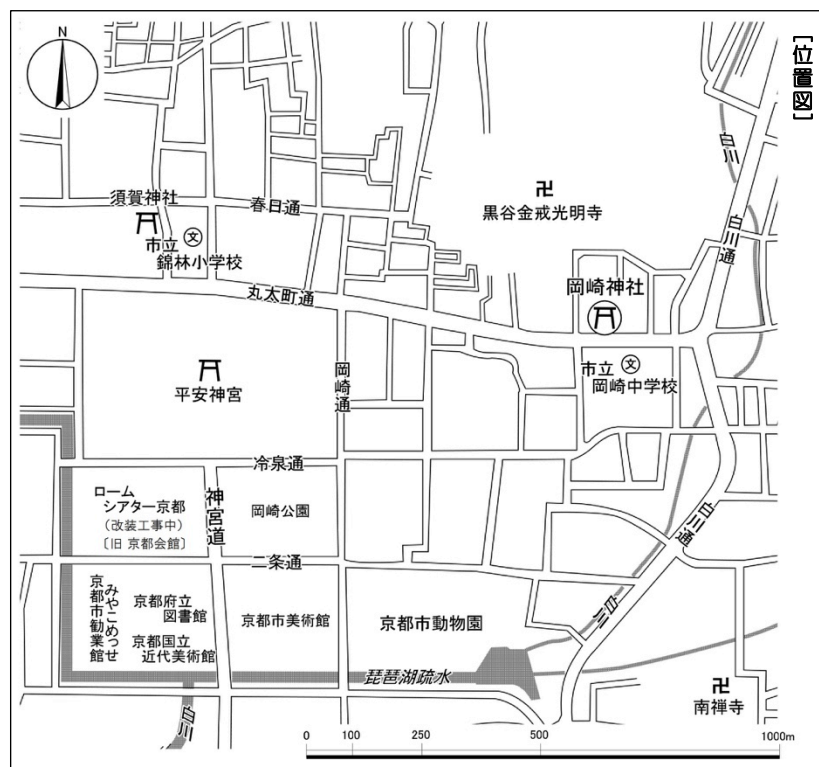
京都市左京区岡崎東天王町

① 祭礼と由緒

地域の概要

現在の岡崎とその周辺地域は、平安時代中期から貴族の別業（べつごう）の地として開発され、院政期には六勝寺をはじめとした大伽藍が建立、条坊制地割がひかれるという、きわめて都市的な開発が進んだ地域である。鎌倉時代には、東国への交通の要衝となり、南禅寺が造営される鎌倉末頃には、「京・白川」といわれ、京中と並び称されるほど人家が建ち並ぶようになった。ところが、応仁・文明の乱以降農村化が進み、江戸時代を通じて、基本的には、蔬菜栽培が盛んな都市近郊農村として存続し、聖護院蕪や聖護院大根といった京野菜の産地として名をはせていく。その一方、鴨川をはさんで京中に近接することから、都市機能の一端を担う悲田寺や二条新地といった新しい集落も形成される。また風光明媚な土地柄からか、近世後期には、小沢蘆庵、伴高蹊、香川景樹といった歌人や、諸芸に通じた富商世継寂窓らが居を構え、聖護院村にかけての地には、歌人の太田垣蓮月、日本画家の富岡鉄斎や中島華陽らが移住し、小さいながらも文化村の呈を示した。

明治に入ると、琵琶湖疏水の開削、博覧会の開催やそれに続く公園整備等の大規模土地開発により、岡崎の地は大きく変容を遂げる。具体的には、琵琶湖疏水の水を利用した工場の進出と、明治二十八年（一八九五）以降毎年のように開催される博覧会、そしてその系譜をひく平安神宮、公会堂や美術館、動物園、図書館などの公共建築の建設により、京都の文教地区として整備されていったことで



ある。そうした開発の影響を受けた岡崎村は大きく変容を遂げた。

岡崎村の氏神である岡崎神社は、もとこの地にあった東光寺の鎮守社であり、東天王社と称された（岡崎神社といわれるのは慶応年間から）。これに対して須賀神社を西天王社という。社伝によれば、もとは北白川にあったが、弘仁年間（八一〇 - 二四）に社殿が炎上し、その後貞観十一年（八六九）、播磨国に垂迹した牛頭天王をこの地に勧請したという。

十八世紀初頭の情報をまとめた『京都御役所向大概覚書』の岡崎村の項には、「神輿壹基 九月十一日御出 同月十六日神事 神幸岡崎四ヶ村中」とあり、岡



境内の能舞台に飾られた五基の剣鉾。左より栗鉾、葵鉾、鷹羽鉾、松鉾、菖蒲鉾
(青江智洋, 平成 22.10.16)

かつて岡崎神社氏子大祭には、氏子地域から剣鉾が奉斎された。十七世紀後半の地誌である『雍州府志』には、「九月十六日祭礼、鉾七本、神輿に先だつて、各々これを捧げて行く、これを鉾を祭と謂う、」とあり、神輿の巡幸に先立ち、七本の剣鉾が出されていたようである。現在神輿が一基存在するが、境内に据え置かれたままで巡幸はない。昭和初期頃までは早き出されて、川端通あたりまで巡幸していたと伝わる。また剣鉾も同様に、現在巡行は行われない。

祭礼の次第

崎村が四集落に分かれていたことがわかる。ほぼ同時期の地誌である『山州名跡志』には、上・中・下の三分のほか、近年黒谷光明寺惣門西側から南にかけて出在家という集落が開かれたとあるため、『京都御役所向大概覚書』でいう四集落は、この出在家も勘定してのことであろう。江戸中後期頃の作成と推定される「金戒光明寺境内外図」（金戒光明寺所蔵）には、金戒光明寺が鎮座する丘陵部の西側麓から南側麓にかけて、民家を示す草葺き屋根の家屋が多数描かれている。また同図には、現在の平安神宮の東側あたりに、「下岡崎」という記載があり、下岡崎は東天王社（現岡崎神社）の御旅所から南に続く道に沿った集落であったようである。

現在の祭礼は、十月の第三日曜日に行われる。（平成二十二年調査では十月十六日）祭礼当日、午前十一時から本殿にて神事が執り行われ、午後一時より神賑行事として、境内にて式包丁が奉納される。その後、巫女による湯立神楽が行われ、十四時半頃終了する。巫女は大阪府枚方市牧野から来る。

神輿や剣鉾の巡幸はないが、氏子町内では子供神輿を保有している町内がある。岡崎天王町南部地区、北浜町、西福川第一町内会、南御所町、疏水浜町、川東町であり、そのうちの五基のみ巡幸がある。また子供神輿を保有しない町内の子供たちのために、N建設の社長が寄附をして、近年「きりん神輿」が造られて巡幸するようになった。

子供神輿の巡幸は、大祭当日の午後、各町内から所定のコースを巡幸して、錦林小学校のグラウンドに集合する。全基集合すると岡崎神社に向けて出立する。平成二十二年の巡幸順は、稚児―南御所町―北浜町―きりん―西福川第一―疏水浜町―川東町の順であったが、この順番は特に決まっていなかったことであった。岡崎神社に到着すると、神主がそれぞれの子供神輿に対して祈祷してまわる。子供達は配られたお菓子をいただいて解散。町内の役員が、それぞれの神輿を解体収納して終わる。

岡崎天王町南部地区の子供神輿は、町内建て置きで巡幸はしない。世話役は年番制であり、氏子大祭の前日に、町内の者が寄って飾り付けを行い、岡崎神社の神主に清祓いをしてもらう。

大祭当日の昼すぎには片付ける。



子供神輿を保有しない町内のきりん神輿
(村上忠喜, 平成 24.10.16)

岡崎神社氏子地域の鉾

	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
犬鷹鉾	葛蒲鉾 (文)葛蒲鉾	栗鉾	唐胡麻鉾	葵鉾	牡丹鉾	松鉾	葵鉾	月龍鉾	水車鉾	菊鉾	鷹羽鉾	鉾名
いぬたかぼ	しろうぶぼ (下)もきしろうぶぼ	くりぼ	とろまぼ	あおいぼ	ぼたんぼ	まつぼ	あおいぼ	つきにりゅうぼ	みずくるまぼ	きくぼ	たかのはねぼ	よみがな
法勝寺町	南御所町	天王町	東天王町	天王町	天王町	北御所町	南御所町	天王町	東天王町	北御所町	北御所町	所有者(または旧所有者)の居住町名
個人宅	神社蔵	神社蔵	個人宅	個人宅	個人宅	神社蔵	神社蔵	個人宅	神社蔵	個人宅	神社蔵	現在の保管先
「感神院新宮」永享十年六月十一日			(1) 細工人・近江屋喜八 鋳屋平二郎 (2) 安政二年辰九月、鋳師鉄治郎		浦井庄左衛門治常							剣鉾の銘
永享十年(一四三八)			(2) 安政三年(一八五〇)		天明三年(一七八三)							和暦
	氏子大祭に飾る	氏子大祭に飾る		葵鉾は旧今宮		氏子大祭に飾る	氏子大祭に飾る		神社にて保管		氏子大祭に飾る	備考

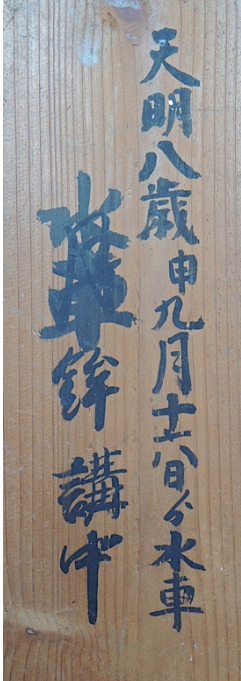
概要

② 剣鉾と組織

現在、同社の氏子域に、十一基の剣鉾が確認されている。いずれの鉾もその所有は個人か数家の共有であるが、このうちの六基（鷹羽鉾・水車鉾・葵鉾・松鉾・栗鉾・葛蒲鉾）はすでに町内では持ちきれず、神社に保管されるところとなっており、水車鉾を除く五基が、祭礼時に境内の能舞台に飾られる。その他の五基の鉾は、所持、もしくは預かりの家でどのように奉斎されているのかは不明である。



水車鉾の鋳（福持昌之、平成 24.2.24）



水車鉾の箱書き（福持昌之、平成 24.2.24）

水車鉾はその名の通り、水車の意匠の鋳である。剣が収められたと推測される箱には、「天明八歳申九月十六日水車／月鉾講中」と墨書があり、「月」の上から「水車」と書き加えられている。天明八年（一七八八）といえば、団栗橋近辺からの出火が燃え広がり、京都市中全体に甚大な被害をもたらした天明の大火が一月三十日に起きている。岡崎神社の氏子域も一部被害を受けるが、被害の中心は鴨川以西の洛中であつた。想像をたくましくすれば、大火による被害を受けた月鉾が流れて岡崎の氏子が所持するところとなり、鋳のモチーフを水車にして再生し、岡崎の氏子大祭の九月十六日に新たに出仕したのではなかろうか。

剣は明和二年（一七六五）に作製されたものであるが、京都市中では祇園祭の



犬鷹鉾の旧額（福持昌之 平成 24.6.4）

月鉾を除いて、月鉾と呼ばれる鉾の存在は現在のところ確認できていない。水車という珍しいモチーフは、白川の水を利用した畑作が発達していた岡崎ならではのものである。

③ その他の鉾

いまひとつ、特徴的な鉾として犬鷹鉾を挙げておきたい。

犬鷹鉾は江戸時代より特別視される存在であった。『日次紀事』には、「其ノ内一本、鉾劔ノ下ニ、埴ヲ以テ鷹ニ連獵犬一疋ヲ造リ彩色ヲ施ス、是ヲ犬鷹ノ鉾ト謂フ、其ノ傍ニ感神院之三字ヲ彫刻ス、疑ハ舊感神院之鉾力、」とあり、『雍州府志』には、「村人神宝と称して之を崇う」とある。現在は祭礼には出されず、保管されたままである。

この鉾は、諸方の記録等では劔鉾の原型とされてきたが、形態上から考えれば再考の余地があるように思われる。少なくとも、現在の劔鉾に直接つながるものではない。

現在個人宅に所蔵されている犬鷹鉾には様々な時代のもものが混在する。最も有名なものが、旧の神額である。これは、表に「感神院新宮」、裏に「永享十年六月十

一日」の文字が刻印されている。神額は木製の芯のまわりに鍔金具を施したもので、その作風より、刻印銘の通り永享十年（二四三八）作とみてもおかしくない。劔鉾の系譜に連なる遺品としては格別に古いものである。ほぼ

同じ意匠で同じく永享十年の銘が入っているものの、作風から江戸時代中期に製作されたとされる額（新額）も一点残されている。さらに、いわゆる他の劔鉾とはほぼ同型の劔も伝わっており、これらが、どのような構成で祭具として祀られたかについては、未だ明言はできない。（犬鷹鉾については総説・論説編参照）

③ 資料と記録

主要な調査報告・論文・地方誌

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所景観研究室編『京都岡崎の文化的景観調査報告書』（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課、二〇一三年）

若原史明「祇園會山鉾の沿革（二）」『風俗研究』五十、風俗研究会、一九二四年
田中緑紅編『京之面影』上巻（郷土趣味社、一九三二年）

（村上 忠喜）

山ノ内山王神社 山王祭

毎年十月第三日曜日
山王神社
右京区山ノ内宮脇町

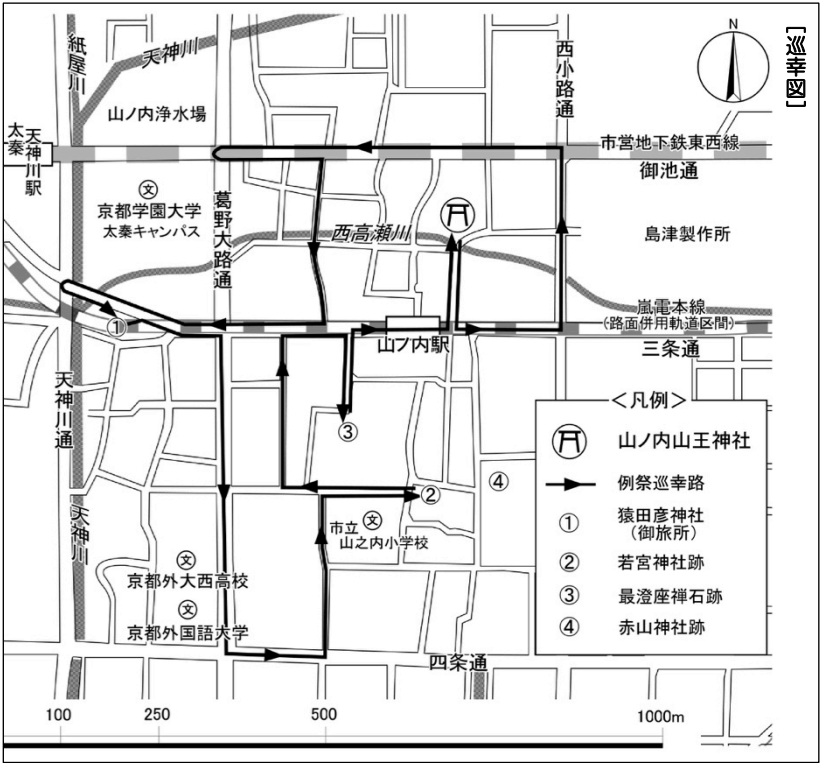
① 祭礼と由緒

地域の概要

山王神社は「山ノ内山王神社」とも呼ばれている旧山之内村の惣社で、氏子地域の範囲は概ね旧村域と一致する。現在千三百戸程の氏子があり、四百戸余の氏子によって奉賛会が組織されている。

山王神社の縁起は、境内立て札によると、白河天皇の時代に現滋賀県坂本の日吉山王大神を勧請したことに始まり、御祭神は、大山咋神・玉依姫神・大己貴神の三柱である。昭和二十七年に現宮司が就任する以前は、常勤の宮司は居らず、西院春日神社と宮司職が兼任されていたようである。また、かつて山ノ内村赤山町に奉祀されていた赤山神社、および同村瀬戸畑町の若宮神社が明治十一年（一八七九）に同社境内の現在地に遷座されている。山王祭の神輿巡幸では、現在その付近に碑が建てられている若宮神社旧跡の付近に祭壇が生まれ、神事が行われている。また、御旅所として用いられている猿田彦神社は、かつて山ノ内庚申と呼ばれた京都三大庚申の一つとして名高い社である。

旧山ノ内村は、東南を西院村、北を安井村、西は太秦中里村と天神川で接している。当村には、最澄に関連する旧跡が多くみられ、最澄生母の出生の地という伝承が残っている。歴史的にみれば、古来より近世に至るまで比叡山延暦寺の所領であり、享保十四年（一七二九）の山城国高八郡村名帳によると、吉田殿家料百五十石、相国寺料四百八十四石余とみえる。このようなことから、山ノ内という地域や、その祭礼の歴史的変遷を知る上で延暦寺や相国寺との関係を看過する



ことはできないであろう。

祭礼次第

山王祭は現在、毎年十月第三日曜日に執り行われ、その前日の土曜日に宵宮がある。宵宮の朝に手伝いに来る奉賛会の役員と宮司が神輿と劍鉾を組み立て、宵宮には神輿、劍鉾を本殿前に据え、集まった人々に披露する。

神幸祭当日は、正午過ぎに境内にて御霊遷しと神輿発御式が行われ、午後〇時半をめどに劍鉾や鳳輦などの行列が神社を出発する。午後二時頃に神輿は葛野大路三条の交差点にて辻回しを行うが、その他の行列は御旅所である猿田彦神社地

図①へ直行し、休憩をとる。神輿が御旅所に到着すると、神事が執り行われる。ここまですが神幸祭である。

午後二時半すぎをめぐりに行列は神社を出発し、午後三時半頃に若宮神社跡(地図②)において神事が行われる。午後四時頃、最澄の座禪石の付近(地図③)に神輿が到着し、神事が行なわれる。同時刻、神輿以外の行列は神社に帰還し、子供神輿や鳳輦などが神社山王殿に片付けられ始める。午後四時半頃、御輿が帰還し御霊遷しと還神祭が執り行われ、官司の挨拶の後に解散となる。ここまですが還幸祭である。

行列次第

神輿巡行の行列編成の際に参照されている「行列列立表」によると、「先導・鷹引・総奉行・佐留女童女・猿田彦大神・太鼓・社名旗・御祓禊・真禊・神猿剣鉾・龍剣鉾・御弓・御楯・日像旗・月像旗・御太刀・御幣・樂太鼓・樂人・御唐櫃・八乙女供奉・稚児列・御鳳輦・責任役員供奉・氏子総代供奉・子供神輿・官司供奉」とあり、列外として「外大行列責任者・椅子リヤカー・子供神輿菓子リヤカー・オープンカー運転」とある。なお、平成二十二年度の調査では、剣鉾は行列に参加せず、本殿前に居祭りであった。同社官司によると、京都市の剣鉾祭礼の調査を契機として、翌年から行列参加するように改めたという。翌平成二十三年度調査では、ほぼ「行列列立表」に示される通りに編成されていたようである。

由緒と歴史

前近代の山王祭の様相は詳らかではない。昭和初期頃には既に毎年十月十九日(神幸祭)・二十日(還幸祭)と開催日が固定されていたが、昭和三十年代に神輿の昇き手の問題や、職を持つ役員が増えたことから、第三日曜日に変更された。

それ以前の山王祭は、猿田彦神社に直行し、神輿が一泊していた。翌日に還幸祭で神社へ帰っている。神輿巡幸のルートは、葛野大路、御池通などの道路拡張によって変遷し、「上廻り」「下廻り」といった隔年のルートもあったようである。

現在の祭りの運営については、奉賛会が氏子から寄付を募り運営に当たっており、その際には氏子地域全体から寄付をお願いしている。なお、神輿巡幸の行列

には、氏子圏にある京都外国語大学の学生に依頼しているとのことであった。

② 剣鉾と組織

概要

山王神社には現在、猿鉾・龍鉾の二基の剣鉾がある。剣鉾の伝来についての詳細は詳らかではない。棹は白木と、黒漆に蒔絵の二本である。鉾の痕跡や差革が現存することから、当初は鉾を差していたことが推測されるが、その時期は不明である。昭和二十七年(一九五二)には既に、拝殿前に飾られる居祭りの形式となっており、昭和五十七年(一九八二)、白木の棹を二分割し、「オヤカタ」と称される台車に乗せた現在の形に仕立て直している。かつて、剣鉾には鍍金が施されておらず、昭和三十五年(一九六〇)頃に現官司である米川氏によって鍍金されている。吹散は、いずれもビロード生地である。ナツメ(鈴当)は、かつてはあったが、破損し取れてしまったため現存せず、リン(鈴)も代用のものを用いている。鉾の組み立ては、昭和二十七年に米川氏が官司就任にした後に、もともと剣鉾を管理してきた地元の古老から習ったという。ここで習得した紐の組み方は、本来の組み方とは異なるようであるが、地元の組み方の継承という意図から今日まで至っている。

現在では鉾仲間や当屋はなく、米川氏の官司就任以来、神社が管理している。鉾を納めていた櫃の上蓋(嘉永六年の年記あり)には、「山王講中」とあり、数人の村の有力者の氏名が記されている。この講組織があった頃には剣鉾に関する仲間があったものと推される。かつては、山ノ内にも当屋があった可能性もある。

猿鉾 (山王神社)

猿鉾の鋳受には「山王権現」とあり、タイコ(受金)は三巴が三つ、鋳の意匠は対に配された二匹の猿である。この猿の意匠については、その由来などといった詳細は明らかではない。しかし、平成二十三年度の神輿巡幸に参加しておられた

役員の方への聞き取りによれば、当社の鉾にみられる猿の造形は、日吉神社などにみられる古い形の「真猿」の造形に近いものであるという。つまり、鰐受と特徴的な猿の意匠という二つから、この鉾は比叡山・日吉大社との深い関係性を示しており、山ノ内という地域性を強く表象しているものであるといえよう。また、神輿の四角に取り付けられる猿の飾りの造形と酷似しているのは興味深いことである。

龍鉾（山王神社）

鰐受は額を象っておらず、鰐の意匠は二対の龍である。この龍の意匠についての由来などといった詳細は不明である。しかし、この龍の意匠は、神輿の四方に配された、龍の巻き付いた鳥居の意匠と類似しており、猿鉾と同様に御輿との関係性を示しているものと思われる。

（長谷川 奨悟）



龍鉾（長谷川奨悟 平成 23.10.17）



猿鉾（長谷川奨悟 平成 23.10.17）

住吉大伴神社 秋祭り

毎年十月第三日曜日(ただし十六日の例祭後)

住吉大伴神社

京都市右京区龍安寺住吉町

① 祭礼と由緒

地域の概要

住吉大伴神社は、もともと伴氏神社と呼ばれ、古代の豪族である大伴氏の氏神であった。貞観八年(八六六)の応天門の変により大伴氏が衰退すると、その後一帯を領有した藤原氏の一門、徳大寺家が住吉神を勧請したために住吉社と呼ばれるようになったといわれる。昭和十七年(一九四二)になって、前身の式内社伴氏神社の名称も加えて、住吉大伴神社と改称された。

住吉大伴神社の氏子地域は嵐電北野線(京福電鉄)を境として、北側が「上」(かみ)と呼ばれる龍安寺地区、南側が「下」(しも)と呼ばれる谷口地区の二つに分かれている(ただし、北野線の北側にある花園圓成寺町の一部と花園天授ヶ岡町は谷口地区に含まれる)。さらに、龍安寺地区は二つに分かれており、第一区は十四か町(衣笠御陵下町、衣笠下町、北齋宮町、中齋宮町、南齋宮町、垣ノ内第一区、垣ノ内第二区、垣園町、園垣町、北五反田町、上五反田町、中五反田町、龍中部、龍南部)、第二区は十か町(上西ノ川町、中西ノ川町、西ノ川中部、池ノ下北部、池ノ下南部、山田町、塔ノ下町北、塔ノ下町南、住吉・玉津芝町、圓成寺・天授ヶ丘町北)から構成されている。谷口地区は第三区として十二か町(梅園町一、梅園町二、梅津間町、谷口東町、谷口中町、谷口西町、寺ノ中町、圓成寺町、大藪町、三和町、天授ヶ丘町東、天授ヶ丘町西)から成っている。

祭礼次第

住吉大伴神社の秋祭りは、宵宮祭、例祭、神幸行列から構成されている。例祭は必ず十月十六日に営まれる。一方、神輿を昇く人手の関係から、神幸行列は十

月第三日曜日(ただし十六日の例祭後)となっており、その前日の土曜日が宵宮祭となっている。

祭礼の準備は、神幸行列が実施される一週間前の土曜日に行われる。この日は「オイデマツリ」と呼ばれ、氏子の家々で軒先提灯が吊るされるとともに、「オユミダケ」(御忌竹)が立てられる。御忌竹は二本一組で、京都学園高等学校・中学校横を流れる小川沿い(①)、谷口圓成寺町の小川沿い(東側)(②)、御室小学校正門前の交差点(③)の三か所に立てられる。御忌竹は神幸行列の翌日、月曜日に倒される。

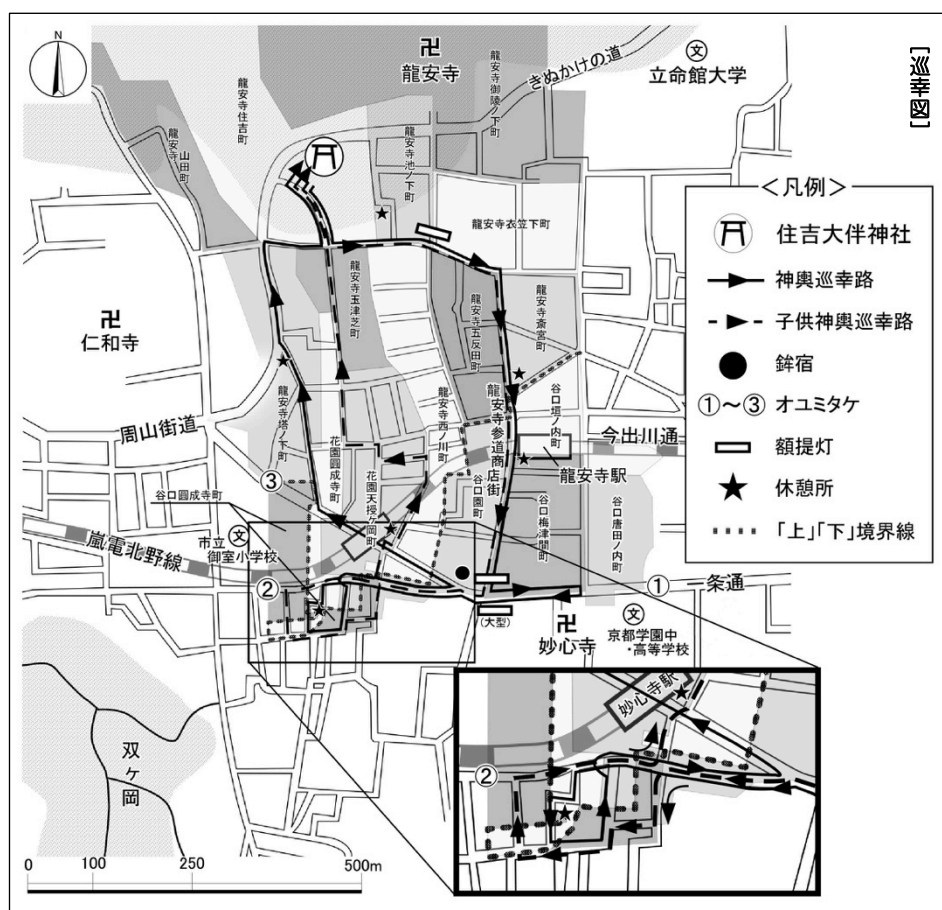
神幸行列前日の土曜日は宵宮祭で、午後八時より太鼓連による獅子の演技が奉納される。

神幸行列当日は、正午ごろに谷口地区から神輿方と剣鉾が発進する。この際、神輿方は神輿の轅(ながえ)に取り付けるナリカン(鳴鑼、鳴冠、鳴門)を鳴らしながら、住吉大伴神社へと向かう。やや遅れて龍安寺地区から神輿方が出発し、神社に到着してしばらくすると、神事が執り行われる。午後一時に行列が神社を出発し、龍安寺から妙心寺の間にある龍安寺参道商店街を通って、鉾宿までやって来る。巡行経路上には、鉾宿も含めて七か所の休憩所が設けられ、神輿方や参列者に飲食物の接待が行われる。



住吉大伴神社の剣鉾(今中崇文、平成23.10.16)

行列が休憩している間、一条通の妙心寺北門近くの歩道上で、太鼓連による太鼓の演奏が行われる。鉾宿は御旅所とも呼ばれており、一条通に面した座敷は格子戸が取り払われ、祭壇が設けられているのがみえる。ここでの接待では、おにぎりなどの軽食とともに、日本酒が振る舞われる。その後、子供神輿以外の行列は、谷口圓成寺町を回ってから一条通へと戻る。龍安寺郵便局前で再び太鼓連の



演奏が行われた後、行列は北上し、きぬかけの路を通って、午後五時前に住吉大伴神社に帰り着く。神幸行列において神輿は、台車などに載せられることなく、神輿方によって昇かれて移動する。

神社での神事後、神輿方は解散となり、剣鉾は鉾宿へと戻っていく。神輿方は、上と下に分かれ、それぞれに別の飲食店で足洗いを行う。

行列次第

行列は、太鼓を載せたトラック・先導（総奉行が務める）・猿田彦・社名旗（アルバイト一名、白丁を着用）・稚児・獅子・子供神輿・剣鉾・供奉者（十一名、袴を着用）・神輿、そして馬に跨がった宮司の順で巡行する。住吉大伴神社の神輿には二本の轆が取り付けられるが、龍安寺地区と谷口地区でそれぞれ一本ずつを担当して昇くようになっていくという。剣鉾と神輿以外は、鉾宿前での休憩後、先行して進み、花園天授ヶ岡町と龍安寺塔ノ下町を通って先に神社へと戻る。

由緒と歴史

住吉大伴神社の秋祭りがいつごろから行われているかについては詳らかでない。昭和四十三年（一九六八）から七年間、子供神輿だけの巡幸となっていたが、昭和五十年（一九七五）ごろになって神輿が復活するようになった。

また同時期に、神幸行列の日程が十月第三日曜日に変更されるようになった。ただし、例祭は十月十六日に固定されており、神幸行列は例祭後の日曜日に限定されている。ちなみに、平成二十二年は十六日（土）が例祭と宵宮祭、翌十七日（日）が神幸行列となり、二十三年は十五日（土）が宵宮祭、翌十六日（日）が例祭と神幸行列となっていた。二十四年には、例祭が十六日（火）の午前十時半から営まれ、宵宮祭は二十日（土）、神幸行列は二十一日（日）となっていた。

② 劍鉾と組織

劍鉾（谷口地区）

概要

住吉大伴神社の劍鉾は、特に決まった名称はなく、ただ「ケンボコ」と呼ばれている。鋳受には「住吉大伴神社」の銘があり、鋳は蝶と草花が立体的にあしらわれた意匠である。この劍鉾は江戸時代のものとも伝えられるが、劍の茎の銘と、劍を収める箱には明治三十二年（一八九九）という年号が記されており、この時に劍だけが新調された可能性もある。

かつては差されて巡幸行列に加わっていたが、現在では棹を短く切って台車（鉾車〔ほこぐるま〕と呼ぶ）に載せている。棹は二本あり、一本は飾り用で、もう一本は鉾を差すのに用いられていた。このうち、短く切ったのは飾り用の棹であるという。谷口地区で護持されており、祭礼の際には主に谷口園町の前田収男氏宅を鉾宿（御旅所とも呼ばれる）として祀られている。前田家で不幸があつたりなどして祀ることができない場合には、谷口梅津間町の岡田正治氏宅が鉾宿となる。

鉾祭の次第

劍鉾の組立ては、神幸行列直前の金曜日、午後七時から行われる。前田氏宅の二階と岡田氏宅に保管されている劍鉾と祭壇の部品が運び出され、組み立てられる。普段は神社に保管されている劍鉾の台車も、軽トラックで運ばれ、祭礼当日まで鉾宿に置いておかれる。劍鉾は鉾頭が組み立てられ、吹散とともに鉾宿の祭壇脇に飾られる。

翌土曜日の午後七時には、住吉大伴神社の神職が鉾宿を訪ね、神事が執り行われる。

神幸行列当日は、午前十時から（平成二十三年の調査時は特例として午前八時から）、準備が始まる。祭壇前に飾られていた鉾頭に棹が取り付けられ、台車に載せられる。最後に吹散が取り付けられ、巡行に備えられる。正午になると、谷口地区の神輿方とともに鉾宿を出発し、住吉大伴神社へと向かう。

巡行が終わると、台車から劍鉾を降ろし、棹も外して祭壇前に戻される。最終的な解体と片付けは翌月曜日の午前八時から行われる。

トウヤ飾り

鉾宿の一条通に面した部屋に、道路に面した格子戸を取り払って、祭壇が設けられる。祭壇には「住吉大伴神社」と書かれた神号軸が掛けられ、鏡と金幣が飾られる。また、祭壇には野菜や果物のほかに、束ねた稲穂、元揃えの昆布、スルメ、半兵衛麩などが供えられる。祭壇の両脇には鉾頭と吹散、ナリカン（谷口の神輿方が担当する）が飾られ、壁際には献酒を並べる棚が設けられる。

その他

劍鉾は昭和十年（一九三五）ごろ、もしくは戦後すぐまで、差して巡行していた。鉾差しは梅ヶ畑からやって来ていたという。その当時、鉾差しが着ていた法被と差革が劍鉾の鋳などを納めた箱に残っている。

かつての鉾宿は、現在とは異なる家が、一軒だけで務めていた。一時期、巡行が終わっても鉾を解体せず、一年中鉾宿に飾っていたこともあるという。

（今中 崇文）



鉾宿の飾り（今中崇文、平成 23.10.15）

福王子神社 秋季大祭

毎年十月第三日曜（大祭）

福王子神社

京都市右京区宇多野福王子町

① 祭礼と由緒

地域概要

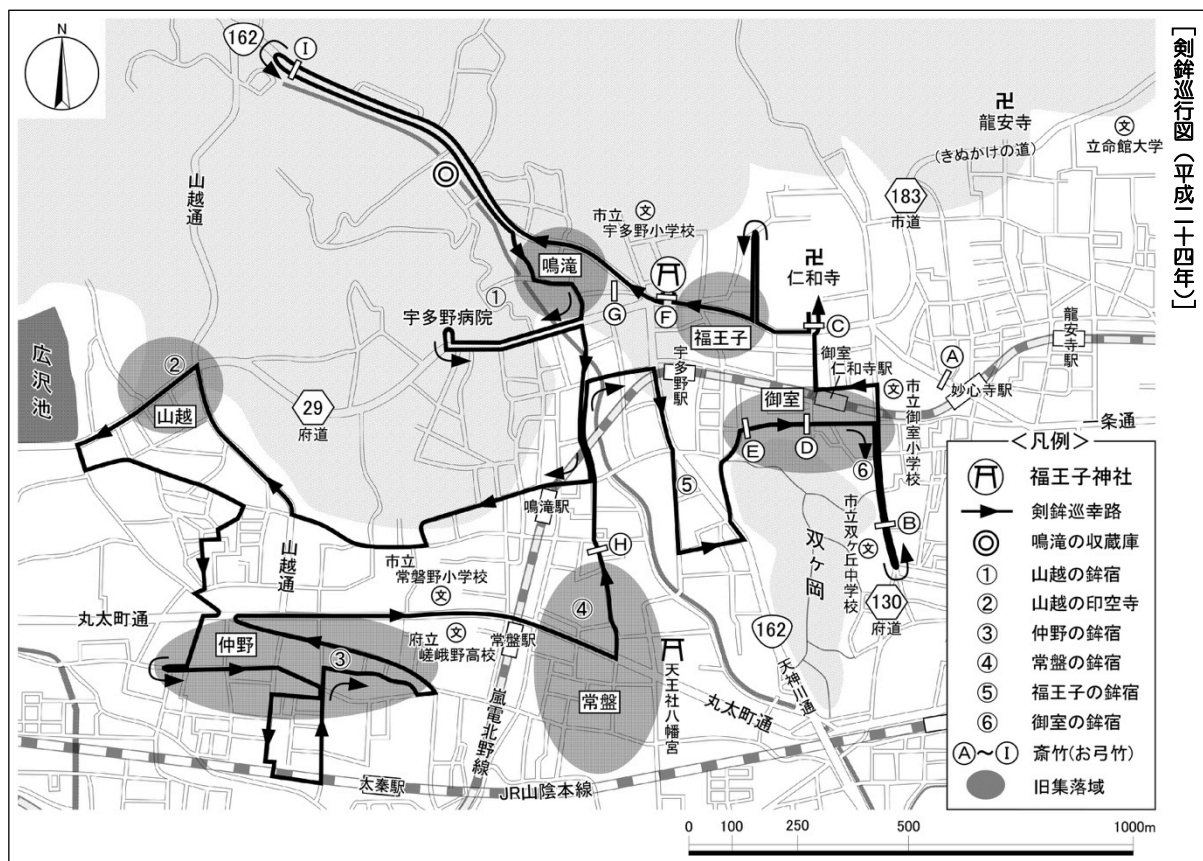
福王子神社は、周山街道（国道一六号）と衣笠宇多野線（市道一八三号・観光道路・きぬかけの路）の分岐点、通称「福王子交差点」の北に鎮座する。

創建は詳らかではないが、寛永二十一年（一六四四）に、將軍徳川家光の寄進により、仁和寺第二十一世門跡寛深法親王（かくしんほっしんのう）が復興した際、桓武天皇の皇子仲野親王の娘で、光孝天皇の后となった班子（ばんし）女王を祭神に迎えて「福王子宮」と称するようになったと伝える。仁和寺史料（本要記）によれば、寛永の再興では、籤（くじ）によって「当社の中、古宮の以東」に遷座したと記されており、もともと社があったものがこの頃までに荒廃していたことがわかる。

さて、班子女王は『日本紀略』によれば、昌泰三年（九〇〇）四月一日に没し、葛野郡頭陀寺辺に葬られたとある。頭陀寺跡は鳴滝のあたりとされ、福王子神社がその陵墓であるともいわれている。また、本殿の脇に、「夫荒（ぶこし）神」を祀っており、丹波国氷室から宮中に氷を献上する途中で死んだ役夫を慰めるために建てられたと伝える『雍州府志』。福王子の名の由来は、この夫荒神によるものとも、また班子女王が、宇多天皇をはじめ、多くの子宝に恵まれたためともいわれる。

なお、寛永の復興で造営された本殿（附棟札、石灯籠、拝殿、鳥居が重要文化財に指定されている。なかでも、本殿の屋根は木賊葺で、柿葺に使う柿板（厚一・三ミリメートル）よりも厚い木賊板（厚四・七ミリメートル）が使われている点が注目されている。

福王子神社の氏子地域は、御室川や井出口川（三室寺川）の扇状地もしくは台地（桂



川の段丘面に広がっており、北側は山が迫り、西は広沢池付近、南はJR山陰線付近、東は京福電鉄妙心寺駅付近に及ぶ。この地域には、御室、福王子、鳴滝、仲野、常盤、山越の六地区があり、これを地元では「旧六か村」と呼ぶ。これらの地域のほとんどは近世にはまだ仁和寺領であった。

貞享三年（一六八六）の『雍州府志』卷三には、「福王子ノ宮 西山鳴瀑ノ村ニ在リ、是レ斯ノ邊地主ノ神シテ、仁和寺ノ鎮守為リ、」とあり、この頃にはすでに、福王子神社はこの地の産土神であるとともに、仁和寺の鎮守社であったことが知られる。

現在は、宅地が間断なく広がっているが、もともと農村地帯で、周山街道に沿って流れる御室川の灌漑が、鳴滝、福王子、常盤などの耕地を潤していた。また、山麓および山中には溜池が多く設けられているのも、この地域の特徴である。

この六地区では、それぞれ剣鉾を護持しており、福王子神社の秋季大祭では神輿の巡幸に奉じられる。福王子神社の氏子総代は、六地区に分かれており、山越を除く五地区はそれぞれに「〇〇村奉賛会」、山越は「山越村明神講」と称している。

山越地区の明神講は、いわゆる旧住民で構成されており、その構成員が剣鉾を護持している。仲野地区では旧集落である太秦中筋町と太秦宮の前町だけで護持している。常盤では鉾株を持つ家だけで剣鉾を護持しており、これらは常盤の旧集落に偏在している。このように旧住民が剣鉾を護持する形態がある一方で、御室、鳴滝、福王子の各地区は、いわゆる新住民にも鉾宿がまわる体制である。ただし、このうち鳴滝地区、福王子地区には、かつては明神講があり、氏神祭祀に携わっていたという（小野恵美子『宇多野小史』）。このように福王子神社の氏子地域における剣鉾の護持の形態は、多様である。

また、仁和寺では犀鉾が伝えられており、秋季大祭の期間中、二王門の中に立てられる。

祭礼次第

福王子神社では、毎年十月の第二日曜日から第三日曜日までを、秋季大祭としている。

まず、第二日曜日は、巡幸祭であり、「お出で」とも呼ばれている。早朝、御室地区、福王子地区、鳴滝地区の若中が、近衛家の資料を管理する陽明文庫（右京区宇多野上ノ谷町）に向い、裏山の竹藪から高さ十メートルから十二メートルの真竹（マダケ）を十八本伐り出す。これは、祭りの期間中、旧村の境界に立てる斎竹（お弓竹とも言う）のためのもので、竹の先端は二メートルほど葉を残し、その先端に、紙垂を付けた櫛の枝を結んだ縄（長さ約三メートル）を吊るす。設置される場所は次の九か所である。

御室地区

龍安寺地区との境①、岡ノ本町（旧一条通）②、仁和寺の二王門前③、花園地区との境④、

福王子地区との境⑤

福王子地区

福王子神社の鳥居前⑥

鳴滝地区

福王子地区との境⑦、常盤地区との境⑧、

梅ヶ畑地区との境⑨

※①～⑨は地図中表示

いずれも、道の両側に一対、橋梁の親柱や道路標識などに縄締めで結わえて設置する。一時期、真竹の採集地に苦労していたが、近年、陽明文庫の協力を得られるようになった。

午前九時から、福王子神社で神輿の飾り付けが行われ、境内には提灯などが設置される。同時に、神社境内のすべての注連縄を取り替えるが、それは氏子地域の六地区が輪番で担当することになっている。

この日、各地区の鉾宿では剣鉾を組み立てて飾る。この日に行わない地区は、六日後の土曜日に飾るといふ。なお、常盤の鉾宿は、十軒が輪番であたるが、う



仁和寺の宸殿の上段の間（巡幸祭）（福持昌之 平成24.10.14）

ち二軒が福王子神社の氏子で、八軒が天王社八幡宮（右京区常盤東ノ町）の氏子であるため、およそ十年のうち二回しか、福王子神社の秋季大祭には剣鉾が出ない。

また、この日の午後には、福王子神社の神職が仁和寺へ金幣と白幣を持参し、宸殿に納める儀式がある。以下、平成二十四年十月十四日の調査をもとに、巡幸祭（お出で）の仁和寺における儀礼の次第を紹介する。

午後三時頃、福王子神社の神職が白の浄衣に烏帽子姿で、仁和寺を訪れる。手には金幣と白幣を重ねて持ち、本坊表門をくぐり、御殿入口で仁和寺の僧侶（教学部長）と黙礼を交わす。神職は、僧侶に先導され、宸殿へと案内される。宸殿の東側から下の間へ入り、そのまま西側の中の間へ進む。中の間では、上段の間に向かって左（南側）に僧侶、右（北側）に神職が座り、神職から僧侶へ金幣と白幣が手渡される。僧侶は、上段の間に行き、床の間に、向かって右側に金幣、左側に白幣を立てる。神職は中の間で留まり、床の間のほうを向いて座っているが、僧侶が中の方に戻ると、再び向い合って互いに一礼したあと、床の間に向きなおして、ともに般若心経を読誦する。その間、下の間にも僧侶が控えており、ともに般若心経を読誦する。読経の後、中の間で僧侶と神職が互いに一礼した後、宸殿を退出する。およそ、十五分ほどの儀礼の間、読経のほかは、無言で行われる。

六日後の土曜日、午後三時から、神職が仁和寺から白幣だけを持ち帰る儀礼がある。また、午後六時から御室地区、午後七時から福王子地区、午後八時から鳴滝地区の各鉾宿を神職が訪れ、鉾宿の神事を行う。

第三日曜日は、大祭である。それぞれの鉾宿から、剣鉾の鉾頭だけをトラックの荷台に載せて、神輿の巡幸に参加する。午後三時頃、仁和寺の勅使門から宸殿前に神輿が進み、式典を行った後、神職が金幣を受け取る。

以下、平成二十四年の調査をもとに、大祭当日の次第を紹介する。

午前六時三十分頃、鳴滝地区と福王子地区の子供神輿が福王子神社に参集し始め、午前七時頃に神主が子供神輿の前で神事を行った後、子供神輿はそれぞれの地域へ戻る。その頃、福王子神社秋季例祭の役員や、神輿の引き手である氏子地域の若中が集まり、午前七時三十分頃から神輿の準備を行う。同じころ、剣鉾を載せたトラ



剣鉾は車に載せて巡行する（仁和寺前）（高岡健二、平成 22.10.17）



仁和寺の宸殿前での儀礼（平成 20 年）（福王子神社提供）

ックが、神社の西側の道路脇に並ぶ。

午前八時から、神事が始まる。式典には、仁和寺からも参列がある。修祓、開扉、献饌、祝詞奏上の後、玉串奉奠となる。玉串の奉奠は、仁和寺執行長、奉賛会長、総代、宇多野小学校校長、御室小学校校長、常磐野小学校校長の順である。撤饌、閉扉の後、奉賛会長より挨拶があり、お神酒がふるまわれる。神輿が神職によって祓いを受けた後、午前八時三十分頃、巡幸列が発進する。福王子神社前の福王子交差点では、福王子子供太鼓（庚辰太鼓）が演奏され、神輿の出発を見送る。

巡行ルートは、まず国道一六二号を西進し、鳴滝松本町の外れまで進んで、引き返す。鳴滝蓮池町で南へ向かい、鳴滝地区の鉾宿へ向かう。鉾宿に到着すると、神輿引きによって神輿を高く「差上げ」た後、休憩となり、鉾宿の接待を受ける。巡幸列が鉾宿を訪問するたび、ここと同じような儀礼が行われる。

その後、市道一八三号を西へ進み、宇多野病院に立ち寄った後、ほぼ御室川沿い

に南下する。京福電鉄の踏み切りを越えると西へ折れ旧道を進み、鳴滝駅のそばを通り越す。山越通へ出ると北上して、山越の印空寺（西山浄土寺）へ向かう。

印空寺でも、神輿の差上げと接待がある。平成二十一年までは、鉾宿の当番宅にて鉾鉾が飾られ、神輿の接待もしていたが、家の前まで神輿が入りにくいこともあり、平成二十二年からは、府道二九号に面した印空寺で鉾を飾ることになった。

印空寺からは、府道二九号を西進し、広沢池のかかりを南へ折れ、太秦堀池町を通って、丸太町通に出る。そこから、丸太町通の南側一帯の仲野地区に入る。まず、太秦中筋町を南下し、丸太町通の一筋南を東へ進んで太秦乾町の市営住宅の周囲をまわり、北上して太秦宮の前町の中央の筋を東へ進む。仲野地区の鉾宿は、太秦中筋町と太秦宮の前町が隔年で当たるが、この年は太秦宮の前町の番で、そこで神輿の差上げと接待がある。

その後、太秦宮の前町の東端まで行くと、北西方向へ折れて、再び丸太町通へ出て東進し、市立常磐野小学校に向かう。常磐野小学校では、昼休憩をとる。

午後一時頃、常磐野小学校を出発し、丸太町通を東進する。京福電鉄の踏切を越えてしばらくすると、丸太町通で神輿の差上げが行われた。この年の常盤の鉾宿は、常盤北裏町の丸太町通の一筋北の通りにあるが、神輿の通行が困難であるため、その付近で行い、接待は子供神輿の宿で行った。

丸太町通から常盤地区を経て北に向かい、京福電鉄の踏切を越え、次の辻を東へ折れ、国道一六二号を南下し、福王子地区の鉾宿に向かう。この年は、宇多野御屋敷町に鉾宿があり、そこで神輿の差上げと接待があった。

宇多野御屋敷町の南端まで行くと東へ折れ、国道一六二号を渡って、双ヶ岡に沿って北上、そして東進する。府道一三〇号を南下し、御室地区の鉾宿で神輿の差上げと接待がある。その後、いったん市立双ヶ丘中学校の校庭に入って休憩する。そこで引き返して京福電鉄の踏切を越え、御室仁和寺駅の前を通って、仁和寺へ向かう。仁和寺の二王門の石段上では、御室子供太鼓の演奏で神輿を迎える。神輿が仁和寺前に到着すると、神輿は二王門の前に置かれ、鉾鉾はトラックのまま仁和寺の境内に入り、休憩となる。

午後三時頃、二王門前で神輿の差上げがあり、神輿が二王門から境内に入る。例年は、さらに勅使門から宸殿の前に進み、そこで式典があるが、この年は勅使門が修理工事のため、勅使門の外に祭壇が設けられ、そこで行われた。その式典とは、班子女王（福王子神社の祭神）と宇多天皇の母子の対面になぞらえたものといわれる。

祭壇の前に仁和寺の門跡をはじめ一山の僧侶が並び、福王子神社の神職、奉賛会会長、神輿昇き代表らとともに般若心経を読誦する。その後、祭壇の中央に立てられた金幣を門跡から神職に手渡され、奉賛会長はお供えの神酒を受け取る。門跡から挨拶を受けた後、神職が答礼し、神輿が退出する。この式典は三十分ほどである。

その後、鉾鉾と神輿が境内を出ると、再び二王門前で神輿の差上げがあり、福王子神社へ向かう。

午後四時頃、福王子神社前に到着すると、福王子交差点で盛大に神輿の差上げが行なわれ、その後、神輿は拝殿に飾られる。その間、鉾鉾は神社の西側の道路脇に待機する。祭礼の終了が告げられると、鉾鉾はそれぞれの鉾宿に戻る。

第三日曜日の翌日は、ゴエンの日と呼ばれる。午前九時から二時間ほどかけて、各地区の氏子総代ら三十名ほどで、神輿や提灯、斎竹を片付ける。

行列次第

平成二十四年の巡幸列の次第は、次の通り。

獅子（囃、氏子総代、太鼓※、福王子地区の鉾鉾※、鳴滝地区の鉾鉾※、山越地区の鉾鉾※、仲野地区の鉾鉾※、常盤地区の鉾鉾※、御室地区の鉾鉾※、神輿、神輿の台車、神輿の台（うま）※、奉賛会の会長と宮司を乗せた乗用車（※）はトラックの荷台に載せて巡行するもの

鉾鉾は、鉾頭のみをトラックの荷台に載せ、荷台の周囲に紅白幕を廻らせて巡行する。鉾鉾の順番は、御室地区、福王子地区、鳴滝地区、山越地区、仲野地区、常盤地区の順で、先頭を務めると翌年は最後尾に回る。この順番は、十月第二日曜日の巡幸祭の前日に、福王子神社で年一回の注連縄の取替えがあり、それを担当する地区の順であり、同時に獅子を出す役もその地区があたる。ただし、常盤地区の場

劍鉾の順番

前↓			↑後		
平成二十二年		御室	福王子	鳴滝	山越
平成二十三年	御室	福王子	鳴滝	山越	仲野
平成二十四年	福王子	鳴滝	山越	仲野	常盤
				御室	

合は、注連縄の担当があたっても、劍鉾を出す年（約十年に一度）でなければ先頭は務められず、獅子を担当するのみである。

神輿昇きは、地区によって法被の帯の色が違っているので区別できる。御室地区が紫色、福王子地区が赤色、鳴滝地区が緑色、山越地区が白色、仲野地区が黄色、常盤地区が橙色である。

なお、獅子は行く先々で、子供などの頭を噛んだりして、比較的自由に動き回る。
由緒と歴史

元禄二年（一六八九）の『京羽二重織留』の「四季行幸」の項では、九月二十六日条に「鳴滝福王寺大明神祭」とあるが、天明七年（一七八六）の『拾遺都名所図会』巻三には、「福王神社 仁和寺の西福王寺村にあり、祭所光孝天皇の後、寛平天皇の御母なりといふ、土人産沙神とす、例祭ハ九月二十八日、神輿一基」とある。大正期には、例祭日が九月十八日になり、その後、十月十一日が「お出で」、その七日後の十月十八日に神輿が巡幸していた。十月第三日曜日に変更したのは、昭和五十年（一九七五）からであるという（小野恵美子『宇多野小史』）。

福王子神社の社務所には、仁和寺の勅使門の前で鉾差しが劍鉾を差している古写真があるが、撮影年代は不詳である。鳴滝地区の古老によると「もとは鳴滝の人が差していたと父から聞いたと思う」とのこと、かなり以前のことであることがわかる。

仲野地区の古老の話では、昭和三十年代までは、劍鉾を差していたという。当時は、劍鉾の護持は青年団が担っており、鉾差しを招いていたという。その頃は、大祭が十月十八日で、その十二日前の十月六日が「お出で」だった。その日に、氏子

の六地区の会合があつて、「今年は劍鉾を出そうか」など話し合つたという。その結果、劍鉾を出すことになると、それぞれの地区で、嵯峨や高雄（梅ヶ畑に鉾差しを頼んで、練習に来てもらった。仲野地区では、当初は嵯峨のハチケンの井上氏に鉾差しを頼んでいた。ハチケンとは、かつて藪の中に家が八軒ほどあつたことからそう呼ばれていた）と、現在の嵯峨大覚寺門前八軒町である。その後、井上氏が高齢化したため、嵯峨の中院町の大西氏を紹介してもらつたという。

昭和五十六年（一九八一）五月、仁和寺で「開山宇多天皇一千五十年御忌法会」が執行され、この時、御室と鳴滝の劍鉾を、梅ヶ畑平岡八幡宮の鉾差しに来てもらつて、仁和寺境内の二王門から中門までの間を差した。

この時、始めは地元の人が差す計画で、神輿昇きの中からできそうな人を頼んで、直前の十日間ほど仁和寺の境内で、梅ヶ畑の鉾差しに指導してもらつた。しかし、立てて歩くのがやつとで、リズムをとって鈴を鳴らすことは到底できず、結局、当日は梅ヶ畑の鉾差しに差してもらつた。

その他

福王子神社の秋季大祭では、本社の神輿巡幸とは別に、戦後になって、旧六か村のうち山越地区を除く五地区で、子供神輿の巡幸が行われるようになった。

子供神輿は、巡幸に先立つて、福王子神社から御札を授かり、大祭当日は、それぞれの地区内を中心に巡幸する。（福持 昌之）

② 劍鉾と組織

御室鉾（御室地区）

概要

御室は、旧愛宕街道沿いを中心に広がる。現在は、御室大内、御室小松野町、御室芝橋町、御室岡ノ裾町、花園岡ノ本町、御室双岡町、御室堅町、御室住吉山町の八町で形成される。

平安期には小松郷立屋里という名であつたが、仁和二年（八八六）、大内山山麓に

仁和寺造営が着手され、延喜四年（九〇四）、宇多法皇が仁和寺内に御室を持ったために、仁和寺周辺の地名も御室となり、のち村名となった。昭和三十〜四十年に戸数増加のため六町となり、昭和六十年代に八町となった。

御室の剣鉾は、左右の鉾は金色に輝く阿吽の鯨と、銀色で白い波飛沫を表した意匠である。銚受は「福王子大明神」と刻まれた額で、額の縁には鳳凰があらわれている。受金は宝珠と波濤の意匠である。棹は、黒漆塗りに螺鈿や金細工が施されたもので、長さは約五メートルである。剣は、平成二十年頃に新調したが、古い剣も残っている。鈴には、「明治十三年卯十月」の線刻がある。吹散は、百年ほど前に作られた赤地に金糸で菊の刺繍のものがあるが、平成二十二年に淡い横縞に金糸で菊の刺繍をした吹散を新調した。

銚宿は、八町の持ち回りで、平成二十一年は御室芝橋町、花園岡ノ本町であった。ただし、剣鉾の保管は御室の八町の共有の倉庫で行っている。

鉾祭りの次第

大祭の前の週に準備を行う。福王子神社で神輿を出し、拝殿で飾り付けをするのに人員を出す一方で、倉庫から剣鉾を出して銚宿に飾る。剣鉾は、座敷に銚頭と吹散を飾り、玄関の脇や門先など屋外に棹を立てる。

大祭の前日は、午後六時より、銚宿に福王子神社の宮司を招いて神事を行う。その後、午後七時頃から、各町の町内会長を中心に会食を行う。七時半より、銚宿前で子ども太鼓の披露があり、それが終わると会食も概ね終了する。

十月第三日曜日、大祭の当日は、午前六時過ぎに神輿の舁き手がいったん銚宿に集合し、銚宿の当主が取り仕切って、神酒を回す。午前七時頃に福王子神社に到着し、他の宿の人々が来るのを待つ。その後、銚が合流し、神輿と行動をとにもする。巡行路は他の銚と同様である。

銚差し

銚差しが着用したと思われる、紺の祭半纏が残されている。左右の襟には「御室」と白抜きで記されており、裾は波のような模様が白抜きで



御室地区の銚宿の祭壇（福持昌之、平成 24.10.20）



御室に伝わる銚差しの帯（溝邊悠介、平成 23.10.15）

表されている。背には一対の鯨があらわれている。

また、銚差しのための帯も残されている。剣鉾の棹尻を受ける部分は、革製で、布の部分は緑色である。

トウヤ飾り

銚宿の座敷の床の間に「福王子大神」の神号軸をかける。これは「仁和寺門跡大僧正惠猛敬書」とあり、仁和寺三十八世門跡の石堂惠猛の筆による昭和初期のものである。神号軸の前には、八足台を置き、二段の祭壇を組む。上段には餅や神酒、洗米などの供物を載せた三方を、下段には海の幸、山の幸などを載せた三方を供える。祭壇の脇には、剣鉾の銚頭と、吹散を飾る。

門先には、棹の建柵を設け、そこに剣鉾の棹を二本、立てる。いずれも銚頭はつけない。

その他

子供神輿は、銚宿とは別に、昭和六十年から約二十年間、仁和寺門前の安田家で奉りしていたが、その後、花園岡ノ本町、西町、南部町、中町、御室小松野町、双ヶ丘東の六つの地区の輪番で出していた。平成二十三年からは、蓮華寺にて奉って

いる。子供神輿の神事は、宵宮の前日に行われている。

(工藤 紗貴子)

福王子鉾 (福王子地区)

概要

福王子は、福王子神社周辺から東南へ広がる地区で、もともと、福王子神社の東側、街道沿いの集落であった。現在でいうところの宇多野福王子町である。今では南へ宅地が広がり、さらに宇多野御池町、宇多野御屋敷町、宇多野上ノ谷町、宇多野芝町、宇多野柴橋町、宇多野長尾町、宇多野馬場町、宇多野北ノ院町、宇多野法安寺町が福王子地区に含まれる。ただし、鉾宿をするのは、宇多野南部地区、宇多野法安寺町、宇多野福王子町、御室大内地区、宇多野御池町の二地区三町が輪番である。鉾の当番になると、町内地区内で鉾宿をどこにするか話し合いで決める。

福王子の劍鉾は、左右の鉾は鳳凰で、向き合うように配置される。鳳凰の尾羽の先には、宝珠が輝く。鉾受は福王子大明神と書かれた神額である。この鉾受は、以前修理をした際に、中の木枠に「享保元年九月／京二條通堺町西入町／鉾屋市兵衛」等の墨書が見つかり、享保元年（一七一六）の製作であることがわかった。受金は五三の桐である。劍の茎には「戊辰九月吉日」「日暮西江入中村町／かざりし／井上兵兵衛」と刻まれている。中村町は、上京区の下立売通日暮西入中村町のことである。平成二十一年十月に吹散を新調し（電子ジャガード織、菊紋は手刺繡、同じ頃に鈴も新調した）。

また、古い劍の茎に「日暮西江入中村町／かざりし／井上平邊兵衛」「子村／戊辰九月吉日」と銘があり、年代は明らかでないものの、下立売通日暮西入中村町の鉾師に発注していたことがわかる。

棹は、巡行に使用していた螺鈿のものと、練習用と伝わる白木のものがある。

劍鉾一式の保管は、本来は、各村で神具を管理するものとされているが、現在は福王子神社の境内の倉庫で管理している。

鉾祭りの次第

十月第二日曜日の「お出で」の日に、午前中は福王子神社で神輿の準備をし、午後から鉾宿で鉾が飾られる。大祭の日の前日には、鉾宿に関係者が集まり、午後七時頃より福王子神社の宮司を招いて神事を行った後、直会を行う。その経費はもともと、鉾宿にあつた家が負担していたが、近年（今回から）は、鉾町で負担することになった。

十月第三日曜日の大祭当日は、午前六時頃から劍鉾の鉾頭を軽トラックの荷台に載せる作業にかかる。荷台の上に箱を載せ、白布を敷く。その上に、鉾頭を、祭壇に飾るのに使用した台をそのまま使って設置し、荷台の周囲には紅白幕を廻らす。紅白の紐で、鉾受の直上、劍の根元部分と荷台の周囲のフック四か所とを結び、鉾頭を固定する。運転席の後ろに、「福王子神社／福王子村奉賛会」と染め抜いた赤い旗を設置する。なお、軽トラックはレンタカーである。

午前八時には福王子神社に集まり、鉾宿の当主、福王子村奉賛会の役員、町内会長らが大祭の朝の式典に参列する。服装は、かつては袴であったが、現在は略礼服に白ネクタイである。

神輿巡幸では、鉾宿の当主は、劍鉾とともにトラックに乗車して巡行する。神輿は鉾宿に到着したら、高く「差し上げ」をする。鉾宿は神輿の昇き手に対して、振舞いをするようになっていた。

巡幸後、劍鉾は鉾宿に戻り、その片付けは翌日に行われる。大祭当日の夜は、食事を済ませた後、午後七時頃に鉾宿に集まり、翌日の片付けの打ち合わせ等を行う。



福王子地区の鉾宿の祭壇（福持昌之、平成24.10.20）

トウヤ飾り

平成二十三年は宇多野御池町、平成二十四年は宇多野御屋敷町が鉾宿の当番だった。鉾宿がどこであるかに関わらず、鉾の組立ては、福王子村の氏子総代が中心になって行う。

近年、鉾宿では、ガレージに祭壇を設置することが多くなった。平成二十四年の鉾宿は、国道一六二号に面したガレージに飾られた。まず、ガレージの中に角材で骨組みを作って幔幕を張り巡らし、儀礼のための空間をつくる。そして、吹散を掛け、それを背景に鉾頭を設置する。鉾頭の前に祭壇を組み、神饌を供える。鉾の祭壇の脇には、子供神輿を安置し、やはり祭壇を組む。ただし、ガレージの外側はすぐ歩道で、棹を立てる余裕がなかったため、別の道に面した玄関脇に二本並んで立てられた。

神饌は鉾宿が用意し、御神酒は村の人が納めに来るといふ。

その他

福王子地区では、旧住民と新住民（入りの）の区別はあまり見られない。町内に住んだ段階で福王子神社の氏子として認められ、祭礼に関わることができる。しかし、個人の宗旨を尊重し、参加の強制はしていない。

なお、子供神輿は福王子神社の神輿巡幸とは別行動をとっており、福王子子供庚辰太鼓と一緒に町内を回る。

（福持 昌之）

鳴滝鉾（鳴滝地区）

概要

現在の右京区の中で、「鳴滝」を冠した町々および太秦三尾町、太秦中山町を合わせた範囲が、おおむね江戸時代の山城国葛野郡鳴滝村にあたる。これらの地域が福王子神社の氏子として「鳴滝村奉賛会」を組織し、鉾を保有・守護している。

旧鳴滝村では、昭和五十四年（一九七九）より、おおそ北から南へA・B・Cの三地区に分け、それぞれの地区が持ち回りで「鉾宿」を担当するようになってい

る。鉾宿となる家は特に決まっておらず、その地区の氏子総代が周旋して当年の宿を決めている。それ以前の鉾宿は氏子総代の家で行っていた。奉賛会の氏子総代は、各地区から二名ずつ選出され、六名で運営している。

鉾の由緒は不明であるが、銚の箱書きによれば、文政三年（一八二〇）に「高倉 銚師吉兵衛」によって製作されていることがわかる。ただし、現在の銚は大型で見た目も新しいので、文政年間の物とは考えづらい。

鉾は一基あり、剣の茎の銘には片面のみ「前」とある。銚受は額の形で、表裏ともに「福王子大明神」の文字が入る。銚の意匠は飛龍であるが、なぜ飛龍が選ばれたのかは不明である。吹散は、赤地に金糸で十六弁菊と飛龍の意匠が施されている。箱書によれば、昭和六年（一九三一）の再調である。棹は新旧二本あり、どちらも鉾宿前に立てられる。古い棹は「練習用」とのことである。

現在の鉾は、「お出で」から大祭までは鉾宿に飾られ、大祭当日は軽トラに載せられて巡行している。しかし、古い箱の中に三組の差革や、差し手の物らしい祭半纏が残っているのか、かつては鉾を差していたと思われる。ただ、年配者の中でも、鉾差しを見たことがあるという人と、ないという人に分かれており、差していた時期の特定などはできなかった。

差革は、地元では「胴巻き」と呼ばれていた。革の部分を袋状にしたものが二点と革が袋状になっていないものが一点の計三点あった。祭半纏は、背に紺地に白で「飛龍」と染め抜かれている。

鉾祭りの次第

旧鳴滝村では、大祭一週間前の日曜日（お出で）の朝六時から準備を始める。まず鳴滝川西町の倉庫に保管してある鉾や子供神輿を鉾宿に運び、午前中にお飾りを設える。この間に、かつての村の境



鳴滝地区の鉾宿の祭壇（本多健一、平成24.10.14）

界などに「御弓竹」（御斎竹）を立てる。具体的には高雄との境界に二本、福王子との境界に二本、常盤との境界（中道・蓮花寺町）に二本、それに福王子神社鳥居に二本の計八本である。また、村の中心にあたる鳴滝本町の竹村造園前の辻には提灯を掲げる。その後、鉾宿に交替で誰かが詰める。

大祭前日の土曜日が宵宮であり、先の辻から福王子神社にかけての沿道には露店が並ぶ。この日の午後八時、鉾宿に宮司を迎えて神事が行われ、その後、午後十時近くまで直会が行われる。平成二十四年は、この夜、約八十名程度の人が参集した。

大祭当日、午前七時に劍鉾を軽トラックに載せて神社に向かい、午前八時の神事の後、午後四時過ぎまで神輿巡幸を先導する。この間、旧鳴滝村内では鉾宿の前で神輿の差上げが行われた。また子供神輿は、神社の神輿とは別に、旧村内を巡幸する。劍鉾が鉾宿に戻った後、翌日に片付けを行う。

鉾差し

古老によれば、戦前は鉾を差していたが戦時中は途絶えたという。昭和二十年頃からは小規模ながらも祭りは復活を始めたが、居祭りが多く、本格的に巡行しだしたのは昭和二十五年ごろのことである。また、かつての鉾差しは高雄（梅ヶ畑）から来ていたともいわれている。

トウヤ飾り

劍鉾を組み立て、飾るのは、毎年決まった人が二人ほどで担当しているが、獅子は氏子の人が飾る。

吹散を掛け、その前に劍鉾の鉾頭を飾る。その前に供物を供え、賽銭箱を置く。劍鉾と並んで、子供神輿も安置し、供物を供える。門先には劍鉾の棹を二本立てる。

その他

旧鳴滝村には古文書などはほとんど残されていない。かつてあった村の集会所を取り壊す際に、古文書類の多くを処分してしまったとのことである。

毎年、十月になると、鳴滝子供太鼓の練習が始まり、祭礼当日に披露する。子供太鼓は平成十二年に発足し、現在に至っている。

（本多 健一）

概要

山越鉾（山越地区）

現在、一条山越道交差点から西へ向かう、府道二九号沿いに民家が集中する山越地区は、早くから植木職が活躍していたことが知られ、古くは慶安二年（一六四九）に鳴滝の接木業者として三右衛門の名が見える。その後、京都では植木屋仲間四組が形成されたが、鳴滝・福王子・山越の三か村で西組を組織した。現在も、この地域には、その流れを汲む造園業者が多い。

山越地区は、山越西町、山越東町、山越中町、山越巽町の四か町からなり、劍鉾はこの地区の十三軒からなる明神講で護持している。

山越地区の劍鉾は、鍔は金色に輝く昇り龍が左右にあしらわれており、鍔の下部は銀色の波濤、上部は龍と同色の雲が添えられている。また、鍔の最上部には、金と銀で日月が表現されている。鍔受は「福王子大明神」の神額で、受金は菊紋の意匠である。吹散は茶系の地に波と波濤が織りあらわされており、上部と中部に菊紋があしらわれている。

劍鉾の保管は、かつては鉾宿が一年間預かっていたが、近年は神号軸と錫の瓶子のみ鉾宿で保管し、その他の鉾一式は印空寺（西山浄土寺）で保管してもらい、祭りの時期になると、鉾宿の家へ運んで飾っていた。しかし、明神講の成員の家の中には、家の前の道が狭く、神輿が入って来れないため接待に不便であるといった理由などで、平成二十二年から、飾り場および接待所も、府道二九号に面した印空寺で行うことになった。

鉾宿で劍鉾を飾っていた頃は、鉾宿が当たると、劍鉾を飾る部屋の畳と障子を新調するのが慣例であった。

印空寺の創建は元禄元年（一六八八）、美濃国の立政寺の印空上人が仁和寺門跡覚隆法親王より土地を拝領して開山したと伝えられている。山門前に「旧御室御所茶所」と記した石碑があり、仁和寺との関係の深さがうかがえる。

鉾祭りの次第

十月第二日曜日の「お出で」の日に、午前中は福王子神社で神輿の準備があり、

午後から印空寺で、鉾宿の当番と氏子総代（二名）を含めた数名が剣鉾を組み立てて飾る。鉾宿の当番は、スルメと洗米を供える。スルメは、火であぶったものと決まっている。

十月第三日曜日の大祭当日は、午前七時頃から剣鉾の鉾頭を軽トラの荷台に載せる作業にかかる。荷台の上に箱を載せ、その上に、鉾頭を、祭壇に飾るのに使用した台をそのまま使って設置し、荷台の周囲には紅白幕を廻らす。紅白の紐で、銚子の直上、剣の根元部分と荷台の周囲のフック四か所とを結び、さらに鉾頭の台とフック四か所とを結んで、鉾頭を固定する。運転席の後ろに、「福王子神社／山越村明神講」と染め抜いた赤い旗を設置する。剣鉾は、巡行の際には吹散と鈴は付けない。

午前八時には福王子神社に集まり、神事に参列する。巡行終了後、午後五時頃に印空寺へと戻る。その後、印空寺を会場にして明神講で直会をする。

大祭の翌日をゴエンサイと称し、午前八時から片付けをする。月曜日なので、出勤する人が多く、午前九時頃には片づけを終了させている。かつては、この日に剣鉾一式を次の鉾宿へ運んでいた。

トウヤ飾り

鉾宿は明神講の成員が輪番であたるが、剣鉾の飾り場および神輿の接待は、平成二十二年から印空寺で行っている。

印空寺で鉾飾りを実施するにあたり、印空寺は法人として氏子に加盟した。その一方で、明神講の成員が鉾宿を務める制度は残っており、飾りの場所として印空寺を借りるという形になっている。

印空寺の床の間に福王子大明神の神号軸を掛け、その横に吹散も掛ける。床板から床框にかけて、菰を敷く。そして、朱塗りの三方を置き、神酒、洗米等を供える。床の間の前に、剣鉾の鉾頭と、「福王子神社／山越村明神講」と書かれた赤い旗を飾る。

その他

山越村明神講所蔵の「講宿覚帳」は昭和二年以降の「伊勢講之宿順」「明神講之宿



山越地区の剣鉾
(小谷あさぎ、平成 23.10.17)

帳」「愛宕講之宿帳」「伊勢代参之順」「地蔵盆宿帳」「氏子総代順」が記されている。これによると、明神講は昭和二年から現在に至るまで絶えることなく継承されているが、伊勢講は昭和三十七年をもって「当分中止」、愛宕講も「平成十四年で中止」となったことがわかる。また、伊勢代参は昭和二十三年から昭和四十一年まで中断したが、愛宕講と同じく平成十四年まで続いた。

地蔵盆については、「講宿覚帳」では昭和十五年から二十八年の間のみ記載があるが、後述の「勘定帳」には大正時代に地蔵盆の経費支出の記事があることから、それ以前から宿制度があった可能性もあり、詳細は不明である。

「講宿覚帳」では、氏子総代は昭和十年以降の記載であるが、これも現在まで書き継がれており、一貫して任期が二年間であることがわかる。なお、地元の方の話によれば、氏子総代の交代は、毎年十一月十八日の「お火焚き祭」の日に行なわれ、引き継ぎの際には杯を交わす簡単な儀礼があるという。

もう一点、山越明神講が所蔵する「勘定帳」は、明治二十四年頃からの記録で、総代順や明神講の記載もある。そのなかに、

明治四拾式年度、明神講當屋佐野丑之助ナ
リシ時、什物當屋ニ預ケアリシガ、不幸ニ
シテネズミガ見送ヲカミ大變損失シ田中政
七ニ托シテカケツギシタリ。カケツギ代金



印空寺の門前で神輿の到着を待つ(福持昌之、平成 24.10.21)

式田四拾九銭山越町中ヨリ割付ケテ直シタリ

とあり、明治四十二年（一九〇九）に吹散の鼠害とその修理の経緯が記されている。

（福持 昌之）

概要

仲野鉾（仲野地区）

仲野地区は、明治の頃は仲野村と呼ばれ、戸数は四十一戸であった『京都府地誌』葛野郡村史二。旧仲野村は、約四十年前に丸太町通が延伸した後に太秦開日町・太秦北路町・太秦京ノ道町・太秦御領田町・太秦三尾町・太秦中筋町・太秦宮ノ前町に分かれた。そのなかで、現在、福王子神社秋季大祭にあわせ、劍鉾を保有し、飾っているのは、古くからの集落である太秦中筋町と太秦宮ノ前町の氏子である。両町では中筋町を「西」、宮ノ前町を「東」と称して区別しているが、劍鉾については、以前から両町が力をあわせて護持してきたという。

地名の「仲野」は、仁和寺を開いた宇多天皇の外祖父にあたる仲野親王の名が由来となっており、この地に在所があったと伝えられている。また近世期には仲野村全域が仁和寺領であったため、氏子の中には古くから仁和寺に年貢を納めていたことを強く意識している方もいる。なお、町内で保有する鉾や古くから伝わる吹散は、近世期に当時の仁和寺門跡から下賜されたものと伝えられている。

仲野地区に伝わる劍鉾は一基だが、鉾は「龍」を象ったものと「菊」を象ったものの二種類を有する。古い鉾は後者で、その詳しい製作年代は不明であるが恐らくは吹散同様に近世期のもと考えられる。前者は四十年ほど前に新調されたものである。ただし、後者の方が前者よりも一回り小さく、トラックに乗せて巡行する際は小回りがきくとの理由で、平成二十四年は古い「菊」の鉾を用いた。これらの劍鉾には名称はなく、町内の方も単に「鉾」と呼んでいる。

鉾受は、両面に「福王子神社」と記された神額で、一種類しかない。また棹も一本で、現在、宮ノ前町に住む氏子の一人がガレージの天井に建材の塩化ビニール管を利用して保管している。吹散は二流保有しており、そのうちの一流が近世期のも



仲野地区の劍鉾（溝邊悠介，平成24.10.14）

のである。菊の紋の下に二本の線が入っているものが古い吹散で、傷みがあるため現在は秋季大祭の時にも出していない。現在は、平成に入ってから新調された龍が描かれた吹散を使用している（表は菊の紋に龍の絵柄、裏は「祭神斑子皇后 父君仲野親王御在所村」と記されている。ただし「本物」は、前述した近世期の吹散であると考えている氏子もいる。

鉾祭りの次第

鉾宿のことを「ホコトウヤ」という。平成二十四年は、十月十一日（火）に、ホコトウヤで劍鉾を飾り、献饌（洗い米・塩等）の準備を行った。準備に際して、太秦中筋町の十軒ほどと太秦宮ノ前町の四、五軒から、約二十名が集まった。集まった人たちは、お祝いとしてホコトウヤに御献酒を持参し、ホコトウヤは手伝っていたいた人たちに食事を用意する。

大祭の日、仲野では、ホコトウヤが巡幸列の接待に鯖寿司を用意するのが恒例で、そのため錦市場で購入した鯖を大祭の前日に下拵えし、大祭の当日は、午前九時ごろから米を炊いて作る。巡幸が終わると、午後四時半頃から三十分ほどの間で、片づけを終える。その後、御献酒を供えた人たちをホコトウヤに招き、接待する。昔は、この時に神輿昇きも招いていたという。

後日、ホコトウヤで「足洗い」と称して直会を行うが、平成二十四年は十月十八日に実施した。

鉾差し

現在、鉾鉾はトラックに載せて巡行しているが、鉾鉾を差していた頃は、二人一組で肩に担いで巡行し、差せる場所では差していたという。大祭の一週間前くらいに、鉾鉾を差す予定の場所へ五メートルほどの棒を持って行き、差しても安全かどうか事前に確かめていたという。

なお、トラックでの巡行に際しては、各鉾の順番は毎年繰り上がり、先頭までくると翌年は最後尾〔六番〕になる。

トウヤ飾り

かつては、太秦中筋町と太秦宮ノ前町で三十軒ほどあったが、今は二十軒ほどに減った。鉾宿の順番は決められているが、家の改築により飾る場が確保できなくなった等の事情で、実際に鉾を飾ることができる家は数軒になっている。

三十年ほど前までは宮ノ前町にある證行寺（浄土真宗本願寺派）の前が飾りの場であり、同寺が道具類の管理場所でもあったが、寺を建て替えた際に道具類は両町交互で町内の蔵に入れることになったという。さらに、二、三年ほど前から宮ノ前町の氏子の蔵での管理に固定化された。また、飾りの場（ホコトウヤ）も寺から、両町内で古くからこの地に居住していた旧家（多くは元農家）へと変わった。なお、現在ホコトウヤを担える家は、中筋町では十二、三軒、宮ノ前町では五、六軒と決まっている。そのためか、当家飾りの準備には、新興住宅の方は参加していない。

現在、ホコトウヤは、中筋・宮ノ前両町交互に担っており、秋季大祭の一週間前から両町の氏子が集まって準備を始める。このホコトウヤの順番も、くじにより五年先まで決定しているが、ホコトウヤを担うはずの家にその年、不幸があった場合は担うことができないという。

その他

鉾鉾に関する補修・新調等は、旧の村民だけで決定し、維持・保管を行っている。また、鉾鉾に毎年保険を掛けてもしもの時のために備えているが、それはホコトウ

ヤが負担している。

（鈴木耕太郎）

常盤鉾（常盤地区）

概要

常盤鉾を護持するのは、常盤地区である。明治の頃は常盤谷村と呼ばれ、戸数は二十五戸であった『京都府地誌』葛野郡村史二）。

現在、常盤鉾は、常盤地区の鉾株を持つ十軒が輪番によつてのホコヤド（鉾宿を務めることで護持している。そのうち二軒は福王子神社の氏子であるが、八軒は天王社八幡宮（右京区常盤東ノ町に鎮座）の氏子である。鉾宿が鉾祭りを受け持ち、巡行の翌日（ヨエンの日）に次の鉾宿に鉾一式を受け渡し、鉾宿で一年間、鉾鉾を預かる。

したがって、福王子神社の祭礼に常盤鉾が出るのは十年に二回であるが、福王子神社の氏子の二軒のうち一軒は、現在、ホコヤドを休んでおり、九年で一巡する状況にある。

常盤の鉾鉾の意匠は菊で、鍔は写実的な菊花が数輪と葉が透かし彫りで表現されているが、別材で左右一對の菊紋が取り付けられている。鍔受は「福王子大明神」の神額で、受金は菊紋が三つ合わさったものである。吹散は赤地に金糸で菊紋があらわれている。これらの製作年代は明らかではないが、吹散の箱に「一、吹散代銀式百七拾九匁出水日暮之角松屋方にて致させ／文政十二年丑九月／當家／甚右衛門」とあることから、文政十二年（一八二九）には鉾鉾があったものと思われる。

また、鍔箱が二つあり、その蓋表に「弘化四丁未九月吉日／鑄御鉾／御室古御所／常盤村」、裏に「明治八年乙亥十月吉日／西京一條通浄福寺西入町／細工所／鍔師／堀井新太郎」とあることから、弘化四年（一八四七）には鯨（しやち）の意匠だったことが、明治八年（一八七五）に修理あるいは新調されて現在の菊の意匠になった可能性も考えられる。また、鍔受および受金の箱にも弘化四年の箱書きがあるが、こちらには「細工所／京都寺町通三條上ル／神輿屋眞三郎」とあり、部材ごとに発注していた可能性がある。



常盤地区の鉾宿の祭壇（秦和也 平成24.10.15）

が、昭和三十年代に、福王子神社と天王社八幡宮に氏子が分かれた。この天王社八幡宮は、明治二十二年頃に木嶋座天照御魂神社（蚕ノ社）に合祀された天王社の跡地で、縦五尺、横二尺五寸ほどの台石が残っていたものを有志が祀り、その後、昭和二十八年に蚕ノ社から奉遷したものである『常盤郷土史』。現在、この天王社八幡宮の氏子である鉾株の家のうち八軒は、西の仲野村から常盤村を貫く村中の道沿いに密集している。なお、昭和五十一年に劍鉾を修繕した際、鋳受のスペアを作成したが、それは額に「天王社八幡宮」と記したものであり、福王子神社の祭礼に出ない年には、それをつけるという。

鉾祭りの次第

劍鉾の組立ては、巡行の六日前の月曜日に行く。鉾株の家から男性（主人）が集まる。ただし家に不幸があった場合は参加しない。平成二十四年は、ホコヤドの主人だけでなく、その弟も参加していた。

劍鉾を床の間に飾ると、ホコヤドの主人が、劍鉾に対して二礼二拍手一礼し、ついでその妻、鉾株の家の主人たちが順に拝礼する。その後、机を囲んで杯で御神酒をいただき、和やかな直会へと移る。

劍鉾を護持するホコヤドの集団は、神輿に奉仕する集団とは別である。ホコヤドが管理する文書のなかに、昭和二十三年の「鉾株」の名簿があり、宿順に十七軒が記されている。この鉾株の家々は、もともと全て福王子神社の氏子であった

巡行前日の土曜日には、ホコヤドの主人とその弟が、軽トラックの荷台に劍鉾の鉾頭を載せる。劍鉾の向きは床の間に飾っていた時の表側が、トラックの後側になるようにする。トラックの荷台は、紅白幕で飾る。この日の午後五時、子供神輿の神事のために、福王子神社の神職が常盤地区に来るので、特別に劍鉾も参列して、一緒にお祓いを受けた。

巡行当日は、主人の弟がトラックを運転し神社へ向かった。平成二十四年は、ホコヤドの主人が常盤村奉賛会の会長であったため、そうように分担したという。なお、巡行の後には、劍鉾はトラックに載せたままにしておく。

巡行翌日を「ゴエンの日」といい、本来はその日に鉾株の家の主人が集まり、劍鉾を箱に片付け、次のホコヤドにそれらを受け渡す日であった。平成二十四年は次のホコヤドが喪中であったため、喪が明けるまで受け渡しを控えた。そのため、この日は受け渡しの儀礼がなく、片付けはホコヤドの主人と弟の二人だけで行った。

鉾差し

鉾差しについて詳細は不明である。ホコヤドが管理する文書の中に、昭和二十三年から昭和二十九年にかけて、毎年、鉾差しを二人頼んでいることが記されている。そのうち、昭和二十九年は鉾差し二人に対し、千五百円を支払ったとあった。

トウヤ飾り

劍鉾は、床の間に飾り、その手前に祭壇を作り、鯛や御神酒、洗米、塩、「山海畑川のもの」を供える。なお供物は主人の妻が用意する。女性は、禁忌があると具体的に言われているわけではないが、女性が触ることを気にする人もいるので鉾そのものには触らないという。

その他

前述の供物や弁当などは、ホコヤドが自費で準備している。巡行の際の紅白幕も今回のホコヤドの主人が用意した。

（秦和也）

③ その他の鉾

犀鉾

仁和寺が護持している鉾として、犀鉾がある。これは、巡行するための鉾ではなく、仁和寺の二王門に飾られ、神輿巡幸を迎える役割を果たす。犀鉾は、巡幸祭（お出で）の午前中に立て、還幸祭の日まで立てられるが、その期間中、毎日午前七時三十分の二王門の開門時に吹散をつけ、午後五時の閉門時に吹散を外す。

現在、吹散を収納する紙箱に「祭礼鉾見送り」とあることから、仁和寺では「祭礼鉾」と呼んでいる様子がうかがえる。しかし、江戸時代のものと思われる鉾本体を収納する木箱の蓋に「犀鉾具」と墨書があることから、かつて「犀鉾」と呼ばれていたことがわかる。

犀鉾の形状は一般的な剣鉾と比較して特異である。まず、剣であるが、剣先が菱形に広がって、左右にも尖っていることや、剣全体が非常に薄いこと、そして中心部にスリットが入ることなどは、剣鉾と共通している。一方で、剣の身の中ほどでも菱形に広がった部分があることが異なる。また、鍔受がないため、左右の鍔が剣の身の下のように接合されている点も、珍しい。鍔は、雲と三日月を組み合わせたような意匠の薄板の上に、十六弁菊紋と五三の桐紋を左右に配置している。剣と棹の間には、八角形の台座が大小重ねられており、台座の角から瓔珞が吊るされる。

宝暦五年	（一七五五）	九月	寺家隆栄
安永三年	（一七七四）	九月	寺家幸秀
天明六年	（一七八六）	九月	寺家最珉
享和二年	（一八〇二）	九月	寺家亨謙
文化十四年	（一八一七）	九月	寺家幸寛
天保七年	（一八三六）	九月	寺家文煥



二王門に飾られた犀鉾
（島田敏夫 平成 22.10.17）



犀鉾の鉾頭（福持昌之 平成 23.10.18）

棹は非常に太く、黒漆塗りに輪宝紋と羯磨紋の飾金具が散らされている。吹散の意匠は龍である。

「犀鉾具」と墨書がある木箱の蓋裏には「犀鉾近代御修復年月」として、修理記録が記されている。それによると、十数年に一回、何らかの修理が行われていたこと、修理の主体は寺家つまり仁和寺が行っていたことがわかる。おそらく、毎年の祭礼に使用されていたものと思われる。

この犀鉾は、寺院が護持して祭礼に出される点、剣鉾の剣と意匠が一部共通する点、犀鉾（さいほ）の音が祭鉾（さいのほ）と共通する点など、非常に興味深い鉾である。

（福持 昌之）

④ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

西田直二郎『洛西花園小史』（積善社、一九四四年）

常磐野郷土史編纂委員会編『常磐野郷土史』（常磐野教育後援会、一九七四年）

小野恵美子『宇多野小史』私家版（一九七九年）

常磐野小学校創立十周年記念事業委員会編『常磐野小学校創立十周年記念誌』（常磐野小学校創立十周年記念事業委員会、一九八〇年）

宇多野自治連合会編『寂光土―宇多野学区創立十周年記念誌』(宇多野自治連合会、一九八四年)

『開山宇多天皇一千五十年御忌・弘法大師御入定一千百五十年御遠忌大法会記録』

(仁和寺真言宗御室派宗務所、一九八四年)

御室小学校・学区創立百十周年記念会編『御室・御室小学校・学区創立百十周年記念誌』(御室福祉連合会、一九九九年)

上村和直「御室地域の成立と展開」『仁和寺研究』四号、二〇〇四年)

劍鉾祭礼記録・古文書

『雍州府志』卷三(一六八六年)

狐松子撰『京羽二重織留』(一六八九年)

沙門白慧撰『山州名跡志』(一七二一年)

秋里離島『拾遺都名所図会』卷三(一七八六年)

『京都府地誌』葛野郡村史二『史料 京都の歴史二四 右京区』平凡社、一九九四年)

「講宿覚帳」(山越村明神講所蔵、昭和二年)

「勘定帳」(山越村明神講所蔵、明治二十四年)

(福持 昌之)

花園今宮神社 神幸祭

毎年十月第三日曜日

今宮神社（花園今宮神社）

京都市右京区花園伊町

① 祭礼と由緒

地域の概要

今宮神社の祭神は素戔鳴命、あるいは「今宮大明神」ともいわれる。もと「祇花園（ぎはなぞの）社」又は「花園社」と称した。長和四年（一〇一五）の夏、疫病が京中に流行した折、託宣により創祀されたという『百鍊抄』。寛永二十一年（一六四四）に仁和寺門跡、覺深法親王により本殿と拝殿、末社が造営された。

同社の氏子域は右京区花園の花園学区十八か町と、同区安井の安井学区十八か町からなり、前者の母体は旧花園村、後者は旧安井村である。氏子域は西に北野天満宮、北に福王子神社、南に山ノ内山王神社の氏子域と接する。

平成二十三年（二〇一一）段階の氏子組織は、大別して氏子奉賛会と若中神輿会という二つの組織からなる。氏子奉賛会は氏子域の任意の家からなり、各町から神社役員を出す。若中神輿会は氏子域の任意の男性（十五歳以上）七十名ほどで構成される。その他、今宮神社美鈴会という氏子域内の児童の母親で組織される団体、児童たち、京都花園道心太鼓のメンバーなどがある。若中神輿会以下の団体は平成十四年（二〇〇二）以降に結成されている。

氏子組織の変遷の詳細は明らかでないが、戦後すぐの段階において、氏子の中でも若者組に相当する三つの「社中」が存在していた。すなわち、今宮神社を含む花園地区西側の若者で構成される「祇（ぎ）社中」、今宮神社をはさんで花園地区東側の若者で構成される「楠くすはな社中」、安井地区の若者で構成される「郷（こう）社中」である。

三つの社中は神事や祭礼の全てを取り仕切っていたが、若者の不足などにより継続が困難になり、昭和四十一年（一九六六）に解散となった。これを機に氏子を再編成し作られたのが、先の氏子奉賛会なのである。

当該地域における剣鉾は、平成二十三年（二〇一一）段階で三基存在する。寺ノ前町と坤南町の十七軒で組織する「剣鉾会」が護持する一基（菊、木辻町の一基（橋）、安井奥畑町の中沼家と安井北御所町の榎家で護持する一基（龍）である。

祭礼次第

神幸祭は毎年十月第三日曜日に行われる。これを「おかえり」と称する。神幸祭の一週間前、つまり十月第二日曜日には「おいで」といって祭神を神輿に遷す行事がある。祭礼の準備の多くは「おいで」に行う。「おかえり」の朝、午前七時過ぎになると氏子域の花園小学校、安井小学校の児童等が母親に付き添われて神



社境内に集まりだす。境内にはすでに白い法被の若中神輿会の面々が準備を始め、児童には学年別に色分けされた襷が渡される。

午前八時三十分、児童たちが早く二基の子供神輿が神社を出発する。それぞれ、花園地区と安井地区を巡幸する。行列は、青と赤の獅子二頭と台車に乗せた鉦太鼓が先導する。若中神輿会の担当者として、児童の保護者たちが付き添う。「ホイット、ホイット」とかけ声を挙げながら進み、途中数か所で休憩をとる。午前中いっぱいをかけて巡幸し、正午までに神社へ戻ってくると、児童は解散する。

昼の休憩を挟んで、本殿前で宮司と神社役員による神事が行われ、午後一時に神輿が神社を出発する。花園地区から先に巡幸し、次いで安井地区を廻ってから、午後五時に帰社する。それから後片付けが行われ、神幸祭は終了となる。

行列次第

平成二十三年（二〇二一）時点の渡御行列は、トラックに載った京都花園道心太鼓（大太鼓・鉦・笛、獅子二頭、軽トラックに乗った榊・鼻高面・幟・音頭取り、神輿、ハイヤー）に分譲した宮司と神社役員という次第である。

行列は道心太鼓の囃子に導かれながら、「ホイット、ホイット」というかけ声とともに定められた順路を進む。まずは神社の西側の花園地区を中心にまわる。所々で神輿が高く差し上げられ、上下に威勢よく振られる。これを「フリ」という。また順路の各所には休憩用のスペース（公園などを利用）があり、町内会によって飲み物が用意されている。

休憩所とは別に、「ヤド」と呼ばれ、行列を接待する特定の場所がある。花園地区では宮ノ上町の土手家（地図中A）、安井地区辻ノ内町の藤谷家（地図中B）がこれにあたる。両家には「今宮大明神」の神号が書かれた掛け軸が祭壇とともに祀られており、行列が到着すると、宮司による神事が行われる。

土手家のヤドで接待を受けた後、行列は寺ノ前町の劍鉾（菊）の前を通過する。その際、劍鉾の前では宮司と神社役員たちで神事が行われる。ついで妙心寺通を東へ行き、木辻町の上田家に据えられた劍鉾（橋）の前で同様に神事を行うと、花園地区の東側を巡幸する。

安井地区に入った一行は、辻ノ内町のヤドで接待を受けた後、奥畑町の中沼家へ向かい、また接待を受ける。ここに劍鉾（龍）が飾ってあった場合は、神事を行う。次いで北御所町の榎家へ向かい、接待を受けて午後五時頃に帰社する。

歴史と由緒

祭礼の由緒については不明な部分が多い。先述したように、昭和三十年代まで祭礼は三つの社中によって運営されてきた。祭礼にかかる費用も彼らが調達したという。若者が祭礼に強く関与していたことは、神幸行列が接待を受けるヤドについての伝承からもうかがい知ることができる。すなわちヤドとは、かつて、若者たちが集う「若者宿」であった、というのである。祭礼を担う若者の宿に今宮大明神の分霊を祀り、その地域を代表する象徴的な儀礼が行われるのである。地理的にみて、花園地区のヤドはかつての祇社中の若者宿、安井地区のヤドは郷社中の若者宿であったと考えられる。ということは花園地区の東側、かつての楠社中のエリアにも、同じようなヤドがあったものと推測できる。

また、三つの社中が健在だった頃の神輿渡御には、三基の劍鉾と稚児たちが参列していたという。劍鉾は菊・橘・龍の順で、神輿の先を進んだ。差し手は社中から出していたとか、昭和五十二年（一九七七）以前の花園大学が妙心寺にあった頃は応援団に頼んでいたとか、木辻町の鉾は車に挿して運んでいたなど諸説ある。

子供神輿はもともと一つだけで午前中に花園、午後に安井、としていたが大神輿新調と同じ時にもう一台作って花園と安井それぞれで早くようになったという。

社中が解散すると、祭礼の形態も大きく変化する。神輿が昇かれなくなり、トラックに乗せての巡幸となった。劍鉾も巡幸に参加することがなくなり、各町内における居祭りとなった。稚児もいっしょに参加しなくなった。

② 剣鉾と組織

菊の剣鉾（剣鉾会）

概要

剣鉾会は、妙心寺門前の右京区寺ノ前町と坤南町に住む十七軒の戸主で構成される。彼らが護持するのが、菊の鉾がついた剣鉾（菊鉾ではなく、ホコあるいはケンホコと呼ぶ）である。昔は二十数軒ほどで構成されていたが、転出などで減じたという。

剣鉾の道具類は、普段は特定の会員の倉庫にしまわれている。しかし箱に入れた剣と今宮大明神の掛け軸は、剣鉾会の会員が持ち回りで一年間保管する。この家を「鉾宿」という。鉾宿は、新築や出産、結婚など祝い事があつた家が優先的にあたり、平素は家並み順に回していく。

鉾祭りの次第

祭礼当日の午前九時、妙心寺南門前の分離帯に剣鉾会のメンバーが集まり、鉾立ての準備を始める。倉庫から鉾や吹散などの道具類を出し、組み立てる。鉾は愛宕灯籠の横に設置される。鉾を立て終わると、その前に白木の台を置き、供物を備え、剣鉾会全員で礼拝する。

これが済むとお茶などで休憩して、いったん解散する。そして午後二時頃に再び集合し、神輿行列を迎え、一緒に礼拝する。剣鉾を組み立て終わった後、神輿



妙心寺門前の分離帯に飾られた菊の剣鉾
(中野洋平, 平成 23.10.23)

が通過する時以外に剣鉾会としての行事はない。午後四時には剣鉾を片付ける。祭礼翌日の午前九時、鉾宿に剣鉾会が集まり、次の鉾宿に鉾を移す「鉾宿送り」が行われる。この時、剣や掛け軸が次の鉾宿に持ち込まれる。

鉾差し

平成二十三年度（二〇二一）の段階では居祭りであり、剣鉾は差されない。祭礼中に立てておく場所も、かつては鉾宿の前であつたという。時期は不明であるが、以前は役員が剣鉾を持つて厄払いとして行列の先頭に立っていたという。その時の衣装と「差革」がいまでも保管されている。

トウヤ飾り

鉾宿は一年間、剣と「今宮大明神」の神号軸を床の間に飾る。毎日水を換え、明かりをつけ塩をかけて拝礼し、月二回ほど米もかえる。床の間に飾る際の三方などの道具も持ち回りである。祭礼当日に特別に飾られるものはない。剣鉾が鉾宿前に設置されていた頃は存在していたものと推測される。

その他

かつての楠社中は、今宮神社東側の寺ノ前町、坤南町、木辻北町、木辻南町などの若者で構成されていた。菊の剣鉾はこのうち、寺ノ前町と坤南町で護持していたものであつたという。

鉾宿にあつた会員は、正月に伊勢で剣鉾会全軒数分の御札を買い、同じように五月には愛宕山で軒数分の御札をかうことが務めである。ゆえにかつては剣鉾会を愛宕講と呼んだという。

また、かつて祇社中の範囲であつた今宮神社西側には剣鉾が存在しない。その理由として祇社中は神社のおひざ元に位置するため、剣鉾を持たなくても格式があるためだ、と説明される。

吹散を納める箱上蓋の墨書には「天保十一庚子歳九月吉日／御見送修復御寄附」とあり、妙心寺の坊院や町民の名と寄附金額が列挙されている。また鉾や鈴を納める箱の上蓋には、「今宮大明神／鉾／奉賛会」裏には「劔鉾并見送修繕費寄附金人名標」とあり、妙心寺はじめ坊院、町民の名と寄附金額が列挙され、最後に「維

時明治参拾貳年参月良辰新調之 南門前町中」とある。剣の箱の蓋裏には「文政七甲申九月十六日」とある。

橘の鉾（木辻町）

概要

木辻町の全体で護持している、橘の鉾がついた剣鉾（橘鉾ではなく、ホコあるいはケンホコと呼ぶ）。普段は町内の倉庫にしまわれている。祭礼では差されず居祭り、毎年、町内の上田家（トウヤ）に飾られている。

鉾祭りの次第

剣鉾の諸道具は「おいで」の時に町内総出で倉庫から出され、上田家の妙心寺道に面した店の間に、当屋飾りとともに剣と「今宮大明神」と書かれた神号軸が飾られる。

「おかえり」の当日は午前九時から町内の面々が集まり、上田家の軒先に剣鉾を移す。この際、剣は棹に取り付けられ、車のついた台座に設置される。準備が終わると解散し、午後三時ごろに神輿を迎える。礼拝と接待を済ませ、神輿が去ると直ちに剣鉾と当屋飾りは解体され、倉庫に片付けられる。

鉾差し

かつて木辻町の鉾は神輿とともに巡幸していたという。昭和五十二年（一九七七）以前の花園大学が妙心寺にあった頃は、その応援団に頼んで差ししてもらっていた、とも言われている。次第に差し手がいなくなり、いつしか棹を短く切って台車に乗せ、それを曳いて巡行幸した。現在は巡行していないが、いつか復活させたいという。

トウヤ飾り

毎年木辻町の上田家に飾られる。これをトウヤという。トウヤはかつて、同じ町内の「藤原」「小槻」「笹井」の三家と持ち回りで務めていた。しかし改築などによって、建屋に鉾を飾るスペースがなくなり、自然と上田家へ固定されていったという。



木辻町のトウヤ宅前に飾られた橘の鉾
（中野洋平、平成 23.10.23）

設置場所は妙心寺通りに面した店の間である。窓には橘の紋が入った幕が張られ、「今宮大明神」の神号軸、吹散、鉾頭が飾られる。その前には白木の台と三方が置かれ、餅や野菜などの供物が備えられる。

その他

この鉾は、かつての楠社中のうち、木辻北町、木辻南町が護持した剣鉾である。仁和寺から貰い受けた、という伝承がある。

龍の鉾（中沼家・榎家）

概要

龍の鉾がついた剣鉾（龍鉾ではなく、ホコあるいはケンホコと呼ぶ）は、安井地区奥畑町の中沼家と、同地区北御所町の榎家が一年交代で護持している。祭礼においては差されず、鉾頭のみ玄関先・中沼家が経営する会社の門前や、玄関（榎家）に飾られる。伝来の経緯は明らかでない。箱の墨書から、剣は嘉永三年（一八五〇）に新調されたことがわかる。

祭礼次第

平成二十三年（二〇一一）時点で、鉾の諸道具は中沼家が保管しており、棹と吹散だけが榎家に保存されている。この年は榎家の番であったため、九月中に諸



櫛家の玄関に飾られた龍の鉾（中野洋平，平成23,10,23）

道具が中沼家から運ばれ、「おいで」から玄関に剣頭を飾った。中沼家や他の地域住民の手伝いはない。これは中沼家も同様である。棹と吹散は破損が著しいため、飾らない。それから毎日朝晩水をかえ明かりをともしとお勤めをする。

祭礼当日、神輿が訪れるのは午後四時ごろである。神輿を迎えようと用意してあった飲み物を振る舞い、礼拝する。神輿が去るとすぐに片付け、後日中沼家に引き渡す。

鉾差し

かつては鉾頭だけを担いで祭礼行列に参加していた。それ以前は棹に差していたように、差革も残っているのだが、それを記憶する人はいない。

トウヤ飾り

鉾を飾る家を鉾宿という。台座につけた鉾頭、その後ろに「今宮大明神」の神号軸が飾られ、鉾頭の前には三方に載せた供物が置かれる。その他、かつて祭礼で使用した法被なども飾られる。

鉾宿は、かつて三家あった。海老名家、櫛家、中沼家である。その中で海老名家が筆頭であったが、転出したため二軒となった。ただしこの時の櫛家は本家であり、分家筋にあたる現在の櫛家ではない。次いで中沼家も転出し、櫛本家のみで護持することになり、さらに本家の転出によって現在の櫛家に鉾宿が移った。

後に中沼家が戻ってきたため、現在の二軒になっている。鉾宿の由来は明らかでない。

その他

安井には、剣鉾のための「鉾田」という田があったという。

剣の箱には「嘉永三年戌之極月 新調之」とあり、鏑を入れる箱の裏には「文政八年戌九月十六日 安井邑」と墨書がある。また中沼家には、破損したため使用しなくなった古い剣と、それとともに使用されていたと考えられる古い鏑も保管されている。鏑は現在のもものと形態が異なり、白波をかたどった合金の板に龍の図柄が彫り込まれている。

④ 資料と記録

古文書類

剣鉾会の鉾宿には、共有文書八十点ほどが保管されている。

（中野 洋平）

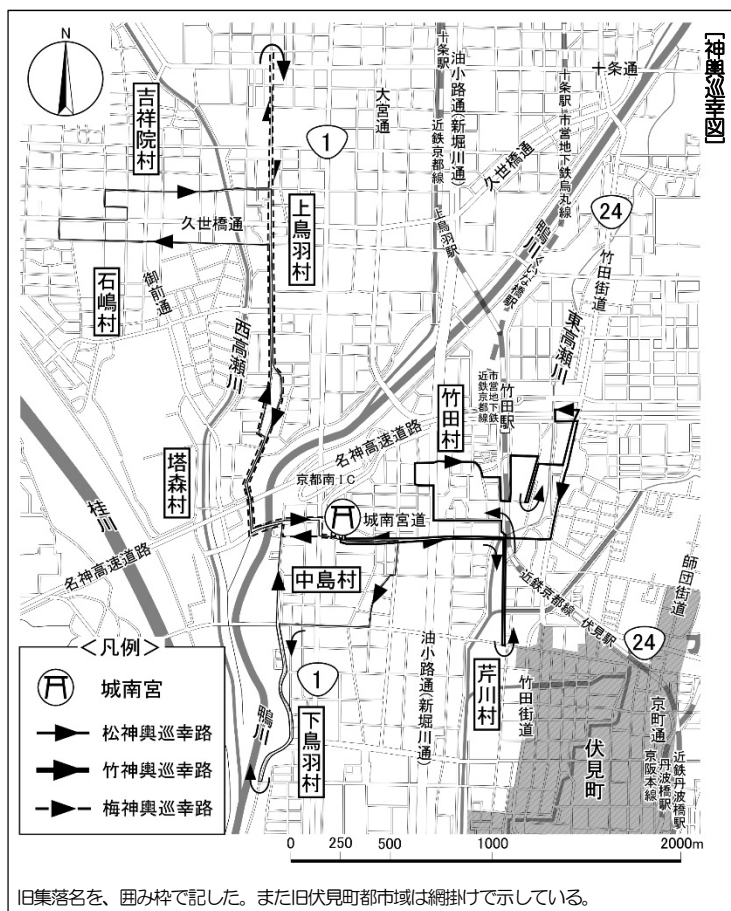
京都市伏見区中島鳥羽離宮町

① 祭礼と由緒

城南宮の氏子域は、旧京都市街の南側に広がる上鳥羽村（上鳥羽村・搭森村）、下鳥羽村（下鳥羽村・芹川村・中島村）、竹田村の旧三か村域にほぼ該当する。上下鳥羽の旧集落は、京都―大阪を結ぶ重要な交通路であつた大阪街道沿いに発達し、南北約四キロメートルに及ぶ街村景観を示す。旧京都市街と旧伏見市街の中間地点に位置する竹田も同様に、竹田街道と高瀬川といった水陸双方の交通の要衝として発達した。竹田の場合は街村ではなく、塊村景観を呈している。昭和戦前期までは農業を主としつつ、地の利を生かして京都市街への物資の中継に携わる人が多く住まいした。

鴨川、桂川が合流する同地域は水運に適してはいたものの、水災害に悩まされ続けた地域でもあった。大阪街道自体も、旧天神川によつて形成された微高地を縫うように通っており、上下鳥羽の集落が街村景観を示すのも、水防的な理由が大きかったのである。敷地をかさ上げして石垣で養生した水防家屋が現在でも散見できるし、かつては、軒先に水害の際の移動手段となる舟を吊っていた民家も多かった。

現在も京都への物資の出入り口として、京都と大阪を結ぶ京阪国道（国道一〇号）、京都と奈良を結ぶ国道二四号をはじめ、名神高速道路、阪神高速八号京都線とい



つた高速度が縦横に走り、工場や倉庫、事務所などの事業所が林立している。交通の要衝という立地性は、今に始まったことではない。平安京造宮とともに、鳥羽作道（とばのつくりみち）が同地域を南北に貫く。平安京の正面門であつた羅城門からまつすぐ南に延びるこの道は、平安後期に造宮された鳥羽離宮へ至る主要道であつた。城南宮は、この鳥羽離宮の鎮守社として離宮内に祀られていたとされる。往時、毎年九月二十日の同社の祭祀には、天皇が来臨し、流鏑馬や競馬を観覧したという記録が散見され、祈雨祈願や競馬が行われた。しかしながら、南北朝以降の鳥羽離宮の衰退とともに、同社も衰退していった。

それが後に周辺集落の産土として信仰を集め、江戸期を通じて、社殿等の整備が進む。江戸時代中期に著された『京都御役所大概覚書』に「二鳥羽城南神宮、

神輿二基并金麻、御出九月十三日、神事同月廿日、神幸道筋、中嶋村領内より竹田村内東洞院筋伏見竹田口下鳥羽段上村、塔森、上鳥羽村上之口迄、氏子村々、中島村・竹田村・上鳥羽村・塔森村・石倉村・北川原村・下鳥羽段ノ上村、ベ七ヶ村」とあり、明治期の上鳥羽、三栖を除く下鳥羽、竹田の三か村という広大な地域の人々の信仰を集めた。

祭礼次第

現在神輿は松・竹・梅の三基あり、松神輿が下鳥羽と塔森、竹神輿が竹田、梅神輿は上鳥羽の神輿とされる。安永五年（一七七六）に神輿が新調され、それまでの二基から三基となったことが知られ（城南宮文書）、おそらくはこの時に昇き手の構成が再編されたのであろう。文政十年（一八二七）九月に出された文書によれば、三基の神輿はそれぞれ、「大宮御神輿」「竹田村御神輿」「上鳥羽村御神輿」と称されており、同時期には神輿と氏子の対応が現在と同様の格好となっていたことがわかる。

祭礼当日（平成二十二年調査）の次第概略を記す。

午前九時より本殿前で祭典執行、その後、神輿舎（本殿に向かって右側）において神輿の清祓が行われる。その後神輿に供えられた神饌が下げられ、神輿昇き出しの準備がなされる。午前十一時四十分、祓所において、松神輿の昇き手が清祓を受ける。続いて拝殿において待機している雅楽奏者（四名）に対しても清祓が行われる。清祓を受けた松神輿の昇き手は、神輿を神輿舎から昇き出し、台車を付け、拝殿の周りを一周してから神社を立出する。神輿の立出に際して、雅楽が演奏される。また、拝殿には一対の獅子頭が神社の出入口である鳥居の方を向いて安置される。この獅子は行導獅子であったと推測されるが、現在は巡幸には参加しない。

引き続き、十二時五分に竹神輿の昇き手が清祓を受け、松神輿同様に拝殿の周囲を廻ってから立出する。梅神輿も同様の所作を行う。梅神輿が立出するのは十二時四十分頃であった。

巡幸路はそれぞれの氏子地域を巡るが、昭和三十年あたりまでは、三基の神輿

は一緒に同じ巡幸路を巡っていた。

かつて城南祭は、餅祭、または血祭と称されていたという。餅祭というのは、氏子の家々で大量の餅をついて客を接待したことに因む名である。客の腰に手杵を七〜八本帯びさせ、餅をどんどんと勧め、客の腹がふくれるにしたがつて、一本ずつ抜いたというのである。

このことは、「腹あしき僧も餅食へ城南祭」（蕪村、「居直れば又強ひるなり餅まつり」（花雪）などと、俳句の季語として使われるほどに有名であった。また血祭の由来は、日頃の水争いがこの日に暴発することで喧嘩が絶えなかったことによるらしく、かつての神輿渡御は荒々しいことで有名であった。

② 剣鉾と組織

城南祭に出仕される剣鉾は三基ある。現在は居祭りであり、祭礼当日の朝、本殿前（向かって右側）に立て置かれ、神輿巡幸終了後に撤収される。剣鉾の形状は三本とも似通っており、本体に記年はないものの、箱書に昭和十三年三月新調とあることからこの時期に同時に調整された



本殿前に飾られる剣鉾。左から松竹梅（村上忠喜、平成22.10.18）

と考えられる。剣下の鍔はいずれも、雲に城南宮の神紋である三光（太陽・月・星）を象り、吹散にも同じく三光の御神紋があしらわれている。神額はない。棹部上部のデザインがそれぞれ、松、竹、梅であり、神輿（松神輿・竹神輿・梅神輿）に対応したものとなっている。吹散の色もそれぞれに、松の劍鉾は緑、竹の劍鉾は朱、梅の劍鉾は紫である。

劍鉾が巡行していた記憶はなくなってしまったが、かつては神輿に先がけて巡行していたことが、絵画資料から推測できる。現在、絵馬舎に掲げられている扁額がそれで、文政二年（一八一九）の祭礼を描いたものである。但し、現在掲げられているものは複製で、美術院の原本調査に基づいて、昭和六十年に日本画家河津光俊氏が模写したものである。画題は城南宮祭で、三基の神輿巡幸を描いたものであるが、巡幸列の先頭に、すでに城南宮の森の中に入ってしまった三基の劍鉾が描かれている。三基とも木々の梢の上から剣がのぞいている様子だけ描かれており、木々の幹間から吹散がのぞく。残念ながら、劍鉾差しの様子は描かれない。劍鉾の後ろに、猿田彦の面が続いている。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

城南文化研究会『城南』城南宮、一九六七年

（村上 忠喜）



「祭礼図」（複製・部分／城南宮奉納絵馬 村上忠喜、平成22.10.18） 全図は「論説編」参照

由岐神社 例祭（鞍馬火祭）

毎年十月二十二日

由岐神社

京都市左京区鞍馬本町

① 祭礼と由緒

地域の概要

鞍馬は京都盆地の北部に位置する、都市近郊の山間地域である。京都と若狭・丹波・近江を結ぶ鞍馬街道の要衝として、往時は人の往来で賑わうとともに、洛北における物資運搬の中継地となり、「船のない港」と称された。地域の面積はおよそ二十四平方キロメートル。うち九十八・九パーセントは山林であり、かつて住民の多くは林業を主たる生業としてきた。また、鞍馬寺の門前町として旅館業や産物を商う者、あるいは薪や炭の集散地として、それらの生産・流通に従事する者が暮らしてきた。

明治時代には、鞍馬の地に伸銅所（現・三谷伸銅株式会社：銅や銅の合金を庄延や押出しなどの方法で、板、管、棒、線などに加工する仕事）が建設されたことよって、京都市内や大阪から働き手として移り住む者があり、地域の人口が急増した。大正時代には、鞍馬と出町柳間でバスの運行が始まり、続いて昭和四年には鞍馬電気鉄道（現・叡山電鉄）が開通して、山間の鞍馬と市街に近い出町柳は、わずか三十分程で結ばれるようになった。

地域の経済発展や交通インフラの整備だけでなく、電気・ガス・水道の整備、昭和三十年代に始まる高度経済成長、エネルギー革命、モータリゼーションの進展など、社会環境の変化に応じて、地域に暮らす人々の就業形態ならびに生活様式は多様化していった。とりわけ鞍馬では、昭和三十年代後半から段階的に進められた木材の輸入自由化が大きな打撃となった。これによって地域住民の第一次産業離れが本格化していったという。

鞍馬川流域の街道筋には南北約一・五キロメートルにわたって、現在二百七十八戸（人口五百九十四人）の家が点在している（平成二十二年国勢調査）。行政町名は鞍馬本町であるが、鞍馬には地縁組織としての「在地」と「町」がある。在地は北から岩仲（岩上町と仲町）、上在地（かみざいち）、中在地（なかにざいち）、下在地（しもざいち）の四地域に分かれており、町は向かい合う十軒前後でまとまりを形成している（世帯数の増減とともに変化しているが、十三町であった時期が長い）。また、「仲間」という古くからの組織があり、これは七つの集団に分かれている。すなわち、大惣（おおそう）仲間、名主（みゆしゅ）仲間、宿直（しゆくじき）仲間、僧達（そうだち）仲間、大工衆（だいくしゅ）仲間、太夫（たゆう）仲間、脇（わき）仲間であり、総称して「七仲間」という。各仲間は世襲されており居住地はある程度まとまっているが、大惣仲間は規模が大きく上・中・下に分かれている。また脇仲間も上・中・下の三つに分かれている。

鞍馬寺の山門を上がったところに鎮座するのが由岐神社であり、主祭神として大己貴命と少彦名命を祀り、これを由岐大明神と総称する。相殿には八所大明神を祀っているが、これは文化十一年（一一八四）の鞍馬寺大火の際、山上から仮にここに遷座され、現在に至ったものである。

祭礼次第

祭礼は、宵宮祭、神幸祭、御旅所神事、還幸祭、直会によって構成される。まず、十月十六日に宵宮祭が行われる。神幸祭と御旅所神事は、同月二十二日に斎行されるが、別名「鞍馬火祭」と称される由縁は、この日の夜に出される松明の行列に拠るものである。本来、七仲間が山門前に集まり、由岐大明神と八所大明神それぞれの神輿を、御旅所まで巡幸するもので、松明のほか鉾や太鼓などが供奉する。

鞍馬の鉾は、他所の鉾と同様の「一本鉾」のほか、三本の添え柱を伴う大型の「四本鉾」がある。いずれも先端の鉾頭は、いわゆる鉾鉾の特徴を供えたものである。また、猿田彦の面をつけた鉾があるが、これはいわゆる鉾鉾ではないため、本稿では基本的に猿田彦と記し、区別する。翌日に還幸祭が行われて例祭は

終了となる。

今回の報告は、あくまで剣鉾を中心にまとめているため、この行事の全体については別書を参考にしていただきたい。昭和初期の儀式次第・祭祀組織については、井上頼寿『京都古習志』（一九四〇年）に詳しい。特に近世における歴史的な状況を知る基本史料としては、日本祭祀行事集成刊行会編『日本祭祀行事集成』第四卷所収史料や京都市歴史資料館架蔵「大惣仲間文書」、「杉本宗徳家文書」、「松本浄一家文書」などの鉾仲間関係文書がある。

現状の祭礼を知る上で踏まえておきたい次第については次の通りである。祭りの準備は、例年九月ごろから本格的に始まる。七仲間の役員が集まって行う打合せや仲間ごとの話し合いによって、細かい役割分担が決定される。そして、祭日が近づくと由岐神社の氏子全体から参加者を募り、松明の材料となるツツジの枝と藤の根を近辺の山へ採りに出かける。

十月十六日の午後八時、由岐神社本殿前で宵宮祭が斎行される。各仲間の組頭など関係者が参列する。一連の祭りが無事に行われるよう祈願する神事である。

神幸祭本日である二十二日は、午前七時頃から、「宿（やど）」と呼ばれる仲間の拠点に集まり、鉾などの祭具を飾る。仲間によって宿飾りは異なり、下大惣（しもおおぞう）・中大惣（なかおおぞう）・僧達・大工衆仲間が家の中と外に飾るのは、剣鉾や吹散（地元ではヘレンと呼ばれる）が中心である。上大惣（かみおおぞう）仲間は家の中に吹散を中心に飾り、剣鉾は屋外に立てる。名主仲間は家内に大きな幣帛（へい）を供え、剣鉾は外に立てる（平成二十三年は特別に、組頭の家で旧剣鉾が飾られた。なお剣鉾を護持していない宿直仲間は金の幣帛、上大脇（かみおおわき）仲間は神輿の綱を二点（岩仲と上在地の分）、中脇（なかわき）仲間は綱一点（中在地の分）、下脇（しもわき）仲間も綱一点（下在地の分）を中心に飾る。



山門下の諸礼での剣鉾（左より上大惣仲間の四本鉾、大工衆仲間の一本鉾、下大惣仲間の一本鉾、中大惣仲間の一本鉾）
（福持昌之、平成 23.10.22）



諸礼（青江智洋 平成 23.10.22）

同日午前九時から、由岐神社本殿前で例祭、続いて二柱の御霊遷しを伴う神幸祭が行われる。これには神職や各仲間の組頭をはじめ、氏子などの関係者が参列する。その後、二社の神輿は車で山門下広場に運ばれる。

午後二時頃から、由岐神社の宮司がそれぞれの宿を訪ねて、「鉾被い」をする。

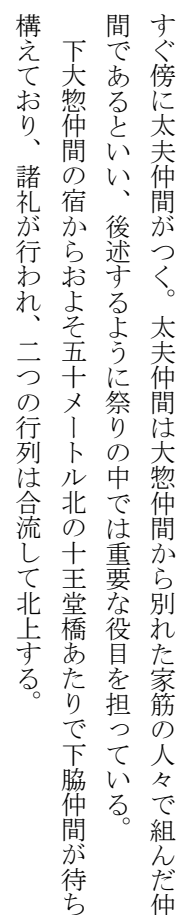
午後六時になると、白丁姿の若者が松明を手に神事の始まりを町内に告げて歩く「ジンジブレ（神事触れ）」が始まる。かつてこれは集落の下端から上へと一名で触れ歩くもので、下大惣仲間の職分であつたとされるが、下大惣仲間の手配により、僧達仲間の人に依頼していた時期もあるという。現在は京都國學院の学生を雇い、山門前を起点に、一名は下へ向かつて、集落の最南端の家の前から山門前まで、もう一名は山門前から上へ（鞍馬温泉まで）と向かう。神事触れが通ると各家の前のエジ（かがり火）が灯される。しばらくすると、氏子総代四名が山門前を境に上と下の二組に分かれて、各仲間へ挨拶にまわる。

それぞれの宿に仲間が集まるのは、午後六時から七時半にかけてであり、その時間は仲間によって異なる。組頭は袴姿で手には手松明を持つ。「甲斐性松明」（カ

イショマツ、もしくはカイショウタイマツと呼ばれる）は、男子が自分の甲斐性に合った大きさの松明を持つことに由来し、特に若者は「しめこみ姿」のいでたちである。これは、さまざまな職業の一番強そうな部分を集めたものだと言明される。腰には力士が纏う締め込みと下がりをつけ、頭には向こう鉢巻を巻き、足には健脚の飛脚がつける脚絆と武者草鞋を履く。腕には豪腕な船頭が身につける船頭籠手を用いている。そのほか、松明を担ぐ際に肩を保護するため綿の入った白い肩当てをたすき掛けにかける。締め込みの背部には南天の枝をさすが、これは難を転ずるとの語呂合わせから厄除けになると信じられている。少し年配の男性は、「尻かがり姿」で参加する。鉾を扱う者の衣装は、しめこみ姿あるいは尻かがり姿で、いずれかに統一されているわけではない。また、参列する女性の多くは割烹着姿や和服姿である。

午後七時過ぎに、「遣いの松」（ツカイノマツ）がある。下大惣仲間の宿から中大惣仲間の宿に向かつて、松明を持った遣い（下の遣いの松明）が発発する。中大惣仲間の宿に到着すると、次は中大惣仲間の宿から上大惣仲間へ向けて遣い（中の遣いの松明）が発発する。再び、下大惣仲間の宿から中大惣仲間の宿へ遣いが出る。これは行列の出発のタイミングをはかるものとされる。以前は七度半の遣い（七度出向き、八度目の中程で合流する所作）を出していたという。なお、各宿の太鼓や鉦は、遣いの松が通ると叩いてよい、とされる。

午後八時頃、僧達仲間は鉾や甲斐性松明を伴って宿を出発し、山門前の石段下で待ち構えている宿直仲間と諸礼を行う（松明・鉾巡行図①）。諸礼とは、仲間と仲間が交わす挨拶としての儀礼のことで、二つの仲間の組頭同士が向き合い、互いに「サイレイヤ、サイリョウ」と言いながら数歩進んで、数歩下がる所作の後、目礼を交わすもので、本来は七歩進んで七歩下がるものだったという。諸礼を済ますと、二つの行列は合流し、松明を担いで石段を上がり、松明を立てて、その他の仲間たちが山門前

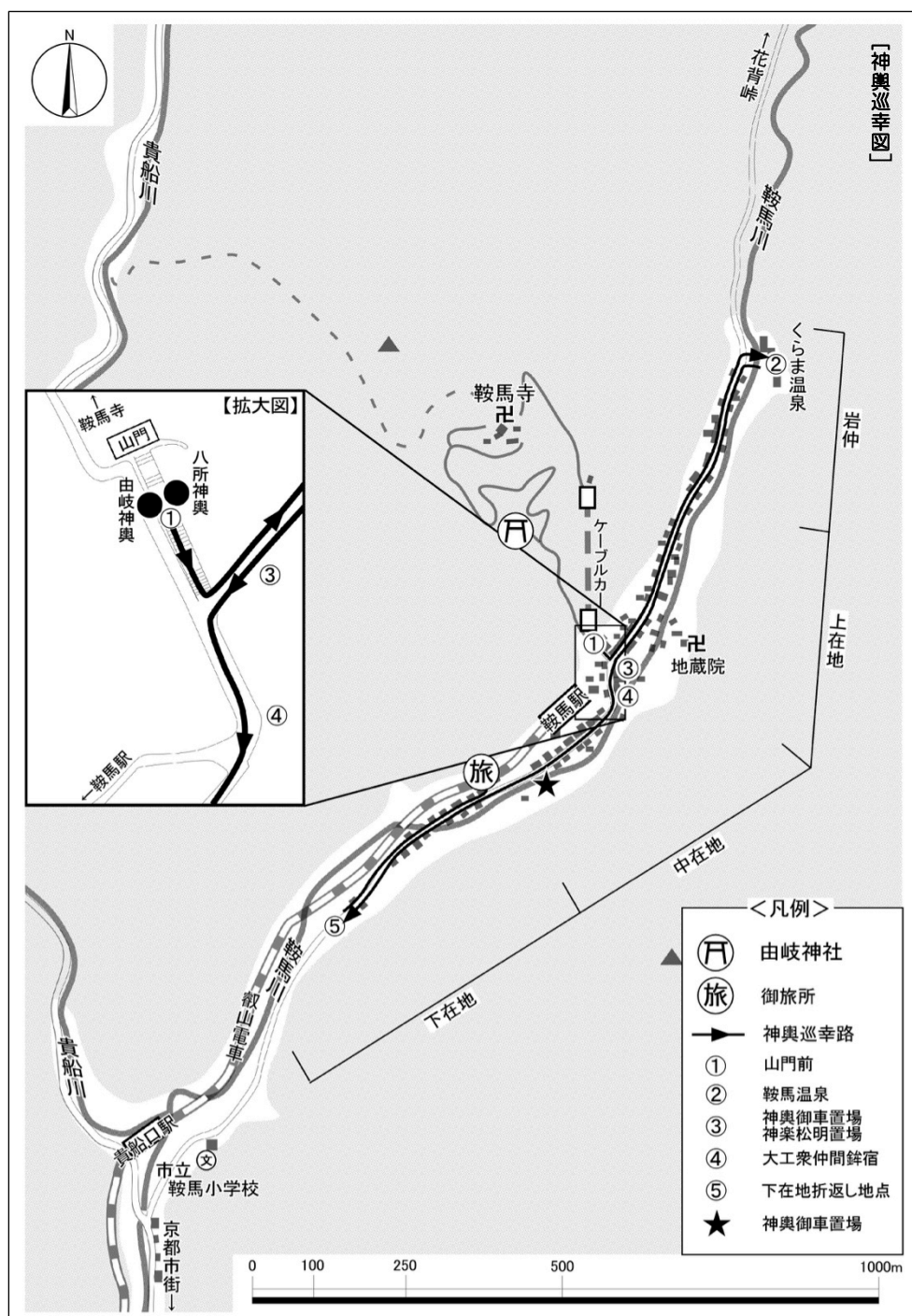


314

段を上がる。石段の途中で、甲斐性松明が燃え盛る様子は、火祭りの興奮が最高潮に達する瞬間である。一方、一本鉾と四本鉾は役目を終え、片付けられる。ただし、大工衆仲間の一本鉾だけは、御旅所神事で役目があるので、神輿が宿の前に来るまで、宿で待機する。

入れ替えて南下する。山門前からは神楽松明を各神輿の後ろに加え（同③）、さらに大工衆仲間の一本鉾を加えて（同④）南へ向かう。そして、下在地の南端まで行き（同⑤）、引き返して（神輿は再び順序が変わる）御旅所に向かう。

午後十一時三十分ごろ、神輿が御旅所へ到着する。御旅所の鳥居の脇で、大工



甲斐性松明が燃え尽きると、太夫仲間によって、石段に張られた注連縄を伐る「注連伐りの儀式」が行われ、神輿に対して山門前祭が行われる（神輿巡幸図①）。その際、下大惣仲間が奉持してきた御幣を由岐大明神に、名主仲間の御幣は八所大明神に供える。

神事後、神輿は石段を下る際、脇仲間が持参した綱は神輿の後方に延ばされ、これを女性たちが持つ。また、石段を下る際には、轅（地元では大棒（だいぼう）と称される）の前方端に若者がぶら下がり脚を開く慣わしがある。これは「チョッペン（チョッペン）と呼ばれるもので、鞍馬における成人儀礼の遺習であるという。仲間の中から二十歳前後の若者が一生に一度務める役目であるという。石段を下りると、神輿は台車に載せられ、ブレーキの役割を果たした綱は神輿前方に結び替えられ、町内を巡幸する。この時、女性は綱を持って神輿を曳く役目を担う。

神輿は、いったん北上し、くらま温泉に向かう（神輿巡幸図②）。そこで神輿の順序を

衆仲間が鉾の鈴を鳴らし続けるなか、八所大明神と由岐大明神の神輿が御旅所へ安置されると、神輿昇きの若者たちが「三顧の礼」で到着の無事を祝う。続いて御旅所祭が行われる。この時の献饌は、各仲間の宿から運ばれてきたゴク（御供で、名主仲間が神輿に供える。最後に、神樂松明が境内を三周半まわり、神輿に対して奉奠する。本来は七周半まわるものだったという。また、以前は八所大明神には上在地と岩仲から、由岐大明神には下在地と中在地の神樂松明がそれぞれ四本、計十六本出ていたが、現在は各在地一本ずつ計四本となっている。次いでチョッペンを奉仕した者とその家族が「チョッペン酒」を振舞う。その後、御旅所の賑わいは深夜一時ごろまで続く。

翌二十三日は午前九時から御旅所祭があり、二基の神輿は車で由岐神社に運ばれ、御霊が本殿へ遷され、一連の還幸祭が終了する。

行列次第

各仲間が山門前に向かう行列については、「②劍鉾と組織」の項で記述する。

神輿の巡幸列については、猿田彦が先頭で、鞍馬区長、由岐神社宮司、僧達仲間と宿直仲間の組頭が二基の神輿を先導する。八所大明神の神輿、その後ろに由岐大明神の神輿が続くが、山門前から北上してくる温泉で二基の神輿の順序は入れ替わり、御旅所に向かう。なお、八所大明神の神輿には、岩仲・上在地の総代、上大惣仲間・上大脇仲間・名主仲間の組頭が先導し、岩仲・上在地の神樂松明が後に続き、その後ろは岩仲・上在地の保存会役員である。由岐大明神の神輿の先導は、下在地・中在地の総代、中大惣仲間・大工衆仲間・下大惣仲間・中脇仲間・下脇仲間の組頭が務め、神輿の後ろには、下在地・中在地の神樂松明が続き、その後ろは下在地・中在地の保存会役員が続く。

由緒と歴史

社伝によると、天慶三年（九四〇）九月九日、由岐大明神を鞍馬の地へ勧請するにあたり、村人が松明を持って道中を供奉するとともに、葦のかがり火を焚いて迎えたという。鞍馬の火祭はこの故事に基づくものとされる。よって、近世期の祭礼は、例年旧暦九月八日と九日を式日としていたが、明治の改暦にともない

十月二十二日と二十三日の両日に定められた。

由岐神社は、かつて鞍馬寺の鎮守社という性格をもち、氏子区域の大部分が鞍馬寺領であったことから、当祭礼の歴史の変遷を知る上で鞍馬寺との関係を看過することはできない。鞍馬寺の創建から大正期に至るまでの歴史については、橋川正が大正十五年（一九二六）に編纂した『鞍馬寺史』に詳しいが、とりわけ重要な点について以下簡潔におさえておきたい。

鞍馬寺は享保十五年（一七三〇）から明治元年まで、東叡山輪王寺門跡と本末関係にあつたが、それ以前は青蓮院門跡の支配のもとにあつた。そのことから、青蓮院の寺誌である『華頂要略』に祭礼関係の記録が散見される。これは青蓮院第二十九世門主尊真入道親王の命を受けた坊官進藤為善（法名為純）が古文書・古記録などを渉獵して編纂したものである。巻頭に編者による享和三年（一八〇三）の自序があり、弘化三年（一八四六）ごろまで追補が行われている。編纂物であり一次史料ではないが、青蓮院の歴史を扱う上で欠かせない基礎史料のひとつであり、同著第七十四から七十七巻には鞍馬寺の歴史を知る上で重要となる「鞍馬寺雜記」が収録されている。

七仲間の成立時期については詳らかでないが、『華頂要略』に収録された貞享元年（一六八四）三月二十七日付文書（鞍馬寺毘沙門天開帳ニ付）の差出人として「鞍馬村七組中」とあるので、江戸時代初期には成立していたものと考えられている。七仲間は近世の鞍馬山を構成した十院九坊の組下に位置し、いずれの仲間も世襲され、青蓮院や鞍馬寺への夫役を務めて村を運営していた。このうち大惣仲間、宿直仲間、名主（衆）仲間は三仲間と呼ばれ、仲間の中でも特に権限を有していたようである。また、大惣仲間では本家筋で構成する「本家株」と次男以下の分家筋で構成する「若衆並」とに分かれ、さらに年齢順によって序列が定まっていた。本家株では「講師」「法師」「称講」の順に昇進し、称講の最年長者を「一和尚」と称していた（『大惣仲間文書』）。現在ではこのような組織秩序は維持されていない。昭和三十一年（一九五六）に鞍馬を襲った洪水で地域は多大な被害を受けた。その影響もあって、以後七年間は祭りが中止された（それ以前にも祭りが中止となった年



名主仲間の四本鉾の実演（福持昌之、平成24.8.5）

はある。その後、区長などが集まって議論を行い、昭和三十七年（一九六二）に祭りの内容を大きく改めて翌年から再興することとなった。祭りの日程も十月二十二日、二十三日の二晩にわたっていたものを一晩で行うようにした。これによって各々の行事は少しずつ簡略化される。

鞍馬の剣鉾は四本の棹で支えられているところに特徴がある。これは四本鉾（しほんぼこ）と称されている。四本鉾の形態は当初からのものなのか、それとも歴史の変遷のなかで形成されたものなのかは明らかでない。四本鉾については、明治三十五年（一九〇二）に報告された村上文芽の見聞記にある記述が、管見の限り初見である（「鞍馬竹伐と火祭」一九〇二年）。これには「剣鉾は普通の神事のものに更に三本の柄を加へて控へとし、四人して捧げ歩く」とある。

四本鉾は、四本ある棹をそれぞれ一名が担当して持つ。先頭を行く者が持つ棹（棹の下端に手持ち用の横棒が付属している）が「オヤ（親）」と呼ばれ、後の棹が「カリ」と呼ばれ、左右の横棹については「テザオ（手棹）」「ヨコ」などと呼ぶ。オヤとカリの距離が近過ぎると鉾が前に倒れてしまい、反対に距離が離れ過ぎていると鉾

が後へ倒れてしまう。また、四本鉾の鈴は棹の後側に取り付けられており、鈴を鳴らす際にはカリの者が勢い良く棹を突き上げるようにしなくては音が出ない。オヤが自らの動作で鈴を鳴らすことは難しい。四本鉾は四人の力バランスで保たれている。四本鉾には、鉾元（ほんもと）という役目の者がつき、差配をするが、一本鉾にはない。

地元の古老によると、「一本鉾は巡行道を浄化する役目があるので祭礼当日がたとえ大雨であろうと必ず巡行に出す」という。ただし、雨の場合は吹散（地元では「ヘレン」と呼ぶ）を取りつけないこともある。一方、四本鉾は「神さんが乗ってこられる鉾」であるが、大雨の場合は出さない仲間もあるという。

その他

鞍馬火祭保存会は、火祭りの保存と振興を活動目的として昭和三十八年（一九六三）に発足した。同時に会則も整備して会員や役員の資格・任務などについて定めた。平成十二年の会則改正以降、会長一名、副会長一名、理事四名（うち会計一名・庶務一名、監査二名、顧問（由岐神社宮司・責任役員・区長）で構成している。保存会以外にも鞍馬の四在地から一名ずつ選出される氏子総代、由岐神社の護持会長、副会長、そして四在地から四名ずつ計十六名が選出される神事世話役がある。これらの役員たちは、およそ一年間にわたって様々な役割を務めることになる。

保存会が発足する以前は鞍馬火祭奉賛会で祭りを運営していた。当時は町役総代（区長）が奉賛会の代表として火祭り一切の指揮を執っていたが、仕事の多さや財政面での負担は相当なものであったという。昭和五十八年に「鞍馬火祭」として京都市登録無形民俗文化財となり、現在は祭礼にともない公益財団法人京都市文化観光資源保護財団から補助金を受けている。祭礼費用の用途としては、松明に用いる柴の切り出しにかかる費用、接待費、祭具の維持・修繕費、各種松明補助費などが挙げられる。以前に比べると、近年では材料調達にかかる費用が増大しているという。

祭りには観光客の案内や警備が必要であるため、警察官やボランティアの学生など地域外の者の協力を得ている。

鞍馬の火祭の運営にあたっては地元の中でも賛否両論がある。増加する観光客への対応、火祭りにともなう住宅火災への危惧、社会環境の影響などから祭りへの参加が困難となる者の存在等、地域住民は祭りを心待ちにする一方で物心両面にわたって不安や負担も大きいという。そうしたなか、役員は鞍馬の火祭が今後継続できるよう細心の注意をはらいながら運営を続けている。

(青江 智洋)

② 劍鉾と組織

鞍馬の七仲間のすべてが鉾を護持しているわけではない。ここでは祭礼当日の鉾の巡行順に、僧達仲間、下大惣仲間、中大惣仲間、大工衆仲間、上大惣仲間、名主仲間の順に列記する。

僧達仲間 (岩仲、上在地、中在地、下在地)

概要

僧達仲間は、鞍馬寺の雑事を担っていたといわれる家筋の集団で、十四軒からなる(平成二十五年十月現在)。このうち組頭は二軒で、その他は若衆と呼ばれている。僧達仲間は、鞍馬寺に詰めて警護を行っていたとされる宿直仲間とともに、鞍馬火祭では鞍馬寺側の役割を果たしている。

僧達仲間の鉾は「寺鉾」と呼ばれており、巡行に供する「四本鉾」と宿に飾られる鉾頭(棹はない)の二基がある。いずれも意匠は虎であるが、巡行の鉾(ジュンコウボコ)は、お飾りの鉾(ヤドボコ)に比べて剣が細長く、巡行の際によくしなるようになっている。また、鍔が一回り小さく、軽い造りになっている。お飾りの鉾はもともと巡行に使われていたものだが、現在の巡行用の鉾が昭和四年十月に新調される際、さらに巡行に適した形が目指されたのであろう。旧の棹も現在は伝わっていないが、現行のものより一メートルほど長く、直径も太かったという。鉾の意匠を詳しく見ると、鍔には竹林の中に二匹の虎が向かい合う。鍔金の地に、

漆焼き付けによる縞のコントラストが美しい。鍔受は額仕立てで、額の中にも虎がいる。受金は州浜形で火焰宝珠が三つあしらわれる。

棹は、オヤ(親)に対して、二本のテザオ(手棹)と、後方からのカリ一本が取り付けられる。オヤの両脇に環金具があり、これらにそれぞれ縄を通して、テザオの先のくびれに掛けて結わえる。また、オヤの後側にも、テザオの環より少し下がったところに環金具があり、カリの先の二股金具をかけ、やはり縄をつかって結わえる。巡行の際は、それぞれの棹に一人ずつ、計四人がかりで巡行する。

鉾祭りの次第

十月十六日の宵宮祭の前後に、組頭宅で仲間の寄合があり、役割分担や集合時間の確認をする。その後の土曜日から日曜日には、僧達仲間は組頭らにより、由岐神社の神輿蔵で、神輿の飾り付けを行う。

十月二十二日、午前七時頃から、宿に仲間が集まり、鉾の組立てと宿飾りが行われる。吹散(ヘレン)もこの時に、鉾につける。午前九時からは、由岐神社で神幸祭が行われ、神輿に御霊が遷される。平成二年頃までは、御霊遷しの直前に、神輿の前で、飾り付けなどの準備が整ったことを確認する儀式があった。

午後四時すぎに、由岐神社の宮司が宿に来て、鉾のお祓いを行なう。その後、午後六時すぎに、ジンジブレ(神事触れ)が宿の前を通過し、各家に設けたエジ(かがり火)が点火される。その後まもなく、氏子総代が各仲間に挨拶にまわる。その時、僧達仲間は出発予定時間の連絡を受ける。

午後七時半頃に、組頭は棹で、甲斐性松明を持つ人はしめこみ姿で、四本鉾の巡行の前を行く鉾元は尻かがり姿で、それぞれ集まる。そして、ツカイノマツ(遣いの松明)が通過するのを待つて、宿の前で太鼓と鉦を鳴らし始め、人々は「サイリョウ、サイリョウ」と声をかける。

午後七時四十五分頃、鞍馬の正副区長(二名)と、鎧武者姿で神輿の轆の上に乗る乗役(のりやく)二名が宿に来て、組頭と挨拶を交わす。そして、組頭、正副区長、乗役を先頭に、四本鉾、太鼓、甲斐性松明が並んで、出発を待つ。乗役は、大惣仲間の中でも「法師仲間」と呼ばれる家筋の若者が務めるため、また正副区



僧達仲間の宿飾り（藤原喜美子，平成 23.10.22）



僧達仲間の宿。四本鉾（藤原喜美子，平成 23.10.22）

長は鞍馬全体で選ばれるため、僧達仲間の行列の構成員は、僧達仲間の構成員には限らないのが特徴である。

山門前の石段下へ向かう途中、「サイリヨウ、サイリヨウ」の声に合わせて鉾は鈴を鳴らし、剣を前後にしなわせる。

石段下では、宿直仲間が待ち受けており、そこで諸礼を行う。その後、すぐに鉾は宿に戻る。僧達仲間は宿直仲間とともに石段を上がり、甲斐性松明は二つ目の石段の東側で待機し、ほかの人たちは神輿の前で待機する。

午後九時をまわると、大惣仲間らが石段下に到着し、太夫仲間が注連縄伐りをする。二回目の注連縄伐りが済むと、僧達仲間は注連縄の横に置いた太鼓を素

囃子（鉾は鳴らさない）で叩く。

神輿の巡幸が始まると、僧達仲間と宿直仲間の組頭は、区長、由岐神社宮司らとともに、八所大明神と由岐大明神の神輿を先導する集団を構成する。

神輿の巡幸列が宿の前を通過するときに、ゴク（御供）をゴス（御簀）に載せたまま二人がかりで担いで組頭に合流する。御旅所に着くと、名主仲間にそれを渡す。神事が終わり、サイレンになると、ゴクをさげて、宿に戻る。宿飾りに再びゴクを供える。

行列次第

宿から、山門前で宿直仲間と諸礼をするまでの行列は、先頭に組頭二名と鎧武者二名が並び、次に四本鉾、次に太鼓、次に甲斐性松明が続く。

トウヤ飾り

宿は、家の並び順にまわっている。平成二十三年の宿は、林英三氏宅であった。宿では、表に面した座敷を開け放ち、屏風を立て、吹散（ヘレン）を掛ける。その前に、鉾を収めていた木箱などを使って祭壇をつくり、その上に井桁に組んだ木枠の台を置く。この台には鉾頭が安定して収まるようになっていて、鉾の前には荒薦が敷かれ、錫瓶子一对、土器一对（塩と洗米）、燭台一对を載せた三方を置く。さらに、注連縄を巡らせたゴス（御簀）にゴク（御供）を入れて供える。ゴス（御簀）の中は赤ずいきの膾を盛った土器を桶にいれたものと、強飯を盛った土器をやはり桶にいれたもの、葉付き大根、葉付きずいき、生姜などである。

軒には幔幕を張る。表には太鼓を出し、四本鉾を立てる。四本鉾の足下には、平らな石を置き、土器一对（塩と洗米）を供え、蠟燭を点す。その前に、川で拾ってきた黒い小石を三つ置く。

その他

吹散（ヘレン）の軸で、今は使われていないものに、

寛文三癸卯曆

奉造宮寺鉾之幡

賢祐 賢永 祐快 永憲
永真 心秀 雄弥 盛戒

敬白

九月如意珠日 御詠物師 鈴木傳兵衛(印) 縫調之

と墨書があり(京都市昭和五十九〜六十年年度剣鉾調査写真より)、寛文三年(一六六三)九月亥日に寺鉾の吹散が調整されていたことがわかる。また時代は下るが、寺鉾を収納する木箱には、「文久元辛酉歳九月／鞍馬寺什」と墨書があり、幕末に製作されたこと、そして鞍馬寺の所有であったことがわかる。口伝では、かつて鞍馬寺の子院である歓喜院に収められていたともいわれている。

寺鉾の意匠である虎は、鞍馬寺と関係が深い霊獣である。鞍馬寺の本尊である尊天は、毘沙門天、千手観世音菩薩、護法魔王尊の三位一体であるとされ、そのうち毘沙門天の使いとされるのが虎である。室町後期に成立したとされる『鞍馬蓋寺縁起』は、鑑真の高弟である鑑鶴上人が、鞍馬に導かれた霊夢を見たのが宝亀元年正月四日、すなわち寅年寅月寅日であるという。現在も鞍馬寺では、その由緒に因んで、正月には初寅大祭が行なわれている。

(福持 昌之)

概要

下大惣仲間(下在地)

下在地は集落の南端から御旅所までの地域のことをさす。昔は、現在の場所よりもカミに集落があったが、水害で現在の場所に移ったという伝承がある。下大惣仲間は下在地集落の十八軒で構成され、下大惣仲間は、太夫仲間とともに行列を先導する重要な役割をもっている。

下大惣仲間の組頭は、鞍馬寺の竹伐り会式に従事している家筋(法師仲間)十軒のうち五軒で構成されている。また、組頭以外の十三軒は若衆と呼ばれる。

下大惣仲間には「一本鉾」、「四本鉾」、「留守鉾」の三つの剣鉾がある。また、行列の先頭に行く猿田彦は、手で持つ短い鉾に、猿田彦の面、袖、幣をつけたもので、いわゆる剣鉾とは異なるものである。

一本鉾の意匠は、鰐に紅葉と波頭をあしらったものである。「四本鉾」の鰐には鳳凰があしらわれている。四本鉾は、組み立てた後、宿ではなく御旅所前に飾る



下大惣仲間の四本鉾(御旅所前)
(村上忠喜, 平成 22.10.22)

が、この時ヘレン(吹散)はまだつけない。宿から出た行列が御旅所に到着してから、ヘレンを取り付けて行列に加わる。「留守鉾」は、宿飾りに安置する鉾である。鰐受には観音(立像)とその両脇に花瓶が配され、その上に剣を挟むように一對の鳳凰が向いあう。受金は三つ巴紋があしらわれ、鰐は五七桐紋、笹葉、青海波である。

鉾祭りの次第

十月第一週の土曜日に、組頭の家で仲間の寄合いがあり、打ち合わせを行う。十月二十二日の午前七時から、宿に仲間が集まって宿飾りをする。その後、午前九時の神幸祭に参列する。午後三時すぎに、由岐神社の宮司による「鉾祓い」があるが、これは宿の家が対応する。

午後六時前に、ジンジブレ(神事触れ)の白丁が宿に到着する。白丁は、組頭らに連れられ、集落の南端の家の前へ行き、午後六時になると、そこから手松明を持ち、「ジンジにマイラシヤーレ」と山門前まで触れ歩く。

午後七時頃に、仲間が宿に集合する。その際、仲間らが、「神事(ジンジ)おめでとうございます」と挨拶をすると、宿では「どうぞ気をつけてよろしくお願いします」と返し、甘酒を振舞う。この時、甲斐性松明も続々と集まるが、下大惣仲間では、宿に来るまでは点火せずに松明を運ぶ。

午後七時すぎに中大惣仲間に向けて遣いを出す。現在は二回遣いを出す、二日間祭りが行なわれていた頃（昭和三十年頃）までは、七度の遣いであったという。中大惣仲間に向けて出発する遣いは、観光客などが邪魔をしないように保存会の人々が警護しながら向かう。中大惣仲間へ到着すると、「下大惣、一番の遣い松でございます。本来ならば七度半のお遣いではございますが、時間が迫っておりますので、各仲間ごゆるりとおくだりください。今日はジンジ、まことにおめでとございます」という口上を述べて戻っていく。「二の遣い」の時も、同様の口上を述べる。

午後八時頃、猿田彦の面をつけた鉾を持った白丁を先頭に行列を仕立て、宿を出発する。これは、神事触れの役目を終えた白丁があたる。その後ろに、一本鉾、組頭、太夫仲間、そして若衆らが続く。太夫仲間は、御旅所と山門前で注連縄を伐る役割を果たすが、下大惣仲間とともに行動する。かつて、太夫仲間は何軒かあったが、現在は一軒となっている。

十王堂橋の上で、下脇仲間と諸礼をし、合流して御旅所に向かう。御旅所に到着すると、甲斐性松明は鳥居のわきから境内に入り、鳥居と神輿倉の間の参道の両側に並ぶ。太夫仲間によつて鳥居に張られた注連縄が伐られると、続いて神輿倉の注連縄も伐る。御旅所前に安置してあった四本鉾にヘレンをつけると、四本鉾は行列に合流し、「サイレイヤ、サイリョウ」と声をかけながら北上する。

途中、いくつもの諸礼を経て、最後に名主仲間と諸礼を済ますと、一本鉾と四本鉾は片付けられる。甲斐性松明は石段を上がり、燃え尽きるのを待つ。燃え尽きた松明は、石段下のマツ寄せ場に捨てて。石段下から、神輿前の鎧武者らが見通せる状態になると、石段の途中二か所に張つてある注連縄を、太夫仲間が順に伐る。仲間たちは神輿前に集まり、神事が始まる。

神事の後、神輿の巡幸があるが、その先頭は猿田彦の面をつけた鉾である。神輿が下大惣仲間の宿の前を通る時、ゴク（御供）を載せたゴス（御責）を若衆が担ぎ、組頭に合流する。ゴクは御旅所で名主仲間に渡す。神輿が御旅所に到着し、祭典が行われる。

十月二十三日、朝から片付けをする。鉾は、石段下近くの中在地の某商店へ預けてあり、それを受け取りに行く。祭礼の当日は、観光客が非常に多いため、鉾を下在地の宿まで移動させるのが困難で、近年になってそのようにしたという。

行列次第

下脇仲間との諸礼・合流までは、先頭を猿田彦面、次に一本鉾、そして組頭の一人が神職役として御幣を持ち、他の組頭とともに続く。そして太夫仲間（二名、太鼓、甲斐性松明の順となる。下脇仲間と合流してからは、猿田彦面を先頭に、下大惣仲間の一本鉾、下大惣仲間神職役・同組頭・太夫仲間・下脇仲間組頭、次には下大惣仲間の四本鉾（四本鉾は御旅所から合流、その後ろに下大惣仲間の太鼓、下脇仲間の綱、下大惣仲間の松明、下脇仲間の松明となり、中大惣仲間・中脇仲間との諸礼にのぞむ。

トウヤ飾り

平成二十三年の宿は、杉本貞



下大惣仲間の宿。宿の前に、一本鉾と猿田彦の面が付けられた鉾を飾る（上田喜江、平成23.10.22）



下大惣仲間の宿飾り（上田喜江、平成23.10.22）

子家であった。宿は、組頭の五軒のうちから、事前に話し合いで決めている。祭りに関わる鉾や飾りなどの道具類は、組頭が分けて預かっている。

宿飾りは、屏風を巡らせ、その前に天井から竹竿を吊り、ヘレンをかける。祭壇の中央には、留守鉾を安置し、下段には古い猿田彦の面が飾られる。軒には幔幕が張られ、外には一本鉾と猿田彦の面がつけられた鉾が立てられる。鉦・太鼓も用意される。

留守鉾の前には、三方に洗米、塩、神酒徳利、灯明を供える。ゴス（御簀）と呼ばれる舟には、赤飯・甘酒・大根、葉つき生姜を納め、これをゴク（御供）といい、これも祭壇に供える。一本鉾、四本鉾の前にも、足下に洗米、塩、灯明を供える。

その他

四本鉾は、もともとは宿の前に立てていたといわれるが、昭和三十年代か、それ以上前には、下在地の中でも北のほうに場所を設けて立てるようになったという。御旅所前に立てるようになったのは、平成二十三年頃からだという。

各家の前には、鉄製の灯明台があり、それで焚かれるかがり火をエジという。これは、道路が舗装された頃に新調して各戸に配ったものだという。地面で焚くかがり火と区別して、エジと称するようになった。現在も、広い土地があるところでは、地面で焚くかがり火があり、毎年数か所はそうなかかり火がみられる。

（上田 喜江）

中大惣仲間（中在地）

概要

中在地は御旅所から鞍馬寺門前より府道三八号を東へ六十メートルほど入ったあたりまでの地域である。中大惣仲間は約十軒で、組頭は二軒、ほかは若衆である。

中在地には現在、「一本鉾」「四本鉾」「留守鉾」の三基の剣鉾がある。一本鉾は露払いの役目を果たし、四本鉾には神が鎮座するといわれる。

一本鉾は菊の意匠で、巡行に際しては両手で持ち上げて運ぶ。疲れたら地面に立て、また両手で持つことを繰り返していた。平成十八年頃から、東山系の鉾差しに倣って、差革と呼ばれる帯を使つて鉾の棹尻を支えるようになった。

四本鉾（意匠は菊）の棹は、前一本がオヤ、横二本がワキ、後ろ一本がカリと呼ばれる。それぞれの棹を持つ鉾差し四名と、鉾全体のバランスを見ながら指示をするホコモト（鉾疋が一名、鉾の近くにつく。ホコモトは、若衆の長老がなる。

留守鉾（意匠は樺）は宿に飾られ、「飾り鉾」とも呼ばれる。この鉾はもと四本鉾として使われていたものである。

鉾祭りの次第

十月十五日に、仲間の寄合いがあり、役割分担を決める。二十一日の午後七時頃から、宿に仲間が集まって宿飾りをする。

十月二十二日は、午前九時の由岐神社の神幸祭に参列し、夕方の「鉾祓い」にも参列する。午後六時から神事触れがあり、「神事にまいらっしゃーれ」という声を聞くと、各家でエジ（かがり火）に点火する。午後七時頃（出発の時間にあわせて毎年変わるに、仲間は衣装を着替えて宿に集まる。その時、甲斐性松明は、家から点火して宿に持つていく。甲斐性松明は四種類あり、小さいものは徳利に似ているためトックリといい、だいたい就学前の子どもたちが担ぐ。小松明は小学生、中



中大惣仲間の四本鉾（意匠は菊）（青江智洋、平成 23.10.22）



中大惣仲間の一本鉦（菊）
（河野康治，平成 23.10.22）



中大惣仲間の飾り鉦（椿）
（河野康治，平成 23.10.22）

松明は中学生、大松明は高校生以上というのが、おおよその目安である。甲斐性松明が宿に集まると、行列が発するまで、各自で松明を担いで練り歩く。

しばらくすると、下大惣仲間の宿より中大惣仲間の宿へ「遣いの松明」が来る。

下大惣仲間からの遣いを中大惣仲間の組頭が迎えて挨拶を行い、口上が述べられてお神酒をいただく。その一行は下大惣仲間へいったん戻り、午後七時二十分頃、中大惣仲間の宿から上大惣仲間の宿へ「遣いの松明」が向かう。その遣いが戻るまでに、下大惣仲間からもう一度、「二の遣い」が来る。

午後八時ごろ、中大惣仲間が行列を仕立て大門町（山門前の石段下から街道が右折するまでの地域）へ向かう。大門町では、中脇仲間と諸礼をして合流し、下大惣仲間との諸礼のため、中在地の立石前（中大惣仲間の四本鉦を立ててある）へ向かう。立石前に到着すると、中大惣仲間の四本鉦に吹散をとりつけ、下大惣仲間らの到着を待つ。

午後八時三十分ごろ、立石前で下大惣仲間らと諸礼を行う。これを「立石の諸礼」と呼ぶ。諸礼の間、一本鉦は地面に立て、鈴は鳴らさない。その際、橋の上に安置していた四本鉦を差して、下大惣仲間の四本鉦の後ろにつく。下大惣仲間とともに上に向かって、午後八時四十五分ごろ大工衆仲間と大門町の立石前で諸礼を行う。午後八時五十分ごろ、下大惣仲間、大工衆仲間とともに、上大惣仲

間らと石段下で諸礼を行う。その後、名主仲間と諸礼を行う。

午後十時五十分ごろ、神楽松明が御旅所の前に立てかけられる。午後十一時十分ごろから御旅所前にて御旅所祭が始まる。午後十一時十五分ごろ御旅所に神輿が到着し、神輿蔵に安置されると、三顧の礼が始まる。

十月二十三日、午前十時より宿にて「鉦じまい」をする。鉦、鎧などジンドウグ（神道具）は、仲間の各家で分担して保管する。

行列次第

中脇仲間との諸礼・合流までは、先頭は組頭二名、次に一本鉦、次に太鼓、次に松明が続く。中脇仲間と合流してからは、中大惣仲間組頭二名・中脇仲間組頭、次に中大惣仲間の一本鉦、その後ろに中大惣仲間の太鼓、中大惣仲間の松明、中脇仲間の松明となる。

下大惣仲間・太夫仲間・下脇仲間との諸礼の後は、先頭は猿田彦面、次に下大惣仲間の一本鉦、次に下大惣仲間神職役・同組頭・太夫仲間・下脇仲間組頭・中大惣仲間組頭・中脇仲間組頭、そして次に中大惣仲間の一本鉦、次に下大惣仲間の四本鉦・中大惣仲間の四本鉦、次に下大惣仲間の太鼓・中大惣仲間の太鼓、次に下脇仲間の綱・中脇仲間の綱（この諸礼が済んでから道中に入る、次に下大惣仲間の松明・中大惣仲間の松明、下脇仲間の松明・中脇仲間の松明となり、大工衆仲間との諸礼にのぞむ。

トウヤ飾り

平成二十三年は、信楽家が宿となった。格子戸を取り払って宿飾りがなされる。屏風を立て、竹竿にヘレン（吹散）をかける。正面に向かって左側（北側）には鎧を、中央には留守鉦の鉦頭を飾り、右側（南側）には、安永九年（一七八〇）の年記がある吹散の箱を飾る。箱の表には、「有栖川宮御寄附／由岐大明神剣鉦吹散二掛」と墨書がある。

また留守鉦の御膳には野菜、御神酒などが供えられ

ている。また、手前正面には賽銭箱が置かれている。

宿は十軒の仲間の家を、一年ごとに時計回りの順で当たるといふ。

その他

昭和三十一年（一九五六）に大洪水が発生し、山門前の道が川のようになり、それ以来七年間祭りは催行されなかった。また昭和天皇が亡くなった昭和六十四年（一九八九）も祭りはなかった。

四本鉾は、もともと椿の鉾を巡行に差していたといわれているが、昭和初期には、四本鉾の巡行は中断された。宿飾りには、もともと菊の鉾が使われていたが、平成十三年頃、四本鉾の巡行を復活するにあたり、状態のよかった菊の鉾を巡行に使い、椿鉾は宿飾り用に使われるようになった。その時から、四本鉾は中在地の立石前に立てるようになったという。

中脇仲間と中大惣仲間の諸礼は、平成十三年頃、数十年ぶりに復活したものである。

（河野 康治）

大工衆仲間（岩仲、上在地、中在地）

概要

大工衆仲間は、昔は鞍馬寺の大工であったという伝承を有する仲間である。かつては七十軒程度の家があったが、現在は三軒（原龍彦氏、勝西勇氏、中川範久氏）となり、組頭は原氏が務めている。組頭は仲間内での世襲である。

鉾は二基あり、いずれも桐鉾と呼ばれる。一基（一本鉾）が差され、一基が留守鉾に用いられる。留守鉾の方が古く、剣の入っている箱の蓋表に「御釵箱 大工仲間中」、本体の底に「文化四乙卯九月吉日 細工人久治良」とあるのは、留守鉾のことと思われる。「久治良」とは、宿である中川家の屋号であるので、文化四年（一八〇七）時点で大工であった久治良が、鉾の新調にあわせて箱を製作したのかもしれない。一方、新しい一本鉾はいつ新調したのかはわからない。

留守鉾の剣は、一本鉾に比べて長く、厚く、重い。意匠は鍔受に五七の桐、鍔

に菊と桐、受金には三つ巴が三つ配されている。新旧とも基本的には同じデザインだが、細部は異なる。なお、新しい鉾は鍔受と受金が一体となっている。

棹は一本あり、かつて中大惣仲間から譲り受けたとされる。新しい鉾を棹に差して他の仲間との諸礼に臨んだり、御旅所に差したりする。

鉾の部材の中で一番大事なのはヘレン（吹敷）とされている。ヘレンは新旧二つあるが、ともにいつ新調したのかはわからない。

なお、桐鉾の本来の名前は「百足鉾」といい、百足は鞍馬寺の本尊である毘沙門天にちなむとされる。「百足鉾」の名は、弘化二年（一八四五）の祭礼の次第を記述した『鞍馬村九月神事祭之旧記』などでも、他の鉾とともに出てくる。

鉾祭りの次第

十月二十一日に宿の飾りや鉾の組み立てを始める。

祭礼当日の二十二日は、まず午後三時前に由岐神社の宮司が宿に来て、祝詞を奏上する。いったん解散した後、午後八時少し前に、再び大工衆仲間が宿に参集する。午後八時十五分ごろに桐鉾（一本鉾）が発し、叡山電鉄鞍馬駅付近の立石で待機し、四十分ごろに下から来た下・中大惣仲間らと諸礼を行う。その後は大工衆仲間が合流し、上大惣仲間、そして名主仲間との諸礼に向かう。諸礼後、鉾はいったん宿に戻る。午後十時四十五分ごろ、神輿巡幸が宿を通過する際に、桐鉾は由岐大明神の神輿の後ろにつき、差しながら御旅所に向かう。午後十一時ごろ神輿が御旅所に着くと、鳥居前で「リーン、リーン」と鈴を鳴らし続ける。これは御旅所に神輿が無事収まるまでを監視する役割だといふ。御旅所で二基の神輿上げが済むと、神輿に乗っていた鎧武者一人が、大工衆仲間の鉾差しに挨拶し、



大工衆仲間の宿。桐鉾
（本多健一、平成23.10.22）

鉾差しはそこではじめて鉾を振るのを止める。およそ午前零時頃に終了し、その後一本鉾は鉾宿に戻って解体される。

二十三日は午前中の還幸祭終了後、留守鉾などのお飾りを片付ける。

行列次第

先頭は組頭、次に一本鉾、次に松明が続く。下大惣仲間・太夫仲間・下脇仲間・中大惣仲間・中脇仲間との諸礼をして合流すると、先頭は猿田彦面、次に下大惣仲間の一本鉾、下大惣仲間神職役・同組頭・太夫仲間・下脇仲間組頭・中大惣仲間組頭・中脇仲間組頭、大工衆組頭、次に中大惣仲間の一本鉾・大工衆仲間の一本鉾、次に下大惣仲間の四本鉾・中大惣仲間の四本鉾、次に下大惣仲間の太鼓・中大惣仲間の太鼓、次に下脇仲間の綱・中脇仲間の綱、次に下大惣仲間の松明・中大惣仲間の松明、大工衆仲間の松明、下脇仲間と中脇仲間の松明となり、上大惣仲間・上大脇仲間との諸礼にのぞむ。

トウヤ飾り

大工衆仲間の宿飾りは、近年は中川氏宅で行っている。宿飾りの中心は留守鉾とヘレンである。ゴク（御供）は、芋茎（ずいき）なます、甘酒、赤飯を桶に入れ、別に葉付き大根二本と葉付き生姜二本を供える。ゴクは神輿が宿の前を通ると御旅所に持っていく、他の仲間の御供えとともに神輿に供えた後、鉾と一緒に宿へ帰ってくる。

なお、鉾などの道具一式は、組頭である原氏宅に保管されている。

その他

仲間の各家に古文書類などは特にない。

（本多 健二）

上大惣仲間（上在地）

概要

現在、上大惣仲間は十七軒の家で構成されている。この仲間は代々続いた関係であり、他所からの転入によって、新たに加入することはないとされている。こ

の中で、二軒の家が組頭の地位を世襲している。組頭となる家の者は、祭礼の中で神輿乗役という役割も務める。父親から息子に組頭の座を生前に譲る例もみられる。組頭のうちの二軒の家が、鉾や宿飾りなどを保管している。

上大惣仲間としての付き合いは、祭礼のためのものであり、日常生活互助関係などは特に存在しないようである。

上大惣仲間の鉾は昭和四十五年に火事で焼失したため、現在の鉾はそのあとに新調されたものを使用している。なお、現在の鉾の棹の部分は平成二十年に新調したものである。棹を新調した際に、脇で支える棹を取り付ける部分がネジ式のものになった。それ以前は、縄で括っていたという。菊花紋のヘレン（吹散）を保管する箱の墨書に、文化十一年（一八一四）九月の年記があり、もうひとつの、蝶の紋が入った吹散を保管する箱には昭和三十二年の年記がある。

鉾祭りの次第

上大惣仲間は十七軒からなり、順番で鉾宿が選ばれる。



上大惣仲間の宿と四本鉾（大野啓，平成 23.10.22）



上大惣仲間の宿飾り（村上忠喜，平成 22.10.22）

祭礼前になると、上大惣仲間の組頭が自家で保管している飾りなどを宿に運び、宿飾りを行う。平成二十三年の場合、祭礼の前々日と前日に行った。なお、祭礼当日の早朝には四本鉦の部材を組み立てて、宿の前に立てる。

祭礼の当日の午後になると、由岐神社の宮司が各鉦宿に参る。その際に宿の飾りと鉦宿の外に立ててある鉦に対して祈禱を行う。

鉦の巡行は、中大惣仲間から巡行の準備が調った旨を伝えられると（中の遣いの松、同様の趣旨を伝えるための遣いの松を名主仲間と上大脇仲間に発し、今度は名主仲間と上大脇仲間から遣いの松を迎えてから、鉦と松明の行列を組んで、山門前への巡行を開始する。上大脇仲間の宿の前を通過する際に諸礼を行い、上大惣仲間と上大脇仲間は一つの行列となつて巡行を続ける。ただし、名主仲間の宿の前を通過する際には、諸礼はするものの、名主仲間とは合流はしない。その後、山門前で下大惣仲間・中大惣仲間らの行列と諸礼をして合流し、名主仲間と諸礼をする。その後、注連縄伐りがあつて、安置された神輿前に進み、山門前祭が行われる。

神輿巡幸では、他の仲間と同様にゴク（御供）を持った若衆が巡幸に従う。また、上大惣仲間に伝来している甲冑をつけた人物が同行する。

行列次第

上大脇仲間との諸礼・合流までは、組頭二名を先頭に、四本鉦、太鼓、甲斐性松明の順である。上大脇仲間と合流してからは、上大惣仲間組頭二名、上大脇仲間組頭二名、次に上大惣仲間の四本鉦、上大脇仲間の綱二本（岩仲と上在地、次に上大惣仲間の太鼓、上大惣仲間の松明、上大脇仲間の松明となり、下大惣仲間・太夫仲間・下脇仲間・中大惣仲間・中脇仲間・大工衆仲間との諸礼との諸礼にのぞむ。

トウヤ飾り

宿ではヘレンと呼ばれる見送り幕三流、甲冑と刀と脇差をそれぞれ一振りと灯明、供物を屏風の前に飾ることになっている。ヘレンは一つが菊花紋、二つが向かい蝶の紋であり、菊花紋のヘレンが最も古いものであるという。供物には赤飯

とズイキ膾をそれぞれ桶に入れ、大根と葉付き生姜を供える。

その他

上大惣仲間は鞍馬の集落の下から上のほうへと移っていった家々によって構成されている、という伝承がある。また、大惣仲間は下・上・中の順番で成立した、という伝承もある。いずれにしても、大惣仲間の基となつたのは下大惣仲間であるとされている。

（大野 啓）

名主仲間（岩仲、上在地）

概要

名主仲間は現在、鞍馬本町の中央から北部に散在する七軒で構成される。神主仲間、社家仲間ともいう。天慶三年（九四〇）に由岐神社とともに鞍馬へ移った賀茂社の社家二十五軒の流れをくむ一族であると伝えられている。初めはみな山本姓を名乗ったというが、現在の山本家は山本一智家であり、分家の仲間を「インキョ」という。

名主仲間をまとめるのが「組頭」である。現在は、インキョの山本博史氏が平成二十二年から務めている。組頭には仲間のうち主だった者が就くが、本来は本家の責務であつたという。死穢を「ブク」といい、ブクが出ると組頭を退く。

もともと名主仲間は神職集団であり、名主仲間から由岐神社の祭祀に携わる神職を選出している。仲間にはそれぞれの家を代表して男性が参加する。多くは戸主である。老齢になり、仲間としての務めがたいへんになると、子が代わりに参加するようになる。子どもはたいいてい、親を手伝いながら仲間の務めを学んでいる。仲間の滝川友二郎氏宅を栢堂（カヤドウ）といい、もともとはお堂であり仲間の集会所に使っていた。

名主仲間は「葵鉦」と「阿弥陀鉦」という二基の鉦を所有している。

葵鉦は、葵の鏝がついた四本鉦で、普段は山本本家の隣にある空き家に保管されている。現在使用されていない受金には享保三年（一七一八）九月八日の墨書



名主仲間の四本鉾（葵）（中野洋平，平成 23.10.22）



名主仲間の阿弥陀鉾（中野洋平，平成 23.10.22）

が確認できる。

阿弥陀鉾は、これまで保管されるのみで祭礼には出されなかったが、平成二十三年の祭礼では組頭宅に飾られた。鉾頭のみが現存し、菩薩形の立像が受金の表裏に付けられている。吹散を納める箱の表に「青蓮院宮御寄附」、裏には宝暦八年（一七五八）九月五日の墨書がある。また、吹散の軸棒と思われるものには寛文三年（一六六三）の墨書がある。

鉾祭りの次第

宵宮祭の前までに、鞍馬寺山門に竹立と注連縄を設置する。これを「精進竹立て」（ショウジンタケタテ）といい、名主仲間の役務である。その夜、神社でお祓いを受けた小さな櫓を鞍馬本町各家の戸口に挿して回る。これは祭礼に参加することができる印であり、ブクがある家には挿さない。これも名主仲間の役務であり、「いみさし」という。

祭礼前日の午後六時から仲間全員で鉾を組み立てる。ただしこれは平成二十二年からであり、以前は祭礼当日の朝に行なっていた。組み立てた鉾は、いったん仲間の倉庫に片付けられる。

祭礼当日の午前七時半から鉾と宿の飾り付けを行なう。組頭の指揮のもと、仲

間の各人が分担して作業にあたる。その後、午前九時から神社で行なわれる神事に参加する。神事で本殿から神輿に神霊を遷す際、名主仲間は「名主幕」を張って目隠しする役務がある。神事が済むと各人はいったん家に帰り、自家での準備をする。午後二時ごろ、宿に宮司が祈禱にくる。

夕刻、神事触れが通ると、エジ（かがり火）に火が入られ、仲間は衣裳を着替える。午後七時に松明が点火され、やがて、上大惣仲間からの遣いの松を迎える。七時四十五分ごろ、由岐神社の宮司が到着し、宿にて修祓を行う。これ以降、宮司は名主仲間と行動をとにする。上大惣仲間へ遣いの松を出し、その松明が帰ってくる、いよいよ上大惣仲間・上大脇仲間の行列がやってくる。宿の前で諸礼を行なうが、合流はせずに行列を見送る。それから少し間をおいて、名主仲間の四本鉾を台座から外し、列を整えて山門前へ向かって出発する。行列は宿飾りの中心にあった大幣（後述）を先頭に、組頭や由岐神社の宮司らが並び、その後ろに仲間の若い者による四本鉾、そして甲斐性松明がつく。山門前に到着すると、上大惣仲間らと合流した大きな集団と対面し、諸礼を行う。この際、組頭、由岐神社の宮司、ホコモト（鉾正）は横一列に並び、「サイレヤ、サイリョウ」と発しながら三歩前に出て、三歩返る。この動作を三度半行った後、互いに礼をする。

この後、組頭たちが山門へ向かうと、四本鉾は担がれて宿へ戻り、仲間の倉庫に片付けられる。これ以降、祭礼に名主仲間の鉾は登場しない。祭礼翌日の朝に、ヤドの飾りとともに解体される。

山門で注連縄伐りが行なわれ、神輿の渡御が始まるまでの間、名主仲間による「本田楽」が奉納される。これは仲間の家の幼稚園から小学校までの男子二名が役者となり、烏帽子、直垂に草鞋という装束で笏を持ち、大人の太鼓に合わせて神輿の前で舞う。仲間に適当な男子がい



名主仲間の宿。四本鉾（葵）とオハケ（中野洋平、平成 23.10.22）

ない場合は、本田樂そのものを行なわないうため、平成二十三年には行なわなかつた。

渡御で八所大明神の神輿を先導するのは、名主仲間の役務である。御旅所の神樂殿に上がることができるのは名主仲間だけに許されたことであり、渡御から神輿が御旅所につくと、彼らは神樂殿で各仲間からゴク（御供）を受け取り、神輿の前に並べる役を務める。祭礼が終了すると、神樂殿に用意された神酒をふるまう。

トウヤ飾り

祭礼で鉾が飾られる家が「宿」である。宿は毎年変わり、たいてい名主仲間の家並み順にまわっていく。ただし、ブクの家は避け、新築や改築した仲間があれば積極的に引き受けることになっている。

宿の軒先には「オハケ」が立てられる。これは藁を束ねた胴に、柿と小さな幣帛六本を刺したもので、約八メートルの真竹に挿して立てられる。幣帛の数は、本来は十二本であったが、近年略された。宵宮祭の当日に作られ、宮司に祈禱し

てもらう。オハケを宿に立てるのは名主仲間のみである。

宿飾りは、戸口に注連縄を張り、宿の表に四本鉾を立てる。鳥居型の台座に据え付けた鉾の棹は注連縄で結ばれ、塩と神酒が供えられる。なお、棹の間はくぐってはならない。

宿の通りに面した部屋に、名主仲間の「ご神体」を飾る。これは大きな「幣帛」（大幣）であり、当日の二、三日前に宮司が持つてくる。室内には葵の模様が入った幕が張られ、荒菰を敷いたひな壇の最上部にご神体が安置される。神前には錫製の銚子が一對、ゴス（御簀）と呼ばれる舟に載せられた供物が進ぜられる。供物は大根、生姜、甘酒、栗おこわ、赤ズイキ膾である。部屋の表には、葵と菊の紋が入った幔幕が張られる。

行列次第

宿から山門前までの行列は、名主仲間から選出した神職（大幣を持つ）・組頭・由岐神社宮司・由岐神社神職、次に四本鉾、次に松明と続く。下大惣仲間・太夫仲間・下脇仲間・中大惣仲間・中脇仲間・大工衆仲間・上大惣仲間・上大脇仲間との諸礼にのぞむ。

その他

仲間共有の文書として、江戸後期から現代にかけての文書約二百点が、組頭によって保管されている。

（中野 洋平）

③ その他

七仲間のうち、鉾を有していない仲間についても簡単にふれておきたい。

太夫仲間は火祭りの際に御旅所と山門下の精進竹に張られた注連縄を伐る役目を担っている。太夫仲間の衣装は洪茶地に二つ引きの素襖を着用し、烏帽子を戴き帯刀する。袴は膝で括り白足袋に黒紐の武者草鞋を履くというスタイルである。太夫仲間は現在一軒のみであるため、この者が忌服の年は下大惣仲間の者が注連縄伐りを代行して務めることになっている。現在の太夫仲間は並川力夫氏である。

祖父の代までは仲間の家が数軒あったという。注連縄伐りの役目は自分が引退したら次は息子が務めるし、その次は孫が務めてくれるだろうと語る。また、注連縄を伐る役目は、下大惣仲間が推薦した家の者が務める習わしであったという。

宿直仲間は寺に宿直した侍役の流れをくむ家筋の者とされ、岩仲、上在地、中在地に分散している。かつては大惣仲間や名主仲間とならぶ、村の中心的存在であったという。現在の祭礼では、御旅所で御供を献じることが役目としてある。また、前述したように夜の行列では、僧達仲間とともに山門前の石段上から他の仲間を待ち受ける役目を担っている。

脇仲間は大惣仲間の補助をする役割をもつ。上大惣仲間には上大脇仲間、中大惣仲間には中脇仲間、下大惣仲間には下脇仲間がつく。二基ある神輿につなぐ綱を分担で護持している。

（青江 智洋）

④ 資料と記録

主要な調査報告・論文・地域誌

- 村上文芽「鞍馬竹伐と火祭」『文藝倶楽部』第八巻第六号、博文館、一九〇二年
 浜田如洗「鞍馬の火祭」『風俗画報』三百七十七号、ゆまに書房、一九〇八年
 佐々木嘯虎「鞍馬の火祭」『郷土趣味』第十五号、郷土趣味社、一九一九年
 「山城国鞍馬村由岐神社火祭の大炬火」（田中緑紅編『奇習と土俗』その一、郷土趣味社、一九二一年）
 江馬務『日本歳事史 京都之部』（内外出版印刷、一九三二年）
 橋川正『鞍馬寺史』（鞍馬山開扉事務局出版部、一九二六年）
 「深夜の火祭（洛北鞍馬山）」『風俗研究』百九十七号、風俗研究会、一九三六年
 本山桂川『日本の祭礼——祭礼民俗誌——』（八弘書店、一九四二年）
 清水平作『祭事枝扇』（芸術殿社、一九六一年）
 田中緑紅『ふるさとの祭と行事』（京を語る会、一九六九年）

信楽香雲『鞍馬山歳時記』（鞍馬弘教総本山鞍馬寺出版部、一九七〇年）

日本祭礼行事集成刊行会編『日本祭礼行事集成』第四巻（平凡社、一九七一年）
 坪井正直『京都洛北物語』（雄山閣、一九七二年）

『京都の歴史』第六巻（京都市、一九七三年）

鞍馬小学校百年誌編纂委員会編『鞍馬校百年誌』（一九七五年）

『鞍馬 町なみ調査報告』（京都市計画局、一九八二年）

阿南透「鞍馬火祭——三元的構成の祭礼——」（京大学人類学研究会編『季刊人類学』第十四巻第三号、講談社、一九八三年）

保田與重郎「鞍馬の火祭」（『保田與重郎全集』第三十一巻、講談社、一九八八年）

阿南透「鞍馬の火祭」（『仏教行事歳時記』十月、第一法規出版、一九八九年）

神道大系編纂会編『神道大系』神社編四 宮中・京中・山城国（神道大系編集会、一九九二年）

鞍馬火祭保存会監修『鞍馬の火祭』（鞍馬火祭保存会、二〇〇二年）

小谷利明「鞍馬寺と門前住人」（『畿内戦国期守護と地域社会』清文堂出版、二〇〇三年）

森川順行（ほか）「鞍馬の火祭」（『週刊朝日百科 日本の祭り』十九、朝日新聞社、二〇〇四年）

村上忠喜「鞍馬火祭——火のものと結集」（財団法人建築保全センター『Re』百五十号、二〇〇六年）

鞍馬火祭保存会監修『山里の熱き思いを伝えたい 由岐神社例祭 鞍馬の火祭』（鞍馬火祭保存会、二〇一〇年）

映像資料

大曾根辰夫監督・風寛寿郎主演の映画『鞍馬天狗・鞍馬の火祭』（一九五一年公開、松竹京都撮影所）において、鞍馬火祭の様子を取り入れた場面がある。
 その他は以下の通り。

『鞍馬の火祭』（京都市観光局企画、一九七五年制作、十五分）

「ふるさとの伝承 鞍馬の火祭―祭りを支える「仲間」たち―」（NHK教育テレビ、一九九七年十二月七日放送、四十分）

由岐神社・鞍馬火祭保存会監修『平成十七年 由岐神社 例祭 鞍馬の火祭』（町家プロダクション制作、二〇〇五年、三十三分）

「鞍馬の火祭」（株式会社ネスト企画『日本の祭り 4 火』株式会社アートウェア・コミュニケーションズ、二〇〇六年制作、十分）

KBS京都制作『京の祭 鞍馬の火祭』（二〇〇七年制作、二十分）

京都市左京区役所企画・制作『左京を彩る伝統絵巻』（左京区役所、二〇〇八年制作）

主要な劍鋒祭礼記録・古文書

小河景三『はなひ草綱目』寛文八年（二六六八）／坂内直頼『山城四季物語』五、延宝二年（一六七四）刊

黒川道祐『日次紀事』延宝四年（一六七六）

北村季吟『菟芸泥赴』貞享元年（一六八四）

水雲堂孤松子『京羽二重』卷二、貞享二年（一六八五）刊

水雲堂孤松子『京羽二重織留』卷之一、元禄二年（一六八九）

「大惣仲間文書」宝永四年（一七〇七）十一月十六日、元文四年（一七三九）十月など

『都すゞめ案内者』正徳五年（一七一五年）刊

『山城名所寺社物語』享保十九年（一七三四）ごろ

浄慧『山城名跡巡行志』宝暦四年（一七五四）

池田東籬『都名所車』文政十三年（一八三〇）刊

「下在地大惣仲間文書」万延元年（一八六〇）九月など

（青江 智洋）

石座神社 例大祭（岩倉火祭）

毎年十月二十三日に近い土曜日

石座神社

京都市左京区岩倉上蔵町

① 祭礼と由緒

地域の概要

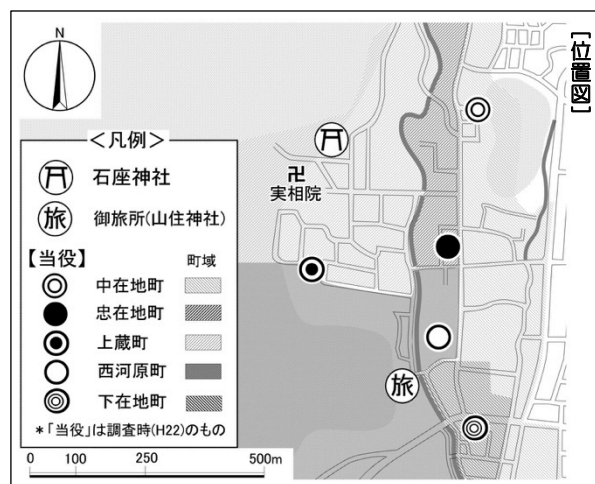
岩倉という地名は、神が巨石に降り立つとする、いわゆる磐座信仰に由来するといわれている。また平安京造営時に、都の四方の山上に一切経を納め東西南北の名を冠する四つの岩蔵が設けられた際、この地にもその岩蔵の一つがおかれたことに端を発するとも伝えられる。平安時代の文献にはすでに「石蔵」という表記が見られ、中世以降になると「岩倉」・「石座」等の表記が現れるようになる。

今日の岩倉の氏神である石座神社は、元は現在の御旅所である山住神社に祀られていた「石座明神」を天禄二年（九七一）の大雲寺建立に際して、その鎮守社として勧請したのが始まりとされている。その後長徳三年（九九七）に七所を勧請して「八所明神（東社）」とし、また後に西社に「十二所明神」を祀るようになったとされている。

石座神社の氏子は、忠在地（ちゅうざいち）・中在地（なかざいち）・上蔵（あぐら）・西河原・下在地・村松の六町で、このうち村松を除いた五町が、それぞれ二本ずつの鉦鉦を有している。また六町の中で、大松明を作る役割を担っているのが中在地（東松明）と忠在地（西松明）である。下在地は昼神事に大御幣を神社に納める役割を担い、上蔵は神輿の飾り付けと渡御の際の先導役を担っている。村松と西河原は、本殿に供える甘酒を準備することになっている。基本的に石座神社の祭礼においては、下在地と上蔵の二町が大きな権限を有している。また、六町で一年交代に「宮元町」が廻る。順序は下在地・上蔵・村松・西河原・中在地・忠在



石座神社の拝殿（青江智洋、平成 22.10.22）



地である。宮元町から、男女一人ずつの稚児を出すことになっている。稚児は男女どちらでもよいとされている。年齢は特に決まっていないが、行列に辛抱強く参加できる年齢で、およそ小学校入学前の児童がほとんどである。各町のトウヤがお稚児さんの手配をし、自分の子どもや孫、親戚の子どもや近所の子どもなどに頼むことが多いという。

氏子六町では、町内でいわゆる宮座が構成され、その座員たちによって祭礼が運営されている。宮座の構成原理に関しては町ごとに事情が異なる。たとえば上蔵では、数年前までは旧の農家のみの十六軒が祭りに参加していたが、近年新興の人が多く、一緒に祭りに参加することによって人手不足を解決したいとの声が上がリ、また岩倉の宮座会員が減ってきたことから、祭りが維持できなくなり役員が不安になったので、四、五年前からアパートに住んでいる人にも祭りに参加するように呼びかけた。その結果、アパートの住人と外国人がそれぞれ一名ずつ参加してくれている。その後も新しい人が数名入ってくれたという。しかしこの



点火前の大松明（青江智洋、平成 22.10.22）



稚児（昼神事）（犬持雅哉、平成 22.10.23）

「郷頭」(ごかしご)を二年間務めると、本部役員の相談役である「総代」に上がり、総代を二年間務めると本部役員に、それをさらに二年間務めて引退するという仕組みになっている。

各町内では毎年一年交代でトウヤが廻る。トウヤは町によって「宿元」「当役」などと呼ばれている。トウヤは、剣鉾やその祭具（鉾の棹、餅籠、御供用の天秤棒、提灯

ような例は稀であり、他町ではおおむね旧の住人たちだけで宮座を構成しているケースがほとんどである。

かつてはどの町も三年で座内の役を交代していたようだが、近年は二年で交代するケースが多い。たとえば上蔵では、町内のまとめ役である

等を一年間管理し、祭礼の前にはまず町内で寄付金を募り、祭礼では宮座衆と神輿の舁き手の接待役を務める。また神社にお供えした御供を各家に配る役割も担う。

なお、上蔵には当役が二人いる。それは仕事を分けるためであるという。一人が当役宅に集まった人たちに御神酒をもてなす役割を、もう一人が神社の座の準備と接待をする役割を担っている。この方法は以前からのもので、上蔵だけの特徴である。

祭礼次第

石座神社例大祭は、火祭りとして有名であり、昭和五十九年に京都市無形民俗文化財に登録された。この祭りの起源については、昔、雄雌の大蛇が村人を苦しめており、困った村人たちが石座明神に祈願したところ、「神火をもって退治せよ」とのお告げがあった。そこで大松明を燃やしたところ、見事に大蛇を退治することができたという伝説が伝えられている。元禄期には今日とほぼ同様の松明があったといわれていることから、近世初期には行われていたことが推測できる。

およそどの町においても、前日（金曜日）の夕刻からトウヤ宅では朝神事の鉾を組み立てるため、下にブルーシートを敷き、多くの道具が並べられる。たとえば下在地町では、日付の変わる午前零時頃、トウヤ宅に「上五人」と呼ばれる宮座の人たちが紋付き袴に鼻緒を白い紙で包んだ下駄姿で集まる。上五人とは、郷頭と総代を除いた高齢者五人のことで、年齢順にその役を務めることになっている。上五人のなかで不幸事があった場合は、六番目の高齢者が代理を務める。なお上五人は、おおむねどの町でも剣鉾を運ぶ役を担っている。上五人の最年長者は「一番和尚（いちばんわじょう）」と呼ばれ、年齢順に二番和尚、三番和尚、四番和尚、五番和尚と呼ばれる。またトウヤは古くからの住人の中で、長い剣鉾を組み立てるスペースがある家が務める。

夜の鉾作りでは、およそ一時間かけて鉾を完成させ、午前一時三十分には神輿担当の若衆も集合して、玄関に置かれていた手持ちの松明を出す。鉾を表に出すと、清めの酒を酌み交わし、乾杯を行なう。



剣鉾の組立て（下在地）（福持昌之 平成 22.10.23）



深夜に剣鉾を石座神社へ運ぶ（西河原）（犬持雅哉 平成 22.10.23）



座小屋での宴会（中在地）（渡部圭一 平成 23.10.22）

午前二時に行列を整えて石座神社へ向けて出発する。集まった若者によって松明に点火される。松明に火がつくと、松明、氏子総代、剣鉾（四人で担ぐ）、帰り用の松明の順に並んで進む。下在地町は神社からもっとも離れており、御幣役という行列の先導役を担っているため、他の集落の行列を待たず、先頭に立って御幣役を行なう。また他の集落の行列は下在地町が来るのを待っており、下在地町が来たらその後についていく。これは下在地町が「厄払い」の役を担っているため、一番鉾となっているからだという。

行列は、町ごとに、提灯（郷頭）を筆頭に、松明（役者、鉾（上五人）、御供籠（当役、総代、松明二人（神輿昇き二人）と続く。二本の松明は行列用と迎え松明で、行列用は朝神事に使用し、迎え松明は上蔵の役割である朝神事の行列の際、十王堂橋で朝神事の先頭の行列を迎えるための松明である。その後全員（本部役員、神輿昇きなど）が列をなす。各町の当役の家からそれぞれ出発し、その後、下在地を先

頭にして各ポイントにて、西河原、忠在地、中在地、村松、上蔵が後ろに続き最終神社まで行く。

午前二時二十分ごろにはすべての町が石座神社に到着し、行列はすぐに町ごとに決められた座小屋に入る。鉾を座小屋の前に立てて一同で神社に参拝する。座小屋ではすでに宴の準備がなされており、次年度のトウヤが上五人から順にお酒を注いで回り、宴が始まる。この時の接待はトウヤとその家族、そしてその親戚が行なうことになっている。

午前二時四十分には本殿前では神事が執り行われる。全集落の氏子総代と郷頭が本殿にむかつて右側、神官と巫女がむかつて左側に並ぶ。神事では神官と氏子総代によって本殿前に設けられた御飯屋で献撰をする。

午前三時、神事が執り行なわれるなか、左右の座小屋前に設けられた大松明が点火される。この頃、神事では巫女舞が拝殿で行なわれ、それが終わると各集落からの御供が供えられる。本殿への献撰が終わると社務所に御供の一部をトウヤが持つていく。

午前四時、神輿渡御の準備が行われ、午前五時には子供神輿が、午前五時三十分には大人神輿がそれぞれ石座神社を発ち御旅所へと向かう。行列は下在地を先頭に、西河原、中在地、忠在地、上蔵の順番で御旅所へ向かう。なお、村松の本部役員ら三役は子供神輿に付き巡幸する。

行列は次のように並ぶ。松明持ち（役者）、鉾持ち（上五人）、御供籠（下在地と上蔵のみ。当役が持ち、目無橋から迎え松明の役者と一緒に岩倉川沿いに御旅所へ直行し巡幸の到着を待つ）、その後を子供神輿（小杉の醤油屋さん前にて合流、太刀持ち（太



大松明に点火 (吉村旭輝 平成 22.10.23)



朝神事の神輿渡御 (福持昌之 平成 22.10.23)



大御幣 (八木透 平成 24.10.23)

刀持ちは神輿係の上蔵が担当。中でも一番和尚、大人神輿、神主、奉賛会会長、各町の本
部役員らが続く。午前六時三十分には御旅所に到着し、朝神事が執り行われ、七
時には終了する。

昼神事では、午後一時に御旅所(山住神社)に集合し、安置されている神輿を本
殿へ還御させる。まず、御幣迎えのために各町の一番和尚が下在地のトウヤ宅に
向けて出発する。やがて下在地の白装束着用のトウヤとともに、各町の一番和尚
が御旅所に到着すると、神輿の還幸が開始される。行列は朝神事と同じルートを通
って本社へ帰る。この時の鉾の巡行順も朝神事の場合と同様である。

行列は、神社の社旗(宮元町)を先頭に、金棒引き(二名 宮元町と次期宮元町)―御
幣(下在地町の郷頭、白丁衣装)―各町の一番和尚―各町の剣鉾(下在地、西河原、中在地、
忠在地、上蔵の順)―稚児―踊り子(途中から合流)―子供神輿―太刀持ち(上蔵町の二番
和尚)―大人神輿―神主―白丁(宮元町と次期宮元町)―奉賛会会長と続く。途中二か

所で休憩を取りながら、約二時間かけて本社へ到着する。ここで神事が行われ、
それですべての祭礼が終了する。

なお、石座神社には、大人神輿二基と子供神輿一基があり、大人神輿は「東神
輿」・「西神輿」と呼ばれている。後には俗称として、東神輿を「男神輿」、西神輿
を「女神輿」と呼ぶようになった。男神輿は中在地、上蔵、村松が、女神輿は西
河原、忠在地、下在地がそれぞれ昇っていたが、今日では「男神輿」は渡御して
いない。

由緒と歴史

一九五〇年代に地域に電線が張り巡らされる以前は、すべての鉾を差していた。
その時点で鉾差しは岩倉の地元の人ではなく、一乗寺と修学院から来ていたとい
う。ある時にすべての町で相談して申し合わせを行い、一斉に鉾を差すことを止
めたという。その理由は、鉾差しに来てくれる人がいなくなったからだと言えら

れている。鉾差しは基本的に一人で、後ろから吹散を持つ者がいたという。

② 鉾と組織

概要

先述のように、石座神社の氏子である忠在地・中在地・上蔵・西河原・下在地・村松の六町のうち、村松を除いた五町がそれぞれ二基ずつの鉾を有している。その一基が朝神事に、もう一基が昼神事に出されることになっている。一部の例外を除いては、鉾に固有の名はない。なおこの地区でも、組立てが終わった鉾は玄關に立てかけておくだけで、他地域のようなトウヤ飾りは何も行われない。

下在地の鉾

下在地では、火祭り当日の深夜零時ごろよりトウヤ宅で朝神事の鉾の組立てが始まる。組み立てるのは上五人で、紋付き袴姿で作業をする。トウヤは古くからの住人の中で、長い鉾を組み立てるスペースがある家が務めることになっている。

トウヤに集まった上五人は、紋付き羽織袴姿のトウヤに迎えられる。鉾を組み立てる前に清めの酒を酌み交わし、乾杯を行なう。この場には鉢巻をつけた甚平姿の来年のトウヤが加わって鉾作りが始まる。まず、木箱から新聞紙に包まれた鉾を取り出し、金属の部分を金属研磨剤で磨く。磨き終えたらその部分を素手で触らないように軍手をはめて持つ。そして巴紋入りの俵型の部分（受金）を木の柄に差し込み、その先に鉾を差す。この鉾を差す時にできる隙間に竹を数本かませて安定させる。安定した俵の左右に鷲を象った鍔を差す。このままでは鍔は安定しないため、朱紐で主要な箇所を通して安定させる。さらに棹の上部に朱紐で鉾を取り付ける。鉾には櫓が麻紐で取り付けられる。麻紐は上部と下部の二か所をとめる。さらに麻紐の上に上部は金の水引、下部は半紙で巻き、その上に紅白の

水引で止めて完成となる。

石座神社へ鉾を運ぶ際には、基本的には上五人が寝かせて支えながら運ぶ。鈴はよく鳴るようにしなければならないといわれている。なお、早朝の御旅所での朝神事が終われば、鉾はトウヤ宅へ再び運ばれてくる。

神事を終えた上五人がトウヤ宅に戻ってきたら、朝の鉾の解体が行なわれる。その手順は組立てと全く逆である。次に昼神事に出される鉾の鉾が木箱から取り出される。昼の鉾は朝の鉾よりも一回り大きい。また造りも違っており、表には「石座大明神」・「嘉永五年子九月」の銘が入った部分（鍔受）を最初につけ、そこに鉾をつける。この時鉾の表裏に竹を挟むように木槌で入れ込む。そして左右に鷲を象った鍔を差し込む。次に朱紐で固定し、鉾に櫓をつける。次に鈴をつけ、半紙を挟んだ紅白の水引で結びつける。

西河原の鉾

西河原では火祭り当日の午前一時ごろから鉾を組み立てることになっている。それに合わせてトウヤ宅へ朝神事に参加する人々が集まってくる。鉾の道具はその棹以外、石座神社の蔵に保管されており、事前にトウヤ宅に運んでくるといふ。鉾の組立てに参加しているのは、上五人・総代・郷頭・トウヤの計八名で、皆袴姿で作業をする。過去に撮影した写真を見ながら作業は行われていく。鉾が収納されていた箱には墨書銘があり、表には「西河原町」、裏には「弘化三年丙午九月新調」と記されている。また鍔が収納されていた箱にも同年号の墨書が見られる。なお昼神事の鉾を組み立てる時は、素襖姿で作業をするという。西河原の伝承によれば、五町の鉾の中で西河原の鉾が一番古いといわれている。

朝神事が終了すると、鉾は神輿昇きの人たちによってトウヤ宅へと運ばれて来る。西河原では、朝神事の鉾を当日はそのままにしておき、祭礼の翌日に昼神事の鉾とともに解体することになっている。

昼神事の鉾は、午後零時三十分ごろより組立てが開始される。組み立てる者は朝神事の場合と同じである。昼神事用の鉾は朝神事用の鉾より大きくて立派

だという。なお昼神事用の剣鉾には吹散をつける。組立てが終了すると御旅所（山住神社）へと向かう。剣鉾は上五人によって担がれている。なお祭り終了後は、剣鉾の道具一式は、石座神社の蔵に収納されるが、棹だけはトウヤ宅で保管され、いずれ次のトウヤへ引き渡されることになる。

中在地の剣鉾

中在地では、火祭りの前日の午後七時から九時頃にかけて、トウヤ宅にて剣鉾の組立てを行う。組み立てるのは本部役員、総代、郷頭、上五人、トウヤ、次期トウヤで、マニュアルの図を見ながら行われる。剣鉾を担ぐのは上五人で、今は鉾を横にして担いでいる。中在地でも、昼神事の鉾の方が朝神事の鉾よりも大きい。

朝神事の鉾は、翌朝六時頃から解体される。金属の部品を拭き、新聞紙で包んでいく。紐と棹はしばらく乾かしてから仕舞うことになる。金属部品を順々に箱に納めていく。剣も包まずに新聞紙でくるんでおく。このように平成二十三年までは、朝神事の鉾は朝に、昼神事の鉾は昼に組んでいたが、二十四年から祭りの前日の午後一時に両方を組むことになったという。朝神事の鉾を組む時は羽織袴姿で行っていた。また昼神事の鉾は素襖を着て組立てをした。素襖は袖が長くてやりづらいで作業の時間を変更したという。なお、剣鉾の棹はトウヤが預かることになっている。

忠在地の剣鉾

忠在地では、火祭りの前日の夕刻に郷頭・上五人と役を退いた者ら五人で鉾の組立てを行う。この時に朝神事用と昼神事用の両方を組み立てる。剣鉾の棹は翌



朝神事の剣鉾（左から、上蔵、忠在地、中在地、西河原、下在地の順）
（福持昌之、平成 22.10.23）



昼神事の剣鉾（左から、上蔵、忠在地、中在地、西河原、下在地の順）
（福持昌之、平成 22.10.23）

年の八月までトウヤが預かり、九月に次のトウヤへ渡される。昔は夕方に朝神事の鉾を組み立て、翌日の正午に昼神事の鉾を組み立てていたという。なお、鉾を組み立てる場には女性はいれないことになっている。

上蔵の剣鉾

剣鉾の名称は基本的に不明だが、ただ剣鉾を納めている箱書きには「御劔鉾」と「牡丹鉾」と明記されており、写真で確認すると「御劔鉾」が朝神事、「牡丹鉾」が昼神事に使用されているのではないかと思われる。昼神事の鉾の方が朝神事の鉾よりも重いいわれている。昼神事の鉾は昼神事が始まるまでトウヤ宅に置いておく。また吹散は、昼神事の鉾はオレンジ色で菊の御紋が刺繍されている。朝

神事の鉾の吹散は傷みが激しいために広げていない。祭りの行列の際には、広げず手で持つのみとされている。

上蔵では、火祭り前日の午後三時頃からトウヤ宅の庭で剣鉾を組み立てる。剣鉾は、朝神事用と昼神事用の両方をいっしょに組み立てる。作業は、総代・郷頭・本部役員・上五人・トウヤ（二名）ら約十二名が普段着で行う。手順は、剣鉾の金属部分を金属研磨剤で磨き、新聞紙に巻かれた鋸を取り出してゆく。二本の剣鉾の組立てを終えると、トウヤの軒先に二本並べて立てかける。なお剣鉾を解体するのは、祭りのすべての行事が終了した後、組み立てた時と同じメンバーがトウヤ宅へ集まり、二本いっしょに解体される。これまでは、剣鉾の棹はトウヤ宅に置いていたが、新しい家では置けないところも多く、最近になって郷頭の家で保管するようになった。棹以外は神社の蔵の中に保管している。昼神事が終われば、二名のトウヤが揃って神社へ返しに行くことになっている。

なお上蔵では、新しい住民を奉賛会の会員に加えるにあたり、二つの変革を行った。一つは、それまではトウヤの座敷で行っていた剣鉾の組立てをトウヤ宅の庭で行うようにしたこと。もう一つは、その時の衣装を袴姿から普段着にしたことである。これらの変革は、新しい人たちが気軽に祭りに参加してもらえようにとの意図からだといわれている。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

中村治編『洛北岩倉誌』（岩倉北小学校創立二十周年記念事業委員会、一九九五年）

中村治編『洛北岩倉』（明徳小学校創立百周年事業実行委員会、二〇〇七年）

映像資料

「京都の火祭―岩倉・嵯峨―」（三十分、京都市文化観光局、一九九〇年）

（八木透）



還幸祭の剣鉾巡行（上蔵）（福持昌之、平成 22.10.23）

幡枝八幡宮社 秋季大祭

毎年十月二十三日前後の土日

幡枝八幡宮社

京都市左京区岩倉幡枝町

① 祭礼と由緒

地域の概要

幡枝八幡宮社は寛平六（八九四）の創祀で、旧幡枝村の産土神である。祭神は応神天皇、神功皇后を祀る。社名は石清水八幡宮から枝分かれた分社の意とされる。境内摂社として高麗神を祀る貴船神社がある。境内には末社と、金山毘古命、火牟須毘古命、天麻禰命を祀る針神社がある。

氏子地域は、旧幡枝町に相当する、現在の岩倉幡枝町と岩倉北池田町・岩倉南池田町にまたがる地域である。平成二十三年（二〇一一）現在、氏子数は約四百五十から五百世帯とされている。近年、区画整理事業により新しい住民が流入しているが、古くからの氏子には大西、小村、松村、小谷の四つの名字の世帯が多く、屋号で区別する。

氏子組織の主たるものには幡枝八幡宮社奉賛会と伝統保存会がある。幡枝八幡宮社奉賛会は祭礼の中心的な担い手であり、剣鉾も奉賛会が所有・管理している。

昭和四十六年に「座中講」という氏子青年の組織が原型になり結成された。そのため、旧幡枝村民に由来する古くからの氏子がその中心となっている。伝統保存会は「虫送り」行事を保存するために、三十から四十年前に結成された組織である。巡幸においては、「伝統保存会」の法被を着た氏子が剣鉾を担う。

祭礼次第

幡枝八幡宮社の秋季大祭は、宵宮と神幸祭・還幸祭からなり、毎年十月二十三日前後の土日に開催される。神事の準備は宵宮の日中に幡枝八幡宮社奉賛会が中

心になって境内で行われる。この際、神輿、

剣鉾を含めたすべての

渡御の道具は拝殿に祀

られる。御霊遷しの神

事は、拝殿にて午後七

時三十分頃より開始さ

れる。巫女による神楽

奉納と、狂言大蔵流茂

山千五郎家社中の舞奉

納がある。

翌日の午前九時頃に

神輿、剣鉾および渡御

の道具は広場（馬場跡）

の鳥居前に移される。

午前十一時頃に鳥居前

にて神幸祭が行われ、

茂山千五郎家社中の舞

奉納を経て玉串奉奠がなされる。午前十一時三十分頃より渡御を開始し午後二時

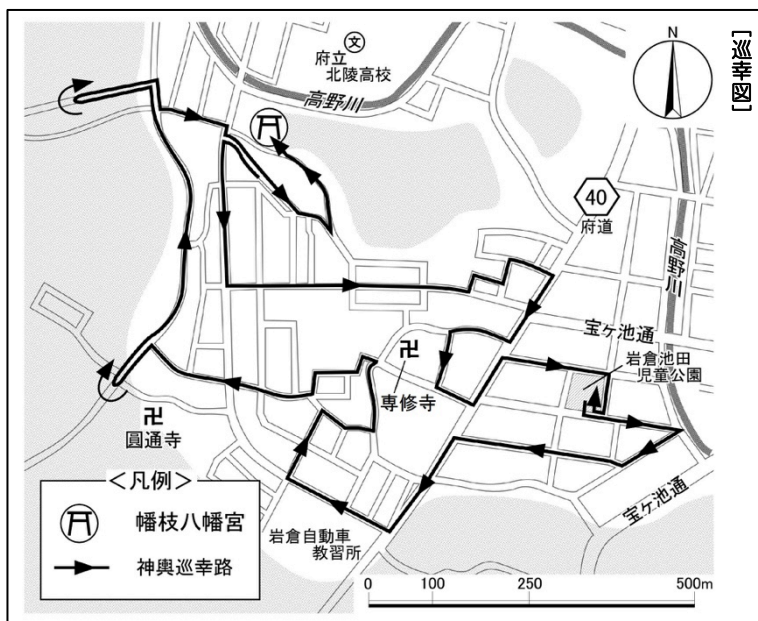
頃に還る。拝殿前で神輿の差し上げが行われたあと、午後二時三十分頃より拝殿

前で還幸祭が開始する。この際も茂山千五郎家社中の舞が奉納される。すべての

渡御の道具は、還幸祭が終わるとすぐに解体し、境内の蔵に片づける。

行列次第

行列次第は、神輿先導役―榊―幸鉾―御神宝―太鼓―剣鉾―禁裏御所より下賜された文書を納める菊の御紋入りの塗箱―宮司―神職―子供神輿―神輿―茂山千五郎家社中、の順となる。巡行ルートについては、幡枝八幡宮社の鳥居前を出発し、府道四〇号に出て南下、宝ヶ池通との交差点を越えて北池田町および南池田



町に入る。岩倉池田町児童公園を出てからは、再び府道四〇号に戻り幡枝町をめぐって幡枝八幡宮社に帰還する。道中、五か所で接待があり、その都度神輿を昇りて暴れる。

由緒と歴史

当社は古くから禁裏御所の信仰が篤い。慶長四年（一五九九）八月に刀工一條國広が奉納した太刀を御神宝としている。「幡枝八幡宮由緒」によれば、明暦元年（一六五五）八月朔日に後水尾天皇（当時は法皇）がこの太刀を高覧し、神事用具の破損修復費用および「御太刀金作御拵袋」をはじめとする寄附品のほか、神田を奉納している。この際に後水尾天皇より神馬が奉納されたことをきっかけに競馬（くらべうま）が催されるようになったという。

劍鉾に関しては、同「幡枝八幡宮由緒」によれば、宝暦七年（一七五七）八月に桃園天皇が「鉾吹散菊御紋附」を奉納している。さらに「寄附願」によると、明和五年（一七六八）に後桜町天皇からも「菊御紋吹散御鉾」が奉納されたことがわかる。旧幡枝村は公家との関係が深く、特に綾小路家は避暑地として別荘を構えていたともいう。当社には社務所が昭和四年（一九二九）頃まで存在せず、大西家（屋号・下屋敷）が宮守をつとめていた。旧幡枝村の住民はすべて氏子であり、夕方になると各家が交代で境内の御神灯の守をしていたという。祭礼は座中講が取り仕切っていた。これは、各家の跡取り（多くの場合、長男）の組織である。跡取りは十二歳から二十歳になると座中講に加入した。成員は村全体で二十四名と定められており、任期は十二年であった。現在の奉賛会長（平成二十三年現在、六十二才）が十二歳で加入した際は、二名が加入すると二名が抜ける仕組みをとっていた。

秋季大祭は、かつては毎年十月二十三日に行われていたが、現在は人手が集まらないため、二十三日前後の土日に開催されている。昭和四十年頃までは専修寺そばの神社の土地に御旅所があったが、現在はない。かつては御旅所の蔵の前で御神輿を昇き、そこから渡御がなされたという。また現在の石段下にある広場はかつての馬場であり、戦



鶴鉾（松田有紀子、平成 23,10,23）



亀鉾の鎧（松田有紀子、平成 23.10.22）

前はここに御神輿を祀り競馬を行っていた。平成二十一年（二〇〇九）より、新規に移ってきた住民を中心に「お祭り実行委員会」が結成され、屋台が設置されるようになった。

② 劍鉾と組織

概要

鶴鉾・亀鉾（幡枝八幡宮社奉賛会）

現在祭礼で用いられている鶴鉾・亀鉾の製作年代は戦前まで遡る。棹の長さは約四メートルで、旧鶴鉾・亀鉾の長さに倣ったとされる。

当社の劍鉾の由来は、前述の通り、桃園天皇および後桜町天皇による「菊御紋吹散御鉾」の奉納に遡る。「御神輿修覆積書」において、二種類の劍鉾が確認できる。同「御神輿修覆積書」によれば、弘化四年（一八四七）九月に、前者は金物の鍍金を再度施した上で棒・鈴を修復し、後者は「鶴亀」に新調した上で、金物の鍍金などの修復を施したことがわかる。旧鶴鉾・亀鉾は江戸末期の作と伝えられる。明治二年（一八六九）の「八幡宮菊御紋由緒」では、宝暦七年（一七五七）

に桃園天皇より寄付された「鉾吹散 式流」の存在が確認できるが、後桜町天皇より寄付された劍鉾についての記述はない。現在の旧鶴鉾・亀鉾の所在は不明だが、平成十年（一九九八）の御神宝の修理の際に廃棄されたとみられる。

現在、鶴鉾・亀鉾ともに所有者は幡枝八幡宮奉賛会である。これは前述したように座中講をもとにした組織である。氏子地域を六つに区切り、各区域から三名ずつ選出された役員からなる合計二十四人で構成されている。任期は三年で、毎年一名ずつが抜けるようになっていく。劍鉾は御旅所に備わる蔵に保管されており、特定の家や町が当屋を務めることはなかった。昭和四十年代からは境内の貴船社横に新調された蔵に保管されている。

鉾祭りの次第

神事の準備は、宵宮の日中に幡枝八幡宮奉賛会および氏子から輪番で選ばれた数人が拝殿で行う。劍鉾の組み立ては幡枝八幡宮奉賛会員の最年長者が一人で務める。還幸祭が終わり次第、劍鉾は解体されて蔵に収納される。現在当屋は存在せず、宵宮の御霊遷しに際して拝殿に御神輿や御神宝と祀る。賽銭箱を挟んで、鶴鉾が東、亀鉾が西である。翌日の神幸祭では、石段下にある広場の鳥居前に御神輿や渡御の道具とともに移される。

鉾差し

伝統保存会のメンバーが鉾を肩で担う。各鉾の前後に一名ずつつく。劍鉾を差していたのは昭和十年（一九三五）頃までであり、差し手は氏子の有志が務め、鶴鉾と亀鉾の鈴を交互に鳴らしていた。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

「奉賛会だより」（幡枝八幡宮社奉賛会会長 大西均氏発行）

中村治著・岩倉の歴史と文化を学ぶ会編『洛北岩倉』（明徳小学校創立百周年記念事業実行委員会、二〇〇七年）

劍鉾祭礼記録・古文書

「幡枝八幡宮由緒」（京都市歴史資料館架蔵写真版 幡枝八幡宮文書七、昭和四十五年）

「寄附願」（京都市歴史資料館架蔵写真版 幡枝八幡宮文書三十四、昭和四十五年）

「御神輿修葺積書」（京都市歴史資料館架蔵写真版 幡枝八幡宮文書三十三、昭和四十五年）

「八幡宮菊御紋由緒」（京都市歴史資料館架蔵写真版 幡枝八幡宮文書四十三、昭和四十五年）

（松田 有紀子）

八神社 秋季大祭

毎年十月二十四日に近い日曜日

(ただし、二十四日以前)

八神社

京都市左京区銀閣寺町

① 祭礼と由緒

地域の概要

八神社は、慈照寺（通称、銀閣寺）の門前北部に位置しており、東に如意ヶ嶽（大文字山）を主峰とする東山連峰、西に吉田神楽岡、南に鹿ヶ谷、北に北白川と接する範囲を氏子区域とする。現在の行政町名で示すと、銀閣寺町、浄土寺南田町、銀閣寺前町、浄土寺石橋町、浄土寺上南田町、浄土寺下南田町、浄土寺西田町、浄土寺馬場町、浄土寺東田町の十七町などである。

太政官達第九十七号による全国的な地誌編纂事業『皇国地誌』の一環として、京都府が明治十四年に作成した「愛宕郡村誌」によると、当時のこの地域は世帯数七十九戸、人口四百四十七人、菜種、南瓜、西瓜、藍、茶を主要物産とする都市近郊農村であったが『京都府地誌』京都府行政文書、昭和四年（一九六五）に実施された都市計画法（土系）による区画整理事業が引き金となって新入住民が増加し、昭和二十九年（一九五四）の京都市電白川線の路線拡張にともなって市街地化が進んだ。こうした状況によって、祭礼を構成する地元住民より、余所から移住してきた新住民の比率が大きくなっていった。また、昭和三十年代になると、それまで農業で生計を立てていた住民の中で観光客を対象とする商売に転業する者が増えた。とりわけ、慈照寺参道に顕著であった。現在では土産物屋、喫茶店、漬物屋などが軒を連ね、観光客で賑わう地域となっている。以上のような地域をとりまく社会環境の変化にともない、昭和三十年代以降、祭祀構成員は時代に応

じた組織の改正に努めながら、今日まで祭りを運営している。

神社が行う年中行事の中で剣鉾が用いられるのは、八神社秋季大祭においてである。当地域には三組の鉾があり、現在四十九戸からなる特定の家の者が講を組んで護持している。鉾は「一之鉾」、「二之鉾」、「三之鉾」と呼ばれており、鉾講中もそれに従い、各十五軒ほどで三分されている。

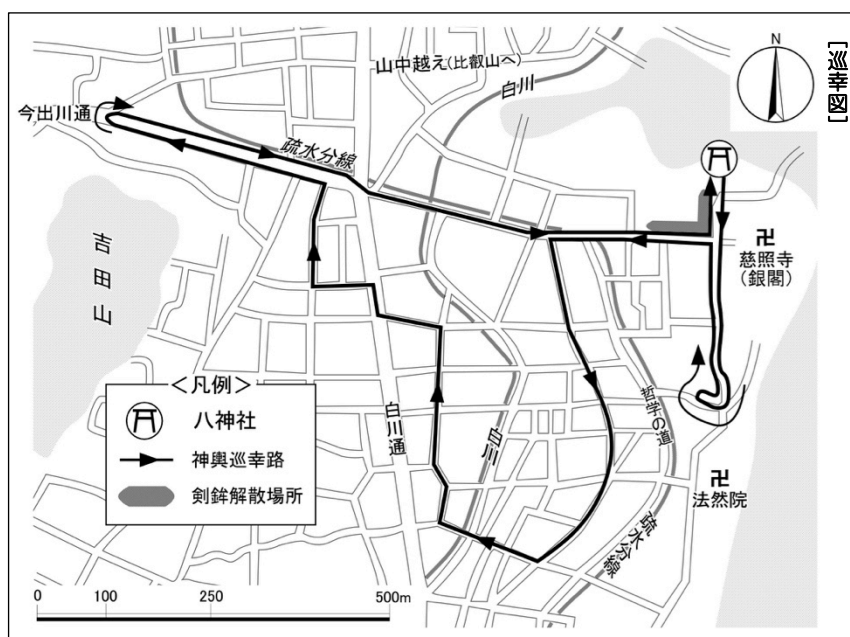
八神社の祭祀組織のうち、特に剣鉾に関わるのは鉾講である。鉾講の主な活動は、儀礼の執行と鉾や祭壇など祭具の管理である。講に属する家は、かつて八神社周辺の銀閣寺町内に集約されていたが、現在は分家や転居によって銀閣寺前町や浄土寺石橋町などにも十軒程度が分散している。

鉾講の家に生まれた男子（長男）は全員が帳簿に記載されている。かつての鉾講は、年長者から年齢順に十名のみが講員として選出されるものであった。この長老衆を「十人衆」と称していた。十人衆が座敷に座する場合などには、厳格な座順があったという。しかし、昭和二十年以降に格差の是正がはかられ、平等化のもと十人衆の制度はなくなった。しかし、鉾講に新規で加入するということは基本的にできない。

祭祀構成員の中でも重要な役目を担うのは当家である。当家はその年に鉾の責任を担う家あるいは人をいう（學術用語としては「当屋」あるいは「頭屋」が一般的であるが、この地域では文書・記録類や現行の資料などで「当家」の字を用いているケースが多いことから、ここでは「当家」の表記で統一する）。当家は家並の輪番で務めている。また、翌年の当家を務める者で本年の当家の補助を行う役目を受戸（うけど）という。受戸も祭りのなかでは重要な役割を担う存在である。

受戸は、大祭終了後に行われる当家の引き継ぎによって、翌年の祭礼の当家として正式に任命されることになる。この引き継ぎ式は、受戸渡し、あるいはトウワタシと呼ばれる。少なくとも近世期から「当渡し」と称されていたようであり、記録されている（中村（九）家文書 享和二年九月二十五日条）。

その他に、巡幸の総括、副総括、交通整理、浄菜消防分団（四名）、警察官数名、先導、社名旗（アルバイト一名）、太鼓（アルバイト二名）、天狗（アルバイト一名）、お稚児



曜日を式日としている。しかし、祭礼にかかる準備から片付けまでを入れると、金曜日から月曜日まで四日間が祭りの期間となる。そのため、勤めに出ている者にとっては参加が困難な場合もあるという。また、公道を巡幸するにあたっての交通局や警察への申請手続き、役員会議、広報活動などを含めると、祭りの準備は九月上旬ごろから本格化する。

祭礼の前々日には、午前七時に役員が神社へ集合し、神社の蔵から鉦や祭壇用具の搬出を行い、当家宅で祭壇を組み立てる。午前九時からは、神号軸渡し

(希望者と付き添い)、子供神輿(七十名)、女性神輿(担ぎ手七十名、男神輿(担ぎ手百四十名、お乗馬供奉等が祭礼に関わっている。

祭礼次第

秋季大祭は、主に神号軸渡しの儀、御出祭、神幸祭、還幸祭、神号軸受けの儀、直会から構成される。かつての祭日は旧暦九月二十四日であったが、新暦を採用してからは十月二十四日となった。近年ではサラリーマンとして働く者も参加しやすいようにという配慮から、二十四日以前の日

が執り行われる。これには各鉦講中の代表と当家が参列する。祭典の後に一之鉦から順に神職から当家へ神号軸(八社大明神/十禅寺大明神)号が墨書された一幅の掛軸が渡される。各鉦の当家はこれを自宅へ持ち帰って床の間へ飾る。その後、神職が各鉦の当家を訪れ、祭壇に向かって清祓いを行う。御出祭は午後七時から行われる。浄閑の中で本殿から本神輿(別称・男神輿)へ御霊が遷される。これに当家・受戸・代表が参列する。

祭礼の前日は、当家が御神酒と鏡餅を本神輿へ奉納する。

祭礼の当日は、各鉦講中ともに午前十時に当家のもとへ集合する。鉦をトラックの荷台へ飾りつけて巡幸に備える。神幸祭の祭典は、正午から神社で執り行われる。参列する鉦講中の座順は、最前列に一之鉦代表・当家・受戸、次列に二之鉦代表・当家・受戸、最後列に三之鉦代表・当家・受戸である。その隣に大祭総括者、神輿代表者、女性神輿代表者、楽人三名(笙・簞・龍笛)が座る。楽人は「いちひめ雅楽会」が数年前から務めている。この会は、昭和五十五年(一九八〇)に市比賣神社の宮司が立ち上げた雅楽団体で、現在は約二百名が所属している。

正午過ぎに各鉦講中は神社へ向かう。神社で神幸の祭典が行われ、神幸行列の巡幸がはじまる。

鉦鉦は巡幸が終わって参道まで帰ってくると、神社へは向かわず、行列から抜けて当家宅へ運ばれ、数名の鉦講中によってすみやかに解体される。

神輿が神社へ到着すると、還幸祭の祭典が執り行われる。鉦講中からは当家・受戸・代表の三名が参列する。ここで神号軸受けの儀、ならびに受戸祓いが行われる。これにて大祭は終了となる。この後、各鉦講中で当家の引き継ぎが行われる。講中によって、引き継ぎの儀礼を翌日に行うところもある。

翌日は代表と当家(昨夜まで受戸を務めていた者)が神社へ軸を返却に行く。また、各鉦の総会が行われる。この総会はかつて「鉦勘定の儀」と呼ばれ、当家宅の座敷で行われていた。現在は料亭などで行っている。

行列次第

神幸祭の行列次第については次の通りである。八神社を南下して浄土寺南田町

までは、先導―社名旗―太鼓―鉄棒―獅子―天狗―真榊―銚三基（一之銚―二之銚―三之銚）―男神輿。

浄土寺南田町で折り返し、慈照寺前の参道（銀閣寺・宇多野緑）から氏子圈をぐるりと回って再び参道へ戻るまでは、先導―社名旗―太鼓―鉄棒―雑色―獅子―天狗―真榊―子供銚（榊の車に載せる）―お稚児―銚三基（一之銚―二之銚―三之銚）―子供神輿―女性神輿―男神輿―本神輿―神職―お供物係。

以上のような行列次第は平成六年（一九九四）以降に定まった形式である。本神輿（男神輿）に加えて女性神輿を増やしたのも平成六年以降である。

由緒と歴史

八神社の由緒は詳らかでない。社伝によると、大同年間（八〇六―八一〇）以前とも延喜年間（九〇一―九二二）の創建とも伝えられるが、嘉永六年（一八五三）に起った浄土寺村一村全焼火災により、古文書・古記録が焼亡してしまったため、由緒は明らかではないという。また、平安時代に存在したとされる浄土寺の鎮守社として創建されたものが現在の八神社として伝えられている。本殿には天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、足皇産靈神、生皇産靈神、御饌津神、大宮乃壳神、事代主神の八柱を祀っているが、これは明治の神仏分離以後に特定されたものであり、祭神については諸説がある。

また、八神社は江戸時代中期ごろ、十禅師社あるいは山王十禅師宮と称され、別に八社明神社と稲荷社の祠が境内に祀られていたようである『山州名跡志』一七〇二年成立。文化九年（一八一二）に村の庄屋が京都奉行所へ提出した明細帳の写しには、十禅寺大明神、八社大明神（八所大明神とも）、稲荷大明神が祭神とある（「中村（九）家文書」）。『社寺明細帳』附録二には、明治二十一年（一八八八）に本殿を新築する際、八社大明神と十禅師大明神の二柱を一つの本殿に合祀したとある。

地域の古老の語りによると、八神社の御旅所は、かつて浄土寺真如町に鎮座する日吉神社であり、祭礼において剣銚や神輿は日吉神社まで巡幸することが慣例であったという。そのことは、黒川道祐が延宝九年（一六八一）に著した『東西歴覧記』にも記録されており、井上頼寿が昭和十五年（一九四〇）に刊行した『京

都古習志』でも報告されている。しかし、昭和二十九年（一九五四）に双方の氏子の若連中の間で意見の対立が生じ、日吉神社までの巡幸が廃止されることになったという。

現在の各銚講は大正七年（一九一八）に再編成されたものであるという。当時、一部の銚講の人口が減少したことから、籤を使つて銚講の人員を等分したという経緯がある。この地域の祭祀組織について調査した松村真衣子氏が作成した「家の分布図」によると、一之銚・二之銚・三之銚の講中の分布には規則性はなく、ランダムに散在していることがわかる。

一方、大正七年以前の銚講の実態については詳らかでない。ただし、天台宗青蓮院門跡の寺誌として知られる『華頂要略』（第六十二に所収されている「御門跡領諸庄雑記目録」浄土寺村条には、寛政三年（一七九二）八月十一日に浄土寺村の菊銚講中が提出した上書が収められており、わずかに銚講中の存在が確認される。その内容は、焼失した吹散を新調したので再び菊紋を頂戴したいと願ひ出たものである。『華頂要略』にこの地域の記事が散見されるのは、明治以前の氏子区域に青蓮院領が存在したことが関係している。

八神社に専属の神職が配置されたのは昭和三十三年（一九二八）である。それ以前は、祭礼となると一和尚（いちばんじょう）と呼ばれる祭祀構成員の最高責任者が差配して祭りを運営していたという。そのことは次の史料から確認できる。宝暦九年（一七五九）に浄土寺村の庄屋と年寄が御役所へ提出した「就御尋申上候寛」によると、「社人村方年かさの者を一和尚と申、三人御座候処、老人ツツ年番二社役相勤申候。常禰宜と申者無御座候」とあり（「中村（九）家文書」京都市歴史資料館蔵、明治元年（一八六八）十一月に作成された「社寺録 愛宕郡之部」）には「八神社 神主社人等無之 村方老年之者巡番 守護仕候」とある（京都府行政文書）。現在では一和尚という名称はあまり用いられておらず、代表と称されている。代表は神幸祭の当日が雨天だった場合などに銚を出すか否かといった判断を下すなど、祭礼に関する様々な決定権を有する存在である。かつては任期などなかったが、平成十六年（二〇〇四）の会合で、目安として七十五歳を上限とすること

が決定された。一和尚の次の年長者を二和尚とし、その次が三和尚であった。

一之鉾の代表を務める大前治通氏によると、受戸を務める家は、かつて床の間に竹棚を作って御幣付きの櫛と神号軸を一年間祀っておかなくてはならなかったという。しかし、「一年中神サンがおると、近所の葬式にも参列できんし、葬列が家の前を通る時も完全に戸を閉めきっておかなあかんかった」というような日常生活への影響もあって、近年では注連縄を玄関先に張る程度となっている。また、受戸は祭りにかかる代金をすべて負担しなければならなかったという。現在ではそのようなことは行われていない。

その他

現在、神輿、劍鉾、祭壇など祭具一式は、神社鳥居前の神輿蔵に格納している。劍鉾については七月二十日に虫干しを行っている。神号軸は神職が別に管理している。

かつては木製の舟の中に高盛の神饌を入れて、これを未婚の女性（老女であったという説もある）が頭に載せて神社へ運ぶ風習があったという。この時の神饌は赤飯をへうで練って混ぜたものを高さ二、三十センチメートル程の円錐形に形づくったものであったという。この神饌を当家宅から神社へ女性が運上する際には劍鉾が続いていたという。

昭和六十三年（一九八八）に開催された京都国体にこの地域から鉾差しが三名参加した。しかし、八神社の劍鉾は持ち出していない。別の地域の劍鉾をこの地域の者三名が差したという。

② 劍鉾と組織

一之鉾（一之鉾講）

概要

一之鉾を護持する一之鉾講は、十四戸（数年前までは十七戸であった）で構成されている（平成二十三年現在）。講中から毎年一軒が当家を務めるが、万が一、その家に不

幸事があつた場合は当家を交替することになっている。

劍鉾は新旧二基を鉾講中で護持している。旧鉾は神社の倉庫へ保管しており（新鉾も神社で管理している）、基本的に祭礼には出さない。新鉾をトラックの荷台に載せて巡幸に供している。新鉾の鋳は向かい合った鶴の意匠。飾受には「八社大明神」の銘がある。吹散には鶴紋を施している。劍の茎には「文化元歳／^甲九月吉祥日」の年紀銘が彫られている。

鉾祭りの次第

祭礼前日の午前九時三十分、当家の家長が神社の本神輿へ供物を奉納する。

祭礼の当日は、当家が本神輿へ奉納した供物を下げて受戸宅へ送る。鉾講中が当家へ集まり、組み立てた劍鉾を午前十時ごろにトラックへ積み込む。この時、講中から一名ないし数名が荷台へ乗り込む。この者は巡幸中に劍が電線や木の枝に引っかからないよう刺股状の棒で防ぐ役目を担う。

講中は正午過ぎに神社へ向かう。そのうち、代表・当家・受戸の三役は神幸祭の祭典に参列する。祭典終了後の午後一時過ぎに神幸祭の巡幸がはじまる。この時、劍鉾に吹散を取りつけるが、トラックの後ろに続く袴の役員が吹散の下端を持って従う。

行列は氏子圈をぐるりとまわり、午後四時ごろ帰還する。三役は還幸祭および受戸祓いの儀へ参列するために神社まで戻るが、他の講中は当家で鉾の解体を行う。還幸祭の終了後、神号軸受けの儀および受戸祓いが行われる。その後、受戸宅で当家の引き継ぎが行われる。

翌日の朝、昨日まで受戸を務めた者は、当家として自宅の床の間に神号軸を掛け、祭壇を築いて祀る。その日の午後四時三十分には神号軸を神社へ返納に行く。その後、新しく受戸に任命された者の手配で総会が催され、当家宅で祭りにかかった会計報告が行われる。また、鏡餅を小切りして講中で分けるなど、直会が行われる。

毎年、祇園祭が終わって梅雨が明ける頃に祭具の虫干しを行っている。この時、神社の蔵から神輿や各鉾を出して状態の確認をしている。



一之鉾（青江智洋、平成 23.10.23）



一之鉾当飾り（内田みや子、平成 23.10.21）

鉾差し

現在は鉾をトラックの荷台に載せて巡行しており、鉾差しは行っていない。しかし、一世代前までは鉾差しの経験者がいた。昭和四十、五十年代になると鉾差しを行わなくなり、鉾の棹（地域では長柄と称している）を約一・五メートル切断したという。各鉾ともだいたい同時期に棹を切断したというが、一之鉾と二之鉾は練習用のものを切ったのに対し、三之鉾だけは本鉾の棹を切断したという。

一乗寺八大神社の氏子であり、平成十一年（一九九九）ごろまで各地の祭礼で鉾差しを務めていた渡辺修三氏（一九二五年生まれ）によると、昭和二十、三十年代には浄土寺や若王子の地域に鉾差しが多かったという。また、渡辺氏自身、昭和三十年代には八神社秋季大祭に鉾差しとして招かれていたという。

トウヤ飾り

一之鉾講中では、当飾りのことをウチ飾りとオモテ飾りと称している。ウチ飾りは当家の室内のしつらえのことで、オモテ飾りは当家の庭先の飾りのことである。ウチ飾りの内容は、神号軸渡しの儀で受けてきた軸を床の間に掛けて、そ

の前に祭壇を築くとともに、鉾など飾るといふもの。祭壇には、鉾先スルメ、昆布、大根、柿、栗、五色豆、塩、洗い米、鏡餅、水引を供える。当家の供物の内容は近年簡素化される傾向にあるが、おおよそは旧来のものを踏襲しているという。天保十一年（一八四〇）九月の記録「御膳献立仕法覚」や大正元年に書写された「御膳式献立覚」と比較すると、供物の内容には違いが確認できる（『八神社一之鉾講中所蔵文書』京都市歴史資料館架蔵マイクロ版）。

かつてのウチ飾りには、竹棚と呼ぶものを床の間に築き、その上に御幣を付けた櫛を立てていたという。そのことは延宝九年（一六八一）に黒川道祐が著した『東西歴覧記』に記録されており、井上頼寿が報告した『京都古習志』にも記載がある。竹棚は一和尚・二和尚・三和尚の三人が毎年新たに竹でつくる決まりであったが、御幣付きの櫛は依代と考えられ、当家で一年中祀られていたという。

オモテ飾りは、巡幸に供する鉾と提灯を庭先へ立てるといふものである。また、長い竹の先に櫛をくくりつけたものも庭先へ一本立てる。これは斎竹と考えられる。

特徴

二之鉾（二之鉾講）

二之鉾を護持する二之鉾講は十五戸で構成されている（平成二十三年現在）。鉾は新旧二基を鉾講中で護持している。旧鉾をオイデボコ（御出鉾）、新鉾をマイリボコと称している。鉾は桐の意匠に十六弁菊紋を左右に配している。

旧鉾の銘箱には「宝永二乙酉年九月吉日／二之鉾／おいで御鉾」の墨書銘があり、新鉾の箱裏には明治二十九年（一八九六）十月に新調したという墨書がある。鉾の箱には「文化三丙寅九月／洛東浄土寺村二鉾氏子中」という墨書銘がある。

鉾受には表に「十禅師大明神」の銘があり、裏に地蔵菩薩の小像が取り付けられている。地蔵菩薩は、十禅寺大明神の本地仏とされる。



二之鉾（内田みや子、平成 23.10.21）



二之鉾当家飾り（内田みや子、平成 23.10.21）



金糸で縫った吹散（青江智洋、平成 22.10.24）

棹は二点あり、現在の巡行で使用している方は練習用の棹であり、昭和四十年代に短く切断したものである。もう一本は本鉾（旧鉾）用の棹であり、螺鈿細工で加工された見事なものである。

吹散（地域では見送りと称している）は、現在巡幸に使っているものも含めて三幅を有する。最も古いものは箱に墨書で寛政八年（一七九六）の年紀がある。しかし、これは破損が激しいため、模様（菊紋）の部分のみを残して額装にしている。新しいものは明治二十二年（一八八九）に新調したものである。「十禅師大明神」の神号が縫い付けられている。

鉾祭りの次第

山本正太郎氏（一九二四年生まれ）によると、三十年ほど前まで祭礼には本家の者しか参加できなかったという。本家の一軒から一名を出すというものが慣わしで、その家の長男が参加するとそれまで出ていた親は隠居となるのが慣例であったという。また、本家の長男が亡くなった場合に限って、次男や分家の者が代わって

参加するというものであったという。

鉾差し

町内住の松田元氏が描いた掛軸の絵には、講中の長谷川雅巳氏の父庄左衛門氏（一九〇八年生まれ）が役員として描かれている。描かれている人物の年代などから察すると、本図は昭和の中ごろに描かれたものである。これによって、以前は地元で大勢の鉾差しがいたことがうかがえる。

トウヤ飾り

二之鉾講中では当家飾りという言い方はしない、「ウチ飾り」と称している。祭日まで当家の玄関先に飾る風習は、平成十六年（二〇〇四）からはじめてのものであるという。奥座敷に設けた祭壇脇には新鉾を飾る。神幸祭には新鉾を巡幸に出している。

神号軸渡しの儀で受けてきた掛軸を床の間に掛けて、その前に祭壇を築く。祭

壇には、スルメ、松茸、葉付き大根、人参、野老（鬼野老）、セキシヨウ、梅干、塩、御神酒を供物とする。当家の供物の内容は近年では簡素化される傾向にあるが、おおよそは旧来のものを現在に踏襲しているという。文化八年（一八一二）の記録「二之鉾御膳帳」と比較すると、供物の内容に若干の違いが確認できる『八神社二之鉾講中所蔵文書』京都市歴史資料館架蔵マイクロ版。

大祭終了後、当家の引き継ぎに際して、当家から受戸宅へ掛軸や祭具を送り出してウチ飾りは終了となる。受戸宅へ引き継ぐ祭具は、櫛、吹散、御供（神号軸に供えていたもの）、御膳、掛軸、幔幕（戸帳）などである。

その他

神社の神輿蔵で剣鉾の鍔や剣や棹、トラック用の幕、「大明神」と書かれた木製の額、提灯を保管している。

十年ほど前まで、剣鉾の飾り付けなどに女性が参加することはできなかった。当時は、ウチ飾りをしている部屋へ入ることすら女性は禁止されていた。しかし、男女平等を基本とする現代社会にあつてそのような風習は適当でないという住民の意見があり、廃止することになった。ただし、喪中の家などは祭りに参加せず、片付けなどの裏方に回ることになっており、厳粛な風習の一部は現在でも守られている。

三之鉾（二之鉾講）

特徴

三之鉾を護持する三之鉾講は十七戸で構成されている（平成二十三年現在）。

現在、剣鉾は新旧二基を鉾講中で護持している。ともに鍔には菊に鳳凰の意匠が施されている。

吹散には見事な菊紋が金糸で施されており、青蓮院から送られたものと伝えられている。そのことは、吹散を収める大小二点の箱書きに示されている。大の箱表には「菊御紋」青蓮院宮御寄附三之神鉾吹散」と墨書があり、裏に「寛政九丁巳戴九月良辰 洛東浄土寺村三之鉾組講中」とある。小の箱表には「菊御紋」青

蓮院宮様御寄附吹散 一幅 三之鉾講中」とあり、裏に「維時寛政三年辛亥秋九月 奉寄進吹散箱 阿尾弁治」とある。寛政三年（二七九一）と九年（一七九七）に青蓮院から三之鉾講中へ吹散が寄進された経緯は詳らかでないが、この地域の一部が青蓮院領であつたことと関係があると思われる『華頂要略』『旧高田領取調帳』。また、寛政三年に記された「三之鉾吹散入用覚」に青蓮院から吹散を寄附されたので礼金を納めたという記事がある『八神社三之鉾講中共有文書』京都市歴史資料館架蔵マイクロ版。そのほか、現存する吹散を納める木箱には「慶應式年／三之鉾神鉾御吹散箱／寅九月吉日／三之鉾講中」という墨書銘をもつものが保管されている。鍔受の共箱には「昭和五十四年己未年十月吉日／奉額収納箱／三之鉾講中」とある。

三之鉾講中共有文書の「三之鉾講中金銭出入帳」（明治三十六年十月から明治四十年十月まで）では、剣のことを「招き」と記しており、「サシ革」、「リン」、「鉾差し」などの表記も見える。また、鉾田の収益は鉾など祭具の修復に充てていたことがわかる『八神社三之鉾講中共有文書』京都市歴史資料館架蔵マイクロ版。また、明治四十一年（一九〇八）十月十九日に水原庄太郎が記した「三之鉾／飾り設計書乃請取書」には、「鉾飾り菊之立木、銅地、打取彫生地之俣、宍組／一、金拾貳円 同額之両面二付昇り龍。打取彫 四個／一、金七拾五円 鉾飾り菊之立木両面二及長柄巻菊之立木模様金柳昇り龍 四個／菊御紋 貳個／右は五度焼付鍍金／りん当ヨリ上金柳及調度（後略）」とある。これは神社蔵に保管しているという旧鉾であると思われる『八神社三之鉾講中共有文書』京都市歴史資料館マイクロ版所蔵。

祭りで役員が着用する袴は各家で保管している。

鉾祭りの次第

おおよそは一之鉾・二之鉾と同様の次第である。

鉾差し

現在は剣鉾をトラックの荷台に載せて巡行しており、鉾差しは行っていない。しかし、当家で引き継いでいる講中の覚書「三之鉾講中収支通計控」を見ると、昭和四十八年（一九七三）には巡行に鉾を差していたことが記録されている。こ



三之鉾（青江智洋 平成 23.10.23）（上下とも）



三之鉾の当家（内田みや子 平成 23.10.21）

の時、「鉾差し料」として三名に一万五千元（二括）を支払っている。昭和四十九年（一九七四）から五十一年（一九七六）までは鉾差し料を三名の「アルバイト」に支払ったことが記録されている。このアルバイトが地元の者なのか別の地域から雇った者を指すのかについては明らかでないが、先述したように渡辺修三氏など外部の鉾差しを招いて鉾差しを行っていたことの裏付けともなる記録である。神幸祭の巡幸に剣鉾を差して歩くことがなくなったため、講中の決議によって鉾の棹を一・五メートル程度切断し、トラックで巡行する形態にしたという。

トウヤ飾り

神号軸渡しの儀で受けてきた掛軸を床の間に掛けて、その前に祭壇を築く。祭壇には、柿、栗、五色豆、昆布、カマスの開き、剣先スルメ、椎茸、葉付き大根、葉付き金時人参、梅干、粗塩、ところの根蓴、石松（目陰蔓）の根、大杉、榊を供物とする。当家の供物の内容は若干簡素化される傾向にあるが、おおよそは旧来のものを踏襲しているという。明治三十五年十月に書写された「祭神之御膳式膳献立」と比較すると、供物の内容には若干の違いが確認できる『八神社三之

鉾講中所蔵文書』京都市歴史資料館架蔵マイクロ版。

昭和十年代には、祭りの日となると、どこの家でも親戚を呼んで宴会などを催していたという。また、餅を搗いたり、鯖寿司やちらし寿司や赤飯などを作ったりして近所へ配るなどしていたが、現在はあまり派手なこととはなくなった。大祭終了後、当家の引き継ぎにともない、当家から受戸宅へ掛軸や祭具を送り出してお飾りは終了となる。

③ その他の鉾

明治時代まで、この地域には他にも鉾が二基あったというが、現在その所在は不明である。鳳凰・龍などの意匠が施されていたというが、それを示す記録は地域に残っておらず、あくまで口伝によってのみ語り継がれている。しかし、黒川道祐が『東西歴覧記』延宝九年（一六八一）九月二十四日条に山王十禅師宮（八神社）の祭礼として、五本の剣鉾に神輿一基が従ったと記しているの、かつては五本の鉾があった可能性も高いと考えられる。

④ 資料と記録

八神社の祭礼に関する史料としては、管見の限り次のようなものがある。

各鉾講中共有文書、銀閣寺町保存会共有文書、かつて庄屋を務めていた中村九右衛門家所蔵文書の一部がマイクロフィルムとして京都市歴史資料館に架蔵されている。鉾講中共有文書には「当番覚帳」、「御吹散一式入用の覚書」、「当番次第」、「有志帳」など、それぞれ二十種程度のもものが伝わる。古いものでは元禄十五年（一七〇二）の記録があり、近世から近代にかけての講中の動態を知ることができる。また、各鉾講中では現在も毎年祭礼の記録を続けている。

八神社の祭礼を知る上で参考となる先行研究としては、松村真衣子「京都府旧浄土寺村の祭祀空間について」（京都大学大学院人間・環境学研究科平成十七年度修士論文）がある。旧浄土寺村の祭祀に関わる空間構造の変遷を考察した論文であるが、八神社の秋季祭礼について実地調査を行い、きわめて詳細な報告を行っている。

調査報告・論文・地域誌

井上頼寿『京都古習志』館友神職会、一九四〇年

小林月史『京都の神仏』白川書院、一九七〇年

江口信清「混住クライマックス地域における土着層の実態―旧京都府愛宕郡浄土寺村字銀閣寺の事例―」（『季刊人類学』第十一巻二号 京都大学人類学研究会 一九八〇年）

『史料 京都の歴史』第八巻・左京区、一九八五年

松村真衣子「京都府旧浄土寺村の祭祀空間について」（京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程共生文明学専攻 平成十七年度修士論文、京都大学人間・環境学研究科総合人間学部図書館所蔵）

伊従勉研究室「市街化と氏子組織および神輿巡幸経路の変容―京都盆地の村落祭祀の近代―」（『民族藝術』二十四、二〇〇八年）

京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科 末松剛ゼミ編『京都市左京区浄土寺三之鉾講中共有文書調査報告書』京都造形芸術大学芸術学部歴史遺産学科 末

松ゼミ、二〇一一年

鉾祭礼記録・古文書

梵舜『舜旧記』第八、一六三二年

黒川道祐『東西歴覧記』一六八一年

水雲堂孤松子『京羽二重織留』卷之一、一六八九年

艸田子『年中重宝記』一六九四年

浄慧『山城名跡巡行志』第二、一七五四年序

高萩安兵衛『諸国年中行事綱目』一七五五年

「中村（九）家文書」一七五九・一八〇二年

「御門跡領諸庄雑記目録」浄土寺村『華頂要略』第六十二

（青江 智洋）

新宮神社 例大祭

毎年十月第四日曜日

新宮神社

京都市左京区松ヶ崎林山

① 祭礼と由緒

地域の概要

新宮神社の氏子地域は、松ヶ崎街道を中心とする旧松ヶ崎村の六集落からなっている。その六集落は、この地域の約百戸の旧家によって構成される、東町・西町（西町・中町・辻の町・川町・堀町 からなる。東町は、一番町・二番町・三番町に分かれ、各町から役員が選ばれている。西町では、上記の各町で宿老（長老）が選ばれている。氏子は、奉賛会を組織しているが、「若中」など若者の組織は今も昔もなかったようである。なお、当地域は昭和四十年代以降の宅地開発によって、氏子の対象地域は大幅に拡張されている。

徳治二年（一三〇七）、松ヶ崎の旧集落が、一村をあげて法華宗に改宗した経緯があり、これを由緒とした「松ヶ崎立正会」が組織されている。「松ヶ崎立正会」は、現在に至るまで当地域に大きな影響力を持っている。寺社の維持や修復、祭礼の開催や準備なども本会に依つてきたところが大きいようである。

新宮神社は、松ヶ崎村の産土神で、白鬚大神（猿田彦神）を祀る旧村社である。創建の時期は詳らかではない。もとは比叡大明神と称する独立社であったが、一村あげて日蓮宗に改宗の後は、法華経および日像直筆の曼荼羅を神体として合祀している。以来、妙泉寺の鎮守社として妙泉寺僧の祭祀するところとなった。明治維新の神仏分離によって妙泉寺から離れ、白鬚神社と称するようになり、明治二年（一八六九）新宮神社と改称している『日本歴史地名大系』。東町の人々が奉祭する白雲稻荷神社は「松ヶ崎のもう一つのお宮さん」「東のお宮」と呼ばれ、例大

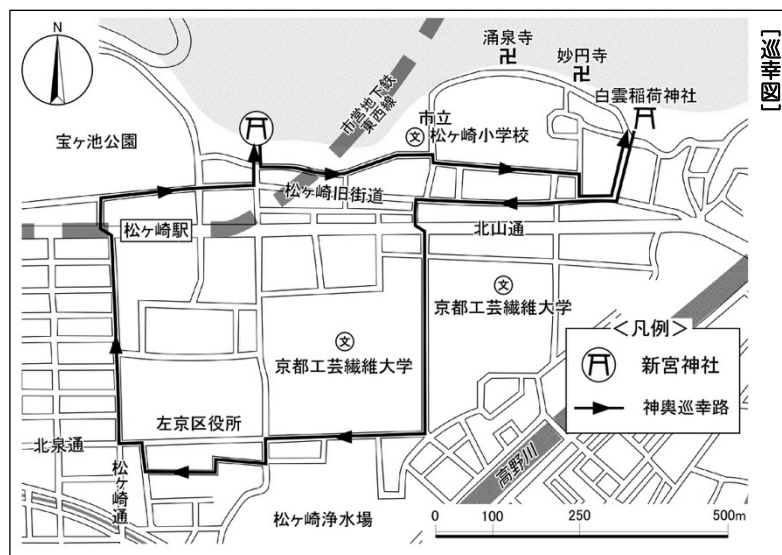
祭の一端を担う。

祭礼次第

例祭の準備は、東のお宮である白雲稻荷社の準備を東町が担当し、西町は、新宮神社の準備を担当している。東西の都合によってお宮の準備の日程が異なっているが、一か月ほど前に東町の一軒と西町の三軒の農家がその年に収穫した餅米の稲わらを用いてしめ縄を編むことから準備が始まるという。

祭礼当日は、午前八時に奉賛会役員が参集し、本殿石段下の東側に菊鉾を、西側に妙法鉾を立てるといった最終的な準備を行う（平成二十二年）。翌二十三年度は拝殿の柱に据えた。午前十時に、新宮神社境内にて神事が行われる。神事終了後、松ヶ崎小学校の女子児童の志願者によって巫女神楽が奉納される。神事に参加していた各種団体の代表は撤饌後、解散する。

昼休憩の後、正午をめぐりに行列が発する。行列は松ヶ崎街道を東へ進み、白雲稻荷社へ向かう。白雲稻荷社では、神殿前にて神事と巫女神楽奉納が行われ、これには東町の三名の役員のみが参加する。西町の役員や行列に参加している人たちは休憩となる。神事終了後は、神社を出て、上賀茂・山端線を西に進み、松ヶ崎東通を南下した後北泉通を西に進む。そして、松ヶ崎通を北上し、再び松ヶ崎街道に入つて東へ進み神社に着する。その後、神社では還幸祭が行われ解





(左) 妙法鉾 (右) 菊鉾 (長谷川 奨悟, 平成 23.10.30)

散する。片付けは祭礼終了後に行われ、しめ縄は翌年の祭礼準備の時に取り換えられる。

行列次第

平成二十三年(二〇二二)の調査では、社旗「神宮神社」・真榊(天太鼓・剣鉾二基・子供御輿・唐櫃・宮司・お稚児(お稚児を乗せた山車)・八乙女・役員の順番で行列が編成されていた。

由緒と歴史

近代以前の例大祭については詳らかではない。新宮神社の例大祭は毎年十月二十三日に行われていた愛宕祭りの一つとして、同日に行われていたようである。日時は、十月二十三日に固定されていたが、近年では二十三日に近い日曜日に変更されている。平成二十三年度の例大祭については、時代祭(十月二十日)と日時が近接するため、第四日曜日とされた。

神事は、先々代の宮司の時には、親戚関係にあった大山崎の小倉社神に助勤を

依頼していたが、都合がなくなつたため、七、八年前から懇意にしていた上京区の白峰神社の禰宜に助勤を依頼するようになったようである。そのような関係から、平成二十三年度も白峰神社の禰宜が神事に参加していた。

戦前から戦後すぐの例大祭は、神輿渡御や行列等はなく、松ヶ崎の長老衆が神殿前において太鼓や笛を奏でる静かなものであったが、高齢化などによって祭礼の様子が徐々に変更されたようである。昭和四十年代に他の神社の祭礼の様子を参考とし、賑やかな行列巡行にするために剣鉾の必要性が話題となり、当時氏子総代・奉賛会会長であった山田拾治郎氏が神輿一基・剣鉾二基を手作りし、神社に奉納している。これ以前は、酒樽や提灯が担がれていた時期もあった。

近年では、旧集落以外の有志によつて「おやじの会」が組織され、祭礼当日に屋台が出されるなど、祭りの形態が変化してきている。旧集落を中心とした現在の祭りの規模や、新しい住人との関わり方が見直されてきており、今後の課題の一つとして挙げられている。

② 剣鉾と組織

特徴

新宮神社には現在「妙法鉾」「菊鉾」の二基の剣鉾がある。剣鉾が二基なのは、東西の町で一基ずつを受け持つようにするためである。どちらの町がどちらの剣鉾といった、決まった分担はない。新たに造られたものであるため、当屋などの組織はなく、新宮神社の蔵で保管されている。

剣鉾の由緒の概略は先に述べた通りである。元来の目的が行列を賑やかにすることにあるため、マネキ(剣)以外の材質の中心は、概ね木材と布である。棹は畑に差されていたようによい木材を選び、黒く塗装した。鉾頭は木の上に布を張り、外枠はペンキで塗装したものである。鉾の吹散には、着物の帯が用いられており、型に切りとられたフェルト生地を貼り合わせて作られている。これは、あくまでも「鉾」の形状をしたものを行列に加え、行列を賑やかにすることが目的

であったため、鉾を差し、剣を振るといった鉾本来の意味は意識されていない。

妙法鉾（新宮神社）

概要

妙法鉾の由来については、先述した「松ヶ崎立正会」が五山の送り火の妙法を担当するなど、松ヶ崎地域の結集の象徴として、「妙法」の意匠としたようである。

菊鉾（新宮神社）

概要

菊鉾の由来について、氏子の間では、当社の宮司である唐橋家は元華族の家柄であり、御所との関係性が強かったことを氏子は誇りとしており、それらの象徴として菊の意匠にしたのではないかといわれている。これに関する記録は残っておらず、詳細は不明である。

（長谷川 奨悟）

天道神社 例大祭

毎年十一月三日

天道神社

京都市下京区仏光寺通猪熊西入西田町

① 祭礼と由緒

地域の概要

天道神社は、下京区北部の市街地に位置し、その氏子区域は旧郁文学区二十九町、おおむね四条通、堀川通、松原通、壬生川通に囲まれた地域である。

しかし、天道神社の「宮元四町」といわれるのは、膝下の西田町、松本町、瀬戸屋町、晒屋町であり、この四町が祭礼においても中心的な役割を果たすようである。西田町は猿田彦面と獅子頭を守護し、四町の中でも筆頭的な位置を占める。

残り三町は、後述するようにそれぞれ自町保有の剣鉾を守護する。おそらく当初は「宮元四町」だけで神社を守護していたのが、後に郁文学区全域で氏神として仰ぐようになったものと推定される。郁文学区の成立は明治であるため、学区全域の氏神となった時期は、明治の中頃から昭和初期の間であることは間違いないであろう。

天道神社の維持・運営は、基本的に氏子総代十三名が担う。一方で、学区内二十九町から一名ずつ神社委員が選出されて構成される郁文自治連合会神社委員会という組織もあり、こちらは天道神社の例大祭に加え、学区と関連する祇園祭や時代祭のことも協議する。また、平成二十年（二〇〇八）には神輿会も結成されている。

なお、鉾ではないが、「宮元四町」の中で西田町の守護する猿田彦面および獅子頭について若干触れておきたい。

猿田彦面は町お飾りのご神体であり、神輿巡幸に際しては櫓につけられて巡幸

列全体を先導する役割を担う。獅子頭も人が入って猿田彦櫓とともに供奉する。両方とも、普段は箱に入れられて神社の倉に預けてあるが、町の所有物である。なお、お飾りの当番の家は毎年変わる。

猿田彦面が入っている箱の墨書には次のようにある。蓋表「猿田彦面」、蓋裏「明治四拾貳年 十一月三日 西田町（印）」。また、同じく獅子頭の箱には次のようにある。蓋表「獅子頭壹具」、本体底「昭和十二年十一月 京都市烏丸通三條北 荒木装束店修理」、本体側面「願主 丹波屋吉兵衛」、別の本体側面「文政四歳 辛巳三月吉日」。

祭礼次第

例年十一月二日の朝から「宮元四町」の当番の家でお飾りの準備を始め、午後になって宮司が各町を巡って祝詞を奏上する。各町の御神体は、西田町が猿田彦面そのもの、他の三町は神号が書かれた掛軸である。その日の夜は宵宮祭神事後、祇園祭船鉾の祇園囃子奉納が行われるが、この奉納行事は近年始まったものである。

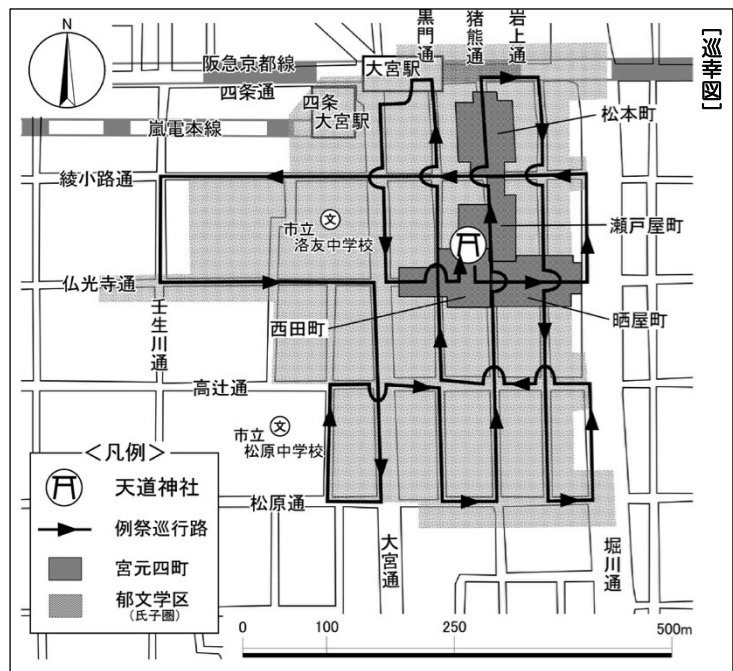
翌三日の昼頃に例祭の神事、午後に渡御祭が行われる。渡御祭の巡幸列は猿田彦櫓と獅子（題、台車に乗せられた剣鉾三基、昇かれた神輿一基などである。巡幸列は、天道神社から出発して郁文学区内をほぼくまなく回り、夕方に神社に戻ってくる。引き続き還御祭の神事をもって祭礼は終了する。

なお、江戸時代の地誌・名所案内記によれば、当時の祭礼は九月二十一日に行われていた。

行列次第（主要なもののみ）

先導―西田町猿田彦櫓・獅子―瀬戸屋町龍鉾―晒屋町菊桐鉾―松本町菊鉾―稚児―少年鎧武者―御神宝捧持列―子供みこし―御神輿―宮司―総代・崇敬者

右は平成二十三年（二〇一一）の場合である。剣鉾（全て曳鉾）の順番は毎年変わり、当年先頭であった鉾が翌年に最後尾となる。なお、剣鉾そのものは各町の所有であるが、巡幸時に鉾を乗せる台車三台は神社の倉に保管されており、共通



して「明治四拾二年」の墨書があり、おそらく明治四十二年（一九〇九）にまとめて新調されたと推定される。

由緒と歴史

社伝によれば、延暦十三年（七九四）に乙訓郡長岡より三条坊門東洞院に遷座し、その後数回の火災を経て天正二年（一五七四）に当地に移ったという。

現在の祭神は天照皇大神、春日大神、八幡大神の三神であるが、江戸時代の『山州名跡志』正徳元年（一七一）などには「所祭 日月二神」と記されている。『華頂要略』「明主伝」文政七年（一八二四）九月八日条には、「所祭、伊勢・石清水・春日三神」とあるので、この間に祭神が変更されたと思われるが、詳しい事情はわからない。

② 剣鉾と組織

菊鉾・松鉾（松本町）

概要

松本町の剣鉾は菊鉾と松鉾の二基あり、ともに町の所有である。

菊鉾は、二日午前中に組み立てられ、当番の家に飾られる。翌三日には台車に載せられ、曳鉾として巡幸に加わる。菊鉾の剣表には「明治廿六年 癸巳九月新調 松本町」の銘があり、明治二十六年（一八九三）に新調されている。鋳受（額）は表裏とも鏡である。鋳は菊のデザインであり、箱の蓋裏には「明治廿六年十一月 松本町」の墨書がある。また、先述した『華頂要略』によれば、菊鉾は天明八年（一七八八）に焼失し、文政七年（一八二四）に再び新調されたとしている。

もう一基の松鉾は、二日・三日とも棹につけて当番の家の前に立てられたままであり、留守鉾といえる。剣は菊鉾より短く、鋳受（額）の銘には表のみ「天道宮」とある。受け金のデザインは菊である。

棹および吹散は二本ずつあり、それぞれ菊鉾と松鉾に対応する。菊鉾につける吹散のデザインは、青地に菊の御紋を白抜きしたものである。『華頂要略』によると、文政七年（一八二四）、菊鉾新調にあわせて青蓮院宮より御紋付の「散絹一掛」が寄附されているが、これが現在の吹散かどうかは判然としない。

トウヤ飾り

「宮元四町」では、各町内で独自にお飾りを行い、宮司に祝詞をあげてもらう。松本町では、毎年K氏宅の一部屋を借りてお飾りをしており、持ち回りではない。二日朝から準備をし、三日の巡幸が終った後に片付け、その夜に町内の住民が集まって「アシアライ」（直会）をする。なお、当町も含めて「宮元四町」の中で「お飾りの当番」といった言い方はよくされるが、「トウヤ飾り」という表現は聞かれなかった。

お飾りは神号が書かれた掛軸を中心とし、それに鯛、大根、人参、白菜などを供える。二日の日だけは菊鉾も土間に飾られる。



松本町 菊鉾 (本多健一, 平成 22.11.2)



瀬戸屋町 龍鉾 (本多健一, 平成 23.11.3)

なお、鉾鉾も含めて、お飾りの道具一式は、K氏宅向かいのH氏宅に保管されている。古文書史料などは特にない。

龍鉾・牡丹鉾 (瀬戸屋町)

概要

鉾鉾は、曳鉾である龍鉾 (鉾が長い) と、留守鉾の牡丹鉾 (鉾が短い) とがある。ともに町の所有であり、二日の午前中に組み立てられ、前者は二日のみ、後者は二日・三日とも当番の家に飾られる。

龍鉾の鉾には次のような銘がある。表「貳之鉾」、裏「龍鉾 瀬戸屋町 銚 柳原栄三」。銚受 (額) の表銘は「天道宮」、裏銘「寛永六年 天道宮 九月吉日」とある。銚のデザインは日月龍、受金は菊である。寛永六年 (一六二九) とかなり古い年号であるが、全体的にそれほど古さは感じられない。

牡丹鉾の鉾に銘はなく、根元に鉄で補強がある。銚受 (額) 表の銘は「天道宮」、裏には御幣の意匠、銚のデザインは牡丹と鉾であった。

棹は二本あり、一本が巡行用で、もう一本は鉾頭をつけずに、吹散をつけて当番の家の前に立てて飾る。

吹散は三本あり、二本が巡行用、もう一本が居祭り用である。前者のうち赤地に菊の御紋がついた古い物は、文政三年 (一八二〇) 六月に御室御所仁和寺宮から寄附されており、その旨を記した古文書も同時に飾られている。古い物は傷みがひどいので、最近新しいレプリカを新調し、そちらを巡行に用いる。

トウヤ飾り

瀬戸屋町のお飾りは、毎年町内の各家持ち回りで行われるが、スペースの関係などからできる家は限られている。準備や片付けのスケジュールは、他の町とほぼ同じである。

お飾りは神号が書かれた掛軸を中心とし、それに黒豆をのせたご飯、麩、大根、昆布、するめ、紅白餅、鯛、柿を供える。神号の掛軸は文化元年 (一八〇四) 九月四日、神祇伯資延王の書によるもの。鉾二基は祭壇の左右に供奉するような形で飾られる (ただし、三日の日は龍鉾が巡幸に供奉するので、飾られているのは牡丹鉾のみ)。

なお、鉾鉾も含めて、お飾りの道具一式は、町内の各家に分散して保管されている。

その他

先述した吹散の由来を記した古文書のほか、天道神社神事と地蔵盆にかかわる町の入用帳が三冊ある。このうち天道神社神事にかかわる一冊は、明治三十九年 (一九〇六) から平成二〇年 (二〇〇八) まで書き継がれたものであり、これによって、龍鉾と吹散が明治三十九年 (一九〇六) に修繕されていることなどがわ



晒屋町 菊桐鉾（本多健一，平成 23.11.2）

かる。

菊桐鉾（晒屋町）

概要

剣鉾は、曳鉾である菊桐鉾（剣が長い）と、祭りには出さない鉾（名前はなく、剣が短じとがあり、ともに町の所有である。前者は二日の午前中に組み立てられるが、そのまま台車に載せられ、当番の家に飾られることはない。

菊桐鉾の剣は銘がなく、根元に鉄で補修がある。鋳受（額）の銘は表裏とも「八幡宮」、鋳のデザインは桐と菊、受金は桜である。鋳受（額）の銘は、天道神社祭神三神の八幡に対応したものであり、他の二町の剣鉾は残り二神に対応すると思われるが、どちらがどちらに対応するのかは不明である。

出さない鉾の剣にも銘はなく、根元に鉄で補修がある。鋳受（額）の銘は表裏とも「八幡宮」、鋳のデザインは桐と日月、受金は三つ巴である。

剣の入っている箱には次のような墨書きがある。蓋表「正八幡宮 天道大神宮

春日大明神 御釵鉾箱 晒屋町、蓋裏「明治三十一年 戊戌 拾月。また、鈴の入っていた箱には「延宝四年」と記されていた。延宝四年（一六七六）と古い年号であるが、鉾全体ではそれほど古さは感じられない。

棹と吹散は一本ずつあり、後者は白地に「晒」の字を金色で配してある。

トウヤ飾り

晒屋町のお飾りは、毎年町内を五組に分けた各組の持ち回りで行われる。準備や片付けのスケジュールは他の町とほぼ同じであるが、三日の夜に行う直会のこととは「ヒアゲ」という。

お飾りは神号が書かれた掛軸を中心とし、それに鯛、大根、人参、餅などを供える。

なお、剣鉾も含めて、お飾りの道具一式は、町内の各家に分散して保管されている。古文書史料などは特にない。

③ 資料と記録

天道神社には、古文書史料など特筆すべきものはない。

（本多 健二）

（参考） 周辺の剣鉾のまつり

若松神社 春季大祭

毎年五月五日

若松神社

滋賀県大津市大江二丁目

① 祭礼と由緒

地域の概要

若松神社は大津市大江二丁目に位置する。江戸時代には近江国栗太郡大江村に属していた。現在は神社周辺の大江地区、約千四百戸の氏神である。

祭礼次第

例年五月五日に神輿渡御などが行われる。なお、享保十九年（一七三四）の『近江輿地志略』によれば、当時の祭礼は旧暦四月六日に行われていた。

由緒と歴史

若松神社は、社伝によれば宝亀九年（七七八）の創建、祭神は斎主命（経津主命）である。一方、『近江輿地志略』によれば、当社は欽明天皇の代の鎮座という。

② 剣鉾と組織

大・中・小の鉾（若松神社）

概要

祭礼に出される剣鉾は三基あり、いずれも鉾振り（当社では「鉾差し」とは呼ばれない）が行われる。それぞれの鉾に特別な名はなく、大きい順に大、中、小と呼ばれている。それぞれに白、赤、紫の「幡」（吹散）がつく。吹散の意匠はいずれも三つ巴（当社の神紋）である。鏑はそれぞれ菊、鹿に紅葉、牡丹である。鏑の銘によれば、大の鉾は平成九年（一九九七）、中の鉾は同十四年の新調である。大の鉾の額

には「正一位若松大明神」と銘がある。

これらの鉾以外に、古い鉾が一基あり、剣の茎の表には「仙洞御所御寄附」、裏には「享保廿乙卯年八月十五日」と銘がある。この鉾を享保二十年に下賜されて以来、当社での鉾振りが行われるようになったという。

各鉾は神社の所有で、同社の倉に保管されている。なお、鉾はトウヤ飾りのように特別に祀られたり、飾られたりするようなことはない。

鉾差し（鉾振り）

鉾振りには、十二名の「若松神社鉾保存会」によって行われる。氏子の中から厄年（四十二歳）の男性が選ばれて保存会に入り、毎年四月上旬から境内で練習をする。何年か差し手を務めた後、新しい厄年の者が入ってきて十二人の定員を越えれば、順次退会となる仕組みである。

祭礼当日は朝九時から三本の鉾が出され、お祓いなどが行われた後、午前十時前から境内で鉾振りが始まる。大・中・小の順に舞殿の周囲を二周半して、参道を赤鳥居のところまで進む。参道では駕輿丁らが並んで囃す。差し手は首のあたりで、棹をしつかりと両手で支え、鈴を鳴らしバランスをとりながら歩く感じで、一本の鉾に三、四人つく。

次いで神輿への御霊遷しなどが行われている間、差し手は参道の赤鳥居と石鳥居の間を差して往復したり、休んだりして神輿を待つ。午前十一時頃になって神輿が出御すると、差し手は鉾を差しながら参道を先導するが、国道一号線との交差点付近からは鉾を倒して運ぶ。正午前に御旅所（大江四丁目、瀬田小学校隣の広場）に着いて休憩する。昼食をとった後、鉾はすぐに神社に戻り、蔵に納められる。差し手はそのまま午後にも巡幸している神輿に向かい、神輿昇きに参加する。神輿昇きにおいて、鉾の差し手は、いつでもどこでも自由に昇くことができる特権を有している。

なお、当社の鉾振りは「大江の鉾振り」という名称で、滋賀県の選択無形民俗文化財とされている。

③ 資料と記録

当社の由緒を記した「若松大明神縁起」をはじめ、膳所藩から所領を安堵された古文書などが残っており、『近江栗太郡志』に翻刻されている。

(本多 健一)



平成 23 年の鉾振り（本多健一，平成 23.5.5）

猿田彦神社 春祭

毎年五月三日

猿田彦神社

滋賀県草津市野路町

① 祭礼と由緒

地域の概要

猿田彦神社は草津市野路町に位置する。江戸時代には近江国栗太郡野路村に属していた。現在は、神社周辺の川之下集落（野路本郷の枝郷）約百五十戸の氏神である。

祭礼次第

例年五月三日に神輿渡御などが行われ、その際に後述する鉾が出される。なお、当社では神輿の舁手を「力士」と呼ぶ風習がある。



平成 24 年の鉾差し（本多健一，平成 24.5.3）

由緒と歴史

社伝によれば、猿田彦神社がある地は、矢橋街道と南大萱・南笠・矢倉を結ぶ街道との分岐点であり、寛永二年（一六二五）に伊勢国蒲田（現三重県伊勢市）から、現在の祭神、猿田彦神を勧請したという。しかし、当地の歴史の古さから考えて、それ以前から神祠があつたはずであり、現在は境内社である白命神社、稲荷神社との関連などが想定されよう（たとえば「白命」とは、当社にほど近い建部大社（天津市神領）の主祭神、「小碓命」（日本武尊）の転訛とも考えられる）。

② 剣鉾と組織

神剣（猿田彦神社）

概要

祭礼に出される剣鉾は一基あり、鉾差しが行われる。名称は「神剣」と呼ばれている。額の銘は、表が「猿田彦神社」、裏が「大正拾壹年四月新調」であり、鐙は雲に鶴、吹散は赤地に桐の意匠であつた。剣はボルトで剣挟と一体になってしまっており、茎の銘は確認出来ない。

普段、鉾は同社の倉に保管されている。なお、トウヤ飾りのように特別に祀られたり、飾られたりするようなことはない。

鉾差し

鉾差しは、氏子の中から厄年の者二名が選ばれて務める。差し手は差革に相当する特殊なベルト状の革製装身具を腰につけるが、棹を受ける部分に固定する金具がついているので、差しやすそうな印象がある。あらかじめ練習などは行わない。

祭礼当日は差し手が交代しながら剣鉾を差し、神輿を先導する。

（本多 健一）

生和神社 春祭り

毎年五月五日

生和神社

滋賀県野洲市富波乙

① 祭礼と由緒

地域の概要

生和（いくわ）神社は平安時代に創建され、重要文化財である現社殿は、弘長二年（一二六二）に現在地から西北にあたる小字高木より奉遷したと伝わる。付近には、三世紀後半の古鏡が出土した古富波山（ことばやま）古墳をはじめ、多くの古墳が点在し、富波庄（とばしょう）といわれたこの一帯は早くから開けた土地であった。

現在は、野洲市富波乙、富波甲となったが、近世期にはそれぞれ富波澤村、富波新町村と称され、これらに五之里村を加えた三か村を中心に氏子圈をもつ。特に富波澤村、富波新町村の両村は、ともに三つの領主に支配され、寺院も複数存在していた。この二つの領域は飛び地が存在するなど非常に入り組んでおり、明治七年（一八七四）には富波村として合併する。ただし、地租改正における合併後の反別帳の提出が難航を極め、旧澤村を富波乙、旧新町村を富波甲として、実質二か村の統治を嘆願しており、現在に至っている。富波新町村の東には、野々宮神社が鎮座し、生和神社の御旅所とされる。また、五之里村は、近世期において一領主の支配を受け、集落の東の角には妻之神社が鎮座する。

春祭りでは、物見神事、東ノ村神事、西ノ村神事、駕輿丁神事、与力神事、地下神事、古町神事、左座神事、右座神事と呼ばれる九つの神事組が奉仕し、各神事組では輪番で当番を務める。現在、物見神事、与力神事はそれぞれ富波乙の十三軒と四軒からなり、古町神事、地下神事は富波甲の三軒、八軒からなる。東ノ

村神事、西ノ村神事、駕輿丁神事は、富波乙と富波甲にまたいで十軒、八軒、六軒からなる。左座神事、右座神事は五之里の十八軒、二十二軒からなり、現在、右座は大組神事と呼ばれる。

祭礼次第

春祭りは五月四日から五日にかけて行われる。まず、四日は午前十時から例大祭が行われ、午後二時ごろより神輿の飾り付けが始まる。各神事組の当番宅では剣鉾が組み立てられるが、古町神事と地下神事では、竹と扇を用いた扇子鉾と呼ばれるものが組み立てられる。また、五之里では、十七時頃より妻之神社にて式典が始まり、拝殿にて直会が行われる。午後九時より生和神社で宵宮祭として御魂遷しが行われる。

五日は、東ノ村神事、西ノ村神事、駕輿丁神事の当番宅において早朝より神輿の準備をする。これらを唐櫃に収めたのち、会食が始まる。各神事組は午前十時以降、次々と剣鉾や扇子鉾を担いで生和神社に社参する。これらは、社殿前に立てられ、午後一時ごろまでには九基すべての鉾が並べられる。東ノ村神事、西ノ村神事、駕輿丁神事だけは、剣鉾とともに神輿を収めた唐櫃を玉垣内まで担ぎ、本殿へ神酒とともに神饌を供え、神子の舞が奉納される。奉納の順は特に決まっていない。午後一時過ぎには富波乙、富波甲、五之里の各太鼓が境内に並べられ、神輿の引き手が揃うと集合写真を撮影し、本殿で祭典が始まる。

午後二時ごろより御旅所である野々宮神社への御渡りが始まる。午後二時半ごろに野々宮神社へ到着すると祭典が行われ、神輿は午後四時ごろに生和神社へ還御する。神輿は富波乙、富波甲、五之里の順で引き当番を務める（平成二十三年（二〇二一）は五之里が当番を務める）。

行列次第

花車、子供神輿、太鼓（本年の引き当番による）、幸鉾一対（各神事組の剣鉾とは異なる）、神官、神輿、各神事組、太鼓（次年度の引き当番による）、太鼓（次々年度の引き当番による）の順で列する。現在、各神事組の剣鉾および扇子鉾は、野々宮神社への御渡り列せず、この間は境内に飾られたままである。

由緒と歴史

古来、四月の初巳の日、もしくは中巳の日に祭礼が行われていたが、明治後期頃、五月五日に変更したと伝わる。

② 剣鉾と組織

特徴

物見神事、駕輿丁神事、左座神事、右座神事の剣鉾は、紅葉と鹿を意匠にした銚をもち、銚受には「生和神社」とある。東ノ村神事と西ノ村神事も、紅葉と鹿を意匠にした銚をもち、銚受にはそれぞれ「東村」、「正一位生和大明神」とある。与力神事は、菊を意匠にした銚をもち、銚受には「生和神社」、裏面に「安永二歳癸巳四月吉日野洲郡富波村与力講」とある。地下神事、古町神事は、青竹の先に紙垂をつけ、三か所に扇を飾り付けたもので「扇子鉾」と称されている。

鉾差し

昭和五十年（一九七五）ごろまでは、各神事組によって鉾差しが行われていたが、技術的に難しいことから、現在は差し手がおらず、巡幸には列しない。



昭和 50 年代の鉾差し（藤村和夫氏提供）



各神事組の剣鉾（江藤弥生、平成 24.5.5）（下も同じ）



トウヤ飾り

各神事組では、ヤド（当家の玄関前に剣鉾が組み立てられ、特に当家飾りは見られないが、東ノ村神事、西ノ村神事、駕輿丁神事では五日の早朝より袴を着て神饌の準備をする。神饌を作る部屋には、外部の人を寄せ付けないよう幕を張るが、外から覗けるような切込みがある。神饌を準備する部屋には女性や神事組でない人は入れないため、この切込みは、神饌の準備の進行状況がうかがえるように作られたと伝わっている。駕輿丁神事の神饌は、大小二段に盛った白蒸しに、美濃紙で包んだ藁を巻きつけ、カワラケを伏せた状態で上にのせたもので、御膳にこの白蒸しと、美濃紙で包んだため、もろこ、ふき、柳箸を配置する。東ノ村神事、西之村神事は、白蒸しを台形状に盛って藁をまいたものを美濃紙で包んだ御供、鯖寿司（かつてはもろこ寿司）、ワカメ、スルメ、焼き豆腐、たら、ふき、柳箸を三膳ずつ用意する。これらは、生和神社の本殿と境内社である春日神社、日吉神社に奉納する。なお、地下神事では、東ノ村神事、西ノ村神事、駕輿丁神事のように幕も張らず、また生和神社への供餞もしないが、先の白蒸しにカワラケをのせたものと、ワカメ、もろこ、ふきをそれぞれ二膳ずつ用意し、一膳はヤドに、もう一膳は地下神事内で分配される。与力神事には「天明五巳年四月十三日」

と墨書された幕が残っている。

その他

西ノ村神事の神饌を収める唐櫃の蓋表には「天明二寅年御供持」と墨書されている。また、大組神事に残る明治二十五年（一八九二）五月七日付けの「神事大組員方則」には、同年に扇子鉾から剣鉾に新調したとある。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

今井穂積『生和神社史』（遷宮七百年大祭奉賛会、一九七四年）

古川与志継「生和神社の宮座と祭り―神事組関係史料より―」（『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』第十三号、野洲市教育委員会、二〇〇九年）

江藤弥生「野洲の剣鉾―生和神社の春祭りを中心に―」（『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』第十七号、野洲市教育委員会、二〇一三年）

（江藤 弥生）

鉾山神社 秋季大祭（亀岡祭）

神幸祭 毎年十月二十日

還幸祭 毎年十月二十五日

鉾山神社 亀岡市上矢田上垣内

形原神社 亀岡市横町

① 祭礼と由緒

地域概要

鉾山神社は天岡山（圓降山）の東麓に鎮座する延喜式内社で、創祀は和銅二年（七〇九）と伝わる。氏子地域は現在の鉾山神社および旧亀山城下町周辺の三十余町にあたり、中世期では矢田荘に含まれる。近世期は慶長十四年（一六〇九）の亀山藩成立より同領であり、三宅・古世・上矢田・中矢田・下矢田・荒塚・追分村および亀山城下町がその地域にあたる。亀山城下町は、天正年間（一五七三―一五九二）に明智光秀が亀山城を築城した時に形成され、その後、亀山を知行した歴代領主らによって整備が進められたという。それに際しては、近隣の九か村（相原・三宅・古世・中矢田・下矢田・荒塚・追分・安町・余部村）から人々を移住させ、商工業者と呼び集めて町並みを造成し、二十一の町が形成されたとする。亀山藩成立後はその城下町として存続し、町内に山陰街道が通じていることから宿駅としても機能した。

祭礼次第

秋季大祭は毎年十月一日から始まるとされ、他の氏子区域との境界の八か所に櫓が立てられる。御旅所の形原神社にも櫓と斎竹が立てられ、夜には形原神社において各町の宮総代と執行部の氏子総代、宮司らが参集し、当年の祭礼全体について会議を行う。

十八日には、鉾山神社において宮総代と氏子総代らによって神輿飾りが行われ、鉾山宮と八幡宮の神輿を蔵から出し各種の飾り付けを行う。また、同時に境内の

注連縄の掛け替え、祭礼行列の道具や衣装も蔵から出し、剣鉾もこの時に準備され、二十日の神幸祭に備える。神幸祭は鉾山神社より神輿と行列が氏子域を巡りながら、御旅所である形原神社まで渡御する。

二十四日には宵宮が行われる。旧城下の各町では山鉾が組み立てられてお囃子が演奏され、御旅所である形原神社周辺には夜店も立ち並び、多くの参拝人や見物人で賑わいをみせる。なお、近年は宵々宮も行われている。

二十五日は還幸祭で、形原神社より氏子地域を巡りながら、夕刻に鉾山神社へ到着し、その後に御霊遷しの祭典が行われる。二十六日の午前より神輿仕舞いがあり、剣鉾や諸道具の片付けを行い、その後の直会をもって祭礼は終了する。

行列次第

神幸祭・還幸祭の行列は、先陣太鼓―総列行司―先払―傘鉾―大櫓―王鼻―八幡宮列行司―太鼓―剣鉾―御宝―白幣―神饌箱―八幡宮神輿―供奉―鉾山宮列行司―太鼓―剣鉾―御宝―白幣―神饌箱―鉾山宮神輿―供奉―神職、の順で氏子地域を巡る。行列には宮総代や氏子総代、各町の代表らが加わる。

由緒と歴史

鉾山神社の創建は和銅二年（七〇九）と伝えられ、祭神は大己貴命であり、亀岡盆地開削の伝承がある。また、永万元年（一一六五）には、菅田別尊が天岡山に降臨し、八幡宮として祀った。現在では、これらを主祭神として祀り、社殿も並列して建立されている。

中世期は、矢田荘の鎮守として栄え、様々な祭礼行事が行われていたと考えられるが、天正年間に丹波攻略を行った明智光秀によって、祭田などが奪われたために祭礼は廃れ、社殿も荒廃したという。その後、亀山城主となった小早川秀秋、前田玄以らは社地における竹木伐採などの禁制を出して保護し、初代亀山藩主となった岡部長盛は現社地に社殿を造営している。こうした歴代領主らの崇敬もあり、社殿は再興することとなった。このようななか、途絶えていた祭礼の復興を願う人々が多くなり、亀山郷長（町年寄）の杉原守親らが尽力して神輿や諸道具を揃え、延宝九年（一六八一）に祭礼を執行するに至った。現在行われている神幸

祭・還幸祭の形態については、これが起源とされる。

なお、今日にみられるように山鉾が祭礼に加わるようになったのは延宝九年の復興以降であり、十八世紀半頃とされる。藩主在城時には巡幸経路が変わり、城内へも神輿や山鉾が入ったという。こうした藩主の庇護のもとで、鉾山神社は城下町の総鎮守的なものとなり、その町民はもとより領主の意向も反映される祭礼の形態となった。

② 剣鉾と組織

剣鉾（鉾山神社）

概要

剣鉾は二基あり、それぞれ銚受が鉾山宮と八幡宮の神額となっている。鉾山宮の銚は兎、八幡宮は鳩の意匠である。吹散はともに古代紫で、鉾山宮は兎、八幡宮は鳩を染め抜く。先に述べた杉原守親が延宝九年の祭礼復興時に著した『丹波国桑田郡矢田郷矢田社之祭法』には、神幸の行列に「御矛」とあるのをはじめ、祭礼道具を列挙した箇所などにもその記事が散見され、この当時には剣鉾が行列に加わっていたと考えられる。

昭和十九年（一九四四）以降、剣鉾の巡行は戦後の混乱した社会情勢の影響などもあり、一時途絶えることになった。この間については、経年変化による剣鉾の状態を考慮しつつ、神幸祭時には御旅所である形原神社へ直接運んで鉾を組立て、現在と同じく神輿と一緒に拝殿内で飾っていた。

このような状況は長らく続いたが、神社側としても剣鉾を行列に復して古来よりの形態に戻すことを志向し続けてきた。そうした機運はしだいに高まって平成五年（一九九三）ごろに専用の台車を製作し、平成六年（一九九四）からは神幸祭・還幸祭で再び巡行するようになり、その後に剣鉾の修理を行った。また、かつては鉾差しが行われていたことからその復活も目指し、以前より宮司同士で親交のあった栗田神社（京都市東山区）の協力を得て、同社剣鉾奉賛会より鉾差

し六名を招くことにより、平成九年（一九九七）からは還幸祭の時に差し鉾として巡行し、各所で鉾差しを披露している。なお、神幸祭の時には鉾を差さず、台車に載せられて巡行している。

鉾差し

還幸祭の当日に、先述の通り各所で鉾差しが披露される。巡幸時はそれぞれ二基の神輿を先導しているが、差す時は、八幡宮神輿前に二基が前後に並ぶかたちとなる。鉾差しは平成九年に復興したが、それ以前の様子を記憶している氏子によると、道路の各辻で差す「ツジサシ（辻差し）」が行われて、剣を振って、鈴の大きな音を出していたという。また、戦前には保津（亀岡市保津町）から鉾差しが来ていたとも伝わっているという。

鉾差しによると剣鉾の棹の長さが短く、剣の反りも小さくて差すのが難しいということである。

トウヤ飾り

トウヤはない。剣鉾は他の祭礼道具とともに鉾山神社の諸道具を入れる蔵に保管されており、神輿飾りの時に合わせて宮司により組み立てられる。組立て後は剣鉾だけを飾ることはせず、他の祭礼道具とともに社務所にて神幸祭当日まで保



柳町通りでの鉾差し（犬持雅哉、平成 22.10.25）

管される。

神幸祭で各地を巡行した二基の剣鉾は、鉾山・八幡宮神輿とともに御旅所である形原神社に到着する。両神輿は還幸祭当日まで形原神社の拝殿内に並んで安置されるが、剣鉾も同所正面の左右に、解体せずそれぞれ立てて飾られる。還幸祭の当日は、各所での鉾差し披露に備えるため、鉾差しらによって出発前に剣鉾の調整が行われる。巡行が終了して鉾山神社に戻ってくると、剣鉾は社務所などに置かれ、ほどなくしてから宮司により片付けられる。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

上田正昭監修・民俗祭事調査会編『民俗祭事の伝統―丹波・亀岡のまつり―』（角川書店、一九九二年）

亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史』資料編第四卷（亀岡市、一九九六年）

亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史』資料編第五卷（亀岡市、一九九八年）

亀岡市文化資料館『丹波の祭礼と風流』（亀岡市文化資料館、二〇一一年）

剣鉾祭礼記録・古文書

「丹波国桑田郡矢田郷矢田社之祭法」「矢田祠記別録 乾」「矢田祠記別録 坤（抄）」

「矢田神社神事勤方記」「矢田両社御祭礼之節取計覚」「正徳五年矢田祭礼行列帳」「巳年（天明五年カ）矢田祭礼行列帳（抄）」「未年（天明七年カ）矢田祭礼行列帳（抄）」「寛政三年矢田祭礼行列帳」「末年矢田祭礼行列帳（抄）」（亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史資料編第五卷』亀岡市、一九九八年に所収）

（犬持 雅哉）

請田神社 例祭（保津の火祭り）

毎年十月二十日（宵宮・神幸祭）

十月二十一日（本祭・還幸祭）

請田神社 亀岡市保津町立岩

八幡宮社 亀岡市保津町宮ノ上

① 祭礼と由緒

地域の概要

請田神社は保津川（稚川）左岸、保津峡の入口にあたる場所に鎮座し、氏子地域は現在の亀岡市保津町全域である。保津地域は、古来より保津川を利用した筏流しによる材木輸送の中継地であった。中世期では保津筏師荘・保津保の範囲とされ、筏流しに従事する筏師が存在していたことが知られる。近世期になると、豊臣秀吉が筏師に諸役免除を与えることで材木の確保と円滑な輸送を図っている。

こうした筏師が活動していた地域では、筏流しの流通機構が整備されたのちも影響力を持ち続けており、保津には筏問屋が置かれている。また、慶長十一年（一六〇六）より開始された舟運においては保津にも舟着場が設けられ、物資の中継港として機能した。このように、保津地域は筏流しと舟運が行われていた保津川水運の要衝となっていた。

慶長十四年（一六〇九）の亀山藩成立後は同領となり、その当時は集落を流れる愛宕川で南保津・北保津村に分かれていたが、元は一村であったことから諸事は合同で行った場合が多いようである。

現在では地区を八つに分けており、請田神社の宮総代をそれぞれ一名出す。

祭礼次第

例祭は十月二十日に宵宮（神幸祭）、二十一日に本祭（還幸祭）が行われる。二十日は、役員らが午後三時に八幡宮社に参集し、請田神社頓宮・八幡宮社本殿前に

て神事が行われる。その後、八幡宮社から南東約二キロメートルにある請田神社へ、祭神を迎えるための祭礼行列が午後五時に出発する。この時、剣鉾、花傘などは少し時間を空けて、八幡宮社と請田神社の中間点にある御旅所へと向かう。御旅所がある場所は莊園政所（ソウマンド）と呼ばれており、中世期には莊園経営の拠点である政所があったとされる。御旅所では、請田神社の祭神を迎えた祭礼行列が到着するまで待機となるが、その間には各地区が用意するお迎え高張（提灯）も集まりはじめる。

請田神社より祭神を迎えた行列が御旅所に到着すると、同所にある神木の前で神事が行われ、待機していた剣鉾、花傘、お迎え高張などを祭礼行列に加え、午後七時に八幡宮社に向けて出発する。保津町域を巡行しながらの道中では、各所で鉾差しが行われる。八幡宮社に到着すると、境内にある請田神社頓宮で神事が始まり、社殿前の火床で焚かれた大火の周囲を、榊持ちの稚児、太鼓や赤熊などが三度回る。この場面が見所の一つであり、保津の火祭りとして多くの見物人で賑わう。なお、神事は請田神社の祭神を頓宮へ遷したのちに終了となる。

二十一日の本祭（還幸祭）では、午後三時より八幡宮社境内にて神事が開始され、午後四時に請田神社に向けて還幸の祭礼行列が出発する。剣鉾も行列に加わるが、巡幸路途中の保津川沿いで見送るかたちとなる。そして、請田神社での神事が行われ、祭礼は終了となる。

行列次第

宵宮（神幸祭）における祭礼行列は、八幡宮社↓請田神社↓御旅所（莊園政所）↓八幡宮社という行程で保津町内を巡行するが、剣鉾、お迎え高張、花傘などは御旅所から行列に加わる。これらを合わせた御旅所から八幡宮社までの行列次第は、宮総代代表―お迎え高張（各区）―花傘（八基）―松明―高張（請田）―警固―太鼓赤熊―太鼓かき―高張（八幡）―塩水―大麻―高張（請田）―剣鉾（請田宮新鉾）―剣鉾（八幡宮新鉾）―高張（八幡）―剣鉾（請田宮旧鉾）―剣鉾（八幡宮旧鉾）―高張（請田）―松明―御弓―御太刀―高張（八幡）―警蹕（二人）―高張（請田）―榊持ち（八人）―高張（八幡）―御幣―祠掌―神座―松明―警固―御供、の順である。

本祭(還幸祭)の八幡宮社から請田神社へと向かう祭礼行列では、花傘、高張、松明などは加わらない。なお、剣鉾は本祭の祭礼行列に加わるが、巡幸路の途中(保津川沿い)までである。

由緒と歴史

請田神社は保津峡の入口左岸に鎮座し、祭神は大山咋命と市杵島姫命であり、創建は和銅二年(七〇九)ともされる。永禄年間(一五五八―七〇)に兵火により焼失し、宮ノ上現在の八幡宮社境内地の頓宮に遷座した。そして寛永年間(一六二四―四四)に現社地に復したとされる。

八幡宮社はこの復座した時の創建とされる。また、丹波国桑田郡細川村(京都市右京区京北)で祀られていたが、大洪水によつてこの地に流れてきたので、村上三右衛門という人物が社殿を建立したともいわれる。請田神社の頓宮は、八幡宮社境内に社殿があり、祭礼は当所で行われる。

② 剣鉾と組織

剣鉾(請田神社・八幡宮社)

概要

剣鉾は請田神社・八幡宮社とも新旧二基ずつ、計四基あり、それぞれ鋸受が請田宮と八幡宮の神額となっている。新旧とも宵宮(神幸祭)、本祭(還幸祭)での祭礼行列に加わる。旧鉾は江戸時代に作られたものと伝えられ、新しい剣鉾は明治二十二年(一八八九)に個人で造り、後に神社へと献上したとされる。棹は昭和四十年代中頃に、有線放送用の線が引かれたため鉾差しに支障がでたことにより、



宵宮で巡行する剣鉾(松田有紀子, 平成 22.10.20)



本祭(還幸祭)の午後、保津川の畔で行列を見送る剣鉾(松藤輝, 平成 22.10.21)

そののちに一メートル程短くしたという。

鋸は平面的であり、特に旧鉾は簡素な造りである。請田神社の新しい剣鉾の意匠は菊で、吹散は紫色のものをを用いる。一方の八幡宮社の新しい剣鉾は松の意匠で、赤色の吹散である。両鉾とも八幡宮社の倉庫で、他の祭礼道具とともに保管されている。

鉾祭りの次第

剣鉾の組立ては宮総代らによつて、宵宮(神幸祭)の前日に行われる。組み立てた後は、八幡宮社拜殿の後方に設置され、宵宮(神幸祭)の祭礼行列に加わった後にも同所に戻される。翌日の本祭(還幸祭)の祭礼行列に同行したのちも八幡宮社に戻され、例祭終了後の二十二日に宮総代らによつて解体される。

鉾差し

鉾差しはかつて保津町内の各区の輪番で担当していたという。しかし、少子高齢化の影響もあって、近年では平成十一年に保津小学校に通学する児童の父親の有志らが結成した「保津おやじの会」で活動する諸氏が中心となり、地域の住民

らで鉾差しを担当している。鉾の差し方については、地域に伝わる作法はないようだが、上だけを見て差す東山・左京区あたりの差し方でもなく、梅ヶ畑や嵯峨祭の差し方のような足運びでもない。また差し袋は革製ではなく、布製を用いている。

なお、鉾鉾は、宵宮（神幸祭）での御旅所（荘園政所）から八幡宮社までの巡行中の各所と、本祭（還幸祭）で鉾鉾が祭礼行列から離れる場所（保津川沿い）において、差される。

③ 資料と記録

調査報告・論文・地域誌

上田正昭監修・民俗祭事調査会編『民俗祭事の伝統——丹波・亀岡のまつり——』（角川書店、一九九二年）

亀岡市史編さん委員会編『新修亀岡市史資料編第四巻』（亀岡市、一九九六年）

保津町誌編纂委員会『ふるさと保津』（保津町自治会、二〇〇一年）

映像記録

『保津町の火まつり』（企画・制作／NPO「京都の文化を映像で記録する会」二〇〇七年）

（犬持 雅哉）

用語解説

「有形の事象に関するもの」

剣鉾（けんぼこ・けんぼこ）

本書でいう剣鉾とは、剣鉾が持つ本来の意味と形状、祭りの形態を重視し、祭礼行列に立てて巡行する鉾で、鉾先の剣が前後に振れ、鈴が鳴らされるものとする。これは差し鉾ともいう。

剣鉾の形状として必須の条件は、弾力性に富み、光輝く剣が鉾先にある。その剣先が左右に張った菱形であること、鈴（りん・れい）とよばれる釣鐘型の鳴り物が吊られていることである。多くの場合、棹（長柄ともいう）の長さは三〜五メートルあり、剣と棹の間に額状、耳状の鍔金具がつく。また、棹の上部には吹散（見送りなどともいう）という幡がつく。

典型的な剣鉾とは、こういった特徴ある形状をもつ、差し鉾であるとともに、所有・護持の形態にも特徴がある。すなわち、神社所有ではなく、氏子の有志が護持しているという点である。

地域において、また古文書などの史料上では、鉾の鍔金具や棹の蒔絵などの意匠に由来する呼称で呼ばれることが多く、剣鉾という呼称はほとんどみられない。むしろ、剣鉾とは、昭和六十年頃から、京都に特有の祭具を示す学術用語として普及し始めたが、今回の京都市内における悉皆的な調査の成果として、冒頭のとおりに改めて定義することになった。

差し鉾（さしぼこ・さしぼこ）

典型的な剣鉾で、差す鉾のこと。古くから地域で呼ばれていたり、歴史的にも使用されてきたりした呼称である。史料上には「指鉾」「振鉾」などと書かれていることもある。

昇き鉾（かきぼこ・かきぼこ）

剣鉾と同様の形状をもっているもので、当初より木枠などに立てて神輿のように轆（ながさ）で昇く形状のものを昇き鉾とする。もともとは地域の呼称や歴史的

用語ではないが、「剣鉾」と同様に次第に、広く使われ始めているが、ここにおいて改めて定義することとする。

曳き鉾（ひきぼこ・ひきぼこ）

剣鉾と同様の形状をもっているもので、当初より木枠などに立てて、車輪をつけて曳いて巡行するものを曳き鉾とする。もともとは地域の呼称や歴史的用語ではないが、剣鉾と同様に次第に、広く使われ始めているが、ここにおいて改めて定義することとする。

荷い鉾（にないぼこ・にないぼこ）

地域によつては、荷い鉾という表現を聞くことがある。鉾を寝かせて運ぶ場合や、先述の昇き鉾を差す場合が考えられる。前者の場合はさらに、鉾差しがおらず、剣鉾差しを行わずに鉾を寝かせて運ぶ場合と、剣鉾差しを披露しつつ、移動時に寝かせて運ぶ場合の形態を指す場合があり、荷い鉾という表現に一定の評価はできない。したがって、あくまで地域で使われている呼称として使用するにとどめ、ここでは定義しない。

「無形の事象に関するもの」

剣鉾差し（けんぼこさし・けんぼこさし）

剣鉾が巡行すること、もしくは巡行する祭礼行事を、剣鉾差しという。なお、一乗寺八大神社の剣鉾差し、西院春日神社の剣鉾差し、嵯峨祭の剣鉾差し、梅ヶ畑平岡八幡宮の剣鉾差しが、平成二年（一九九〇）四月に京都市の無形民俗文化財として登録されており、その際に作られた語であると考えられる。

剣鉾差しといっても、巡行中、常に鉾を差しているわけではなく、剣鉾差しを披露する時以外は、寝かせたまま運ぶ。その際は、鉾頭を前にして、先頭は剣を持ち、二人目は棹の上端部、三人目は棹尻近くを肩に乗せて運ぶ。

剣鉾のまつり（けんぼこのまつり・けんぼこのまつり）

剣鉾（差し鉾）が巡行する祭礼行事を中心に、昇き鉾や曳き鉾などの形態で剣鉾が巡行するものや、トウヤ宅や会所、あるいは神社、御旅所などでお飾りされるなど、祭礼行事において剣鉾が奉斎されるものについては、本書では「剣鉾のま

つり」と表現する。

劍鉾とは、地域での呼称や歴史的用語ではなく、**劍鉾のまつり**という表現もこれまでなかった。しかし、**鉾を差す**ことや、**鉾仲間**や**鉾町**を形成するという本質的なことよりもむしろ、**鉾**の形状が、菱形に尖った**剣先**であるという外形的かつ視覚的な特徴に共感して、祭具として取り入れていったという歴史的な土壌がある。地域によっては、むしろ**劍鉾**を差すことよりも、**劍鉾**の形状の**鉾**を保持することを重視している。このような、本書で取り扱った事例、つまり広義の**劍鉾**を伴う祭りを総称する語として、本書では**劍鉾のまつり**と表現する。

鉾差し (ほこさし)

劍鉾差しにおいて、**鉾尻**を支え持つて巡行する技能者を**鉾差し**とする。古くから地域で呼ばれていたり、歴史的にも使用されてきたりした呼称である。ここでは、単に力に任せて**鉾**を立てて運ぶだけのものは、**鉾差し**とは規定しない。

差す・振る (さす・ふる)

劍鉾差しにおいて、**鉾差し**がおこなうパフォーマンスについては、**差す**または**振る**といわれる。これは、地域によって、技術が異なることによるため、統一はしない。本書では原則として**差す**を使用するが、地域の呼称として**振る**などの表現をすることもある。

鉾町 (ほこちやう)

劍鉾を護持している組織が、町単位である場合、その町を**鉾町**とする。

鉾仲間 (ほこなかま)

劍鉾を護持している組織が、有志である場合、その組織を**鉾仲間**とする。古くから地域で呼ばれていたり、歴史的にも使用されてきたりした呼称である。ただし、西院の春日神社のように、**鉾仲間**が町単位で組織されている場合もある。

【その他】

鉾 (ほこ)

劍鉾を含む、さまざまな形式の**鉾**の総称として使用する場合と、一般的な**手鉾**を示す場合とがある。

幸鉾 (さいのほこ)

神輿の巡幸列には、**劍鉾**のほかにも様々な**鉾**がみられる。史料上には「**鉾**」、「**祭鉾**」、「**幸鉾**」、「**犀鉾**」などがみられるが、このうち**幸鉾**はサイホコ、サイノホコなどと呼ばれ、**劍鉾**とも**手鉾**とも違う、特異な形をしていることが多い。

手鉾 (てほこ・てぼこ)

神輿の巡幸列などにみられる、通常の祭具としての**鉾**を指す。**鉾**の刃は木製で銀色に塗られていることが多い。刃は太く、**剣先**が左右に張ることはない。鈴はつかない。歴史的に使用されてきた呼称である。史料上は、**鉾**、**御鉾**と表記されることが多い。

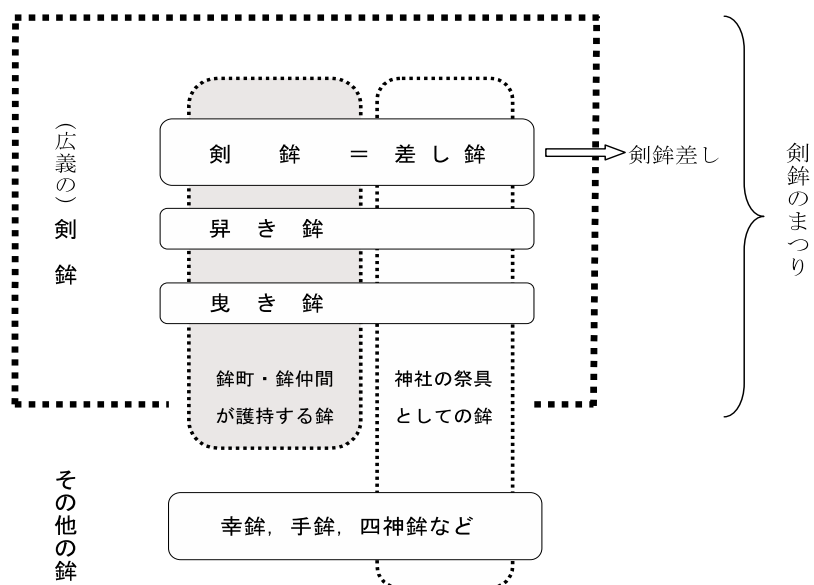
四神鉾 (ししんほこ・ししんぼこ)

祭礼の儀礼の場に立てたり、巡行列に伴ったりする、四本組の**鉾**で、青龍、白虎、玄武、朱雀それぞれの図様をあしらった丈の短い幡がつく。歴史的に使用されてきた呼称である。主に神社の祭具として使用されてきた。

(注) ここで解説した用語は、本書を活用するにあたって、頻出する語について説明するものであり、いわゆる民俗語彙の解説ではない。なかには、定まった評価や定義がなされていないものもあることをお断りしておく。

(福持 昌之)

剣鉾に関する概念図



※ 典型的な剣鉾とは、差し鉾でかつ、鉾町・鉾仲間が護持する鉾である。

執筆者一覧

植木 行宣
元京都学園大学 教授

第六章

青江 智洋
京都府立山城郷土資料館資料課 技師

伊ヶ崎 鷹彦
花園大学文学部文化遺産学科 助手

犬持 雅哉
南丹市立文化博物館 学芸員

今中 崇文
国立民族学博物館 外来研究員

上田 喜江
愛荘町立歴史文化博物館 学芸員

内田 みや子
関西大学大学院文学研究科 博士課程後期

江藤 弥生
野洲市歴史民俗博物館 市史専門調査員

大野 啓
佛教大学 非常勤講師

柿本 雅美
佛教大学宗教文化ミュージアム ポスト・ドクター

河野 康治
京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程

工藤 紗貴子
株式会社文理 第二編集部

佐藤 直幸
大阪体育大学浪商高等学校・中学校 講師

神村 和輝
奈良県地域振興部文化振興課 嘱託職員

鈴木 耕太郎
京都西山高等学校 非常勤講師

土居 浩
ものつくり大学 准教授

東城 義則
総合研究大学院大学文化科学研究科地域文化学専攻 博士後期課程

中尾 芙貴子
立命館大学大学院文学研究科 博士後期課程満期退学

中野 洋平
国際日本文化研究センター 研究部 機関研究員

長谷川 燮悟
日本学術振興会 特別研究員PD

秦 和也
京都教育大学大学院教育学研究科 修士課程

福持 昌之
京都市文化市民局文化財保護課 文化財保護技師

藤本 愛
奈良女子大学大学院人間文化研究科 博士研究員

藤原 喜美子
流通科学大学 准教授

本多 健一
立命館大学 非常勤講師

松田 有紀子
立命館大学大学院先端総合学術研究科 一貫制博士課程

村上 忠喜
京都市文化市民局文化財保護課 普及調査係長

八木 透
佛教大学 教授

山路 興造
民俗芸能学会 代表理事

吉村 旭輝
和歌山大学紀州経済史文化史研究所 特任准教授

渡部 圭一
早稲田大学人間科学部 非常勤講師

杉山 純平
佛教大学大学院文学研究科 博士後期課程

地図作成(第六章)

※執筆分担は各文末に表示



文化庁
Agency for Cultural Affairs

平成 25 年度文化遺産を活かした地域活性化事業

京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会編

京都 剣鉾のまつり

調査報告書 2 民俗調査編

発行日 平成二十六年三月三十一日

発行者 京都の民俗文化総合活性化プロジェクト実行委員会

〒六〇四-八〇〇六 京都市中京区河原町通御池下る

下丸屋町三九四

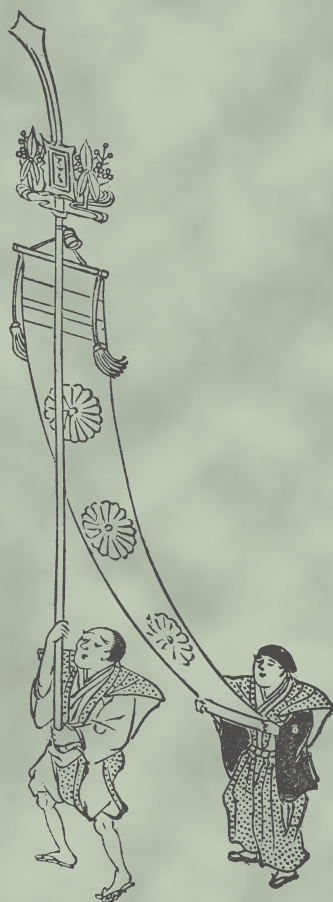
Y.J.K.ビル2階 京都市文化財保護課内

TEL 〇七五-三三六六一四九八

FAX 〇七五-二二三-三三六六

編集協力 株式会社シー・ディー・アイ

印刷・製本 協和印刷株式会社



平成 25 年度文化遺産を活かした地域活性化事業

文化庁